

138
8
44

東 京 圖 書 館			
和 書 門	類 書	三 函	二 架
類	類	號	冊
八	七	一	一

大 藝 類 纂

東 具 志 上

神 原 芳 野 編

卷 七

不許帶出

文藝類纂卷七目錄

文具志上

紙

紙論

造法概略

造紙植物圖說

古紙考證

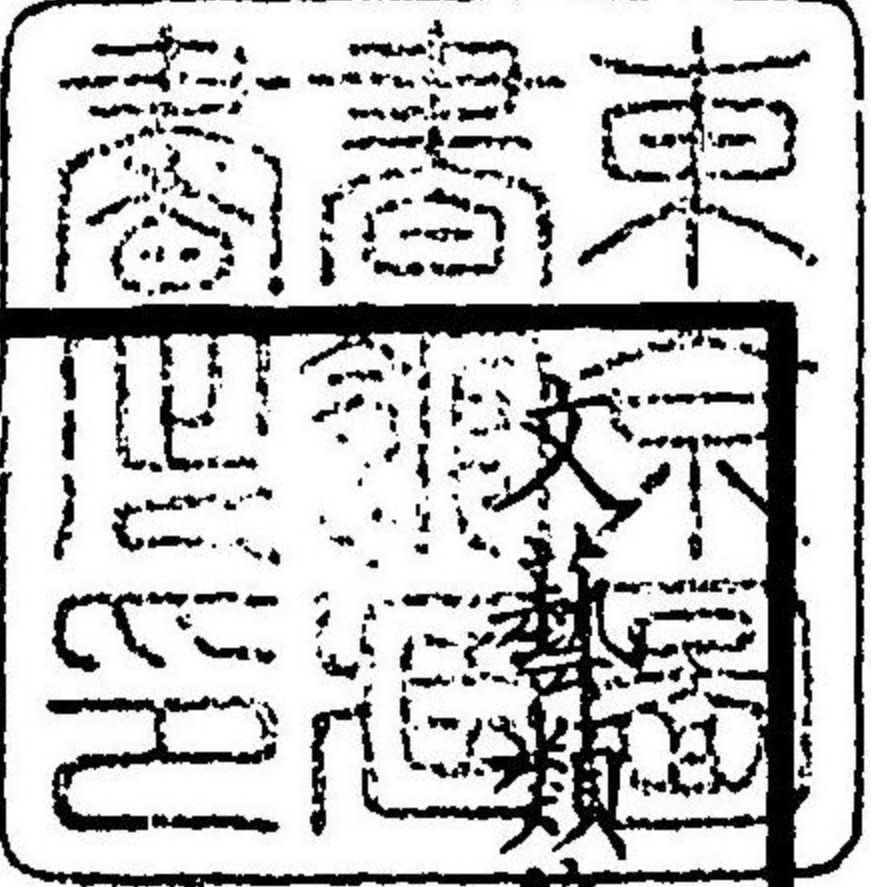
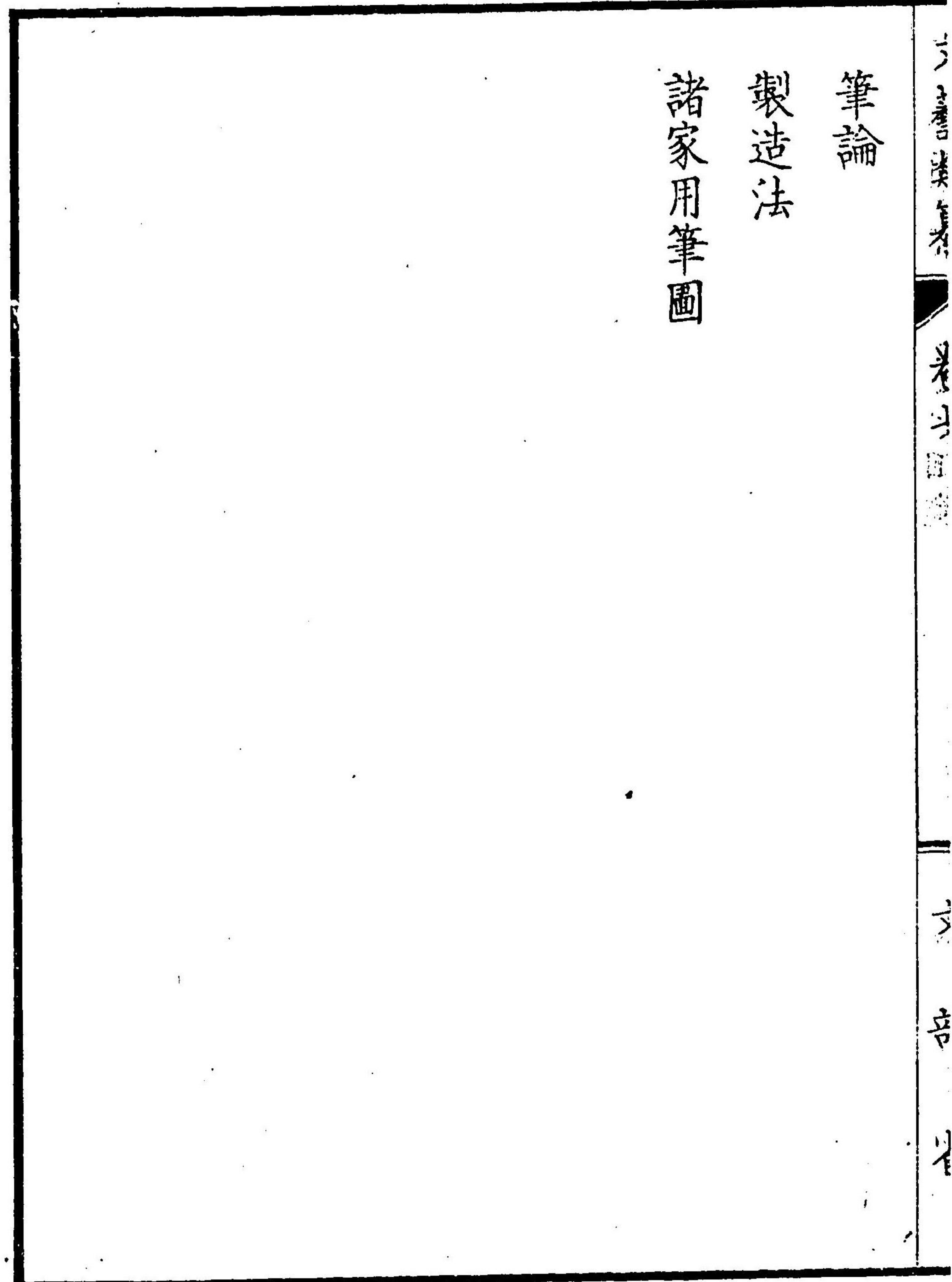
諸國產紙

筆

筆論

製造法

諸家用筆圖



類纂卷七

文具志上

紙

名稱

加美 倭名抄文書具兼名苑注云紙古文作帑加美

料紙 延喜式○世尊寺行能の書に據れ

ハ熟帑の名おまゝと只用料の義として總名と以

創製

我國、紙と造まる始詳ふらひ、日本紀推古天皇十八年春三月、高麗王貢僧曇徽法定、曇徽知五經、且能作彩色及紙墨、并造碾磴、蓋造碾磴始于是時歟の文を以て推古の

神原芳野 編

朝より始まるの説あまとも、蓋造碾礮云々の語、紙墨は是時非らざること著し、然まとも上古の紙何と以て造まりし、考ふべきれし、其後天平勝寶の頃此者へ今現存する所大和法隆寺、同東大寺、天平年間の者多し、麻紙楮紙等よりして精粗あり、又寶龜元年三月百萬塔に納る所の無垢淨光陀羅尼等、往々存する者あり、續日本紀卅其質堅厚にして、今世所謂ハレキラズの如き横紋あるは、抄ける時の簾痕あるは、其色茶褐色よりして、黄と帯ひするは、潢帛の年と經一者なると、潢帛は古昔蟲蠹を避んる為、黄柏煎汁にて染る者あり、○清方以智の通雅而してこまを巻く事細く、上下二寸は盈とさる詳あり

と以て、こまを展て手と離せ、即時は再巻局に、是千歳と經まとも、堅硬あると以てあり、按は是楮皮紙至古ある者ふるく、楮と以て造るは、蓋此時は先とちて創製せしかるへ、其後延喜式に至りては、麻紙、斐紙、穀紙等と載せ、且其製造法も粗見く、三種後其前已は、職員令義解圖書寮の下に、造紙手四人ありて、掌造雜紙とらまると、其法詳あり、且紙戸ありて、戸數を注せりといへとも、集解三に釋云別記云、紙戸五十、山代國自十月至三月役一丁、爲借品部免調雜徭也、古記死別是調と雜徭と免して、紙を造らしむる平民あり、而して賦役令に、正丁の調と載せて、其調、副物と

紙六張 長二尺 廣一尺 りり、其後漸々用途の繁きと以てり、延喜の

際に至りてハ、圖書寮式ニ、凡年料所造紙、二萬張 廣二尺二寸 長一尺

二料、紙麻小二千六百斤、一千五百六十斤穀皮、一千 藁五百

圍、河内國 絹一疋二丈、篩口料 紗一疋一丈七尺、敷漉 簀十枚、紙漉

料、長二尺四寸 廣一尺五寸 二枚、漉例紙料 長、調布 五端四尺

絞紙料、二端一丈 篩口料 二丈造、砥 一顆、鋏 二口、小刀 六枚、

四枚、切麻料 各長一尺二寸、木連 灰十六斛、中 其他漉紙槽四

隻、各長五尺二寸 深一尺 洗麻槽、淋灰槽、白櫃 等あり、又軋紙

板六十枚、尺各長一丈二尺 廣一 等あり、此器類と參考されハ、

其製造粗見 ろくろ、木連、後世木連と稱する者 ろくろ、俗

よイヌタブ、キマンチエウ、あど稱する物にて、此蔓草ハ灌

木ニ似たる大なる者あり、此莖を焚きて灰を淋し、滑

して且収漚するは用や ろくろ、へ、且簀 上ハ紗と敷きて

抄く故に、古昔の紙ハ簀文を印せざる者あり、其他諸國

より貢する所の紙、主計寮式上ハ、諸國の中男作物と載せて、

紙と貢する國ハ、伊勢、尾張、參河、駿河、甲斐、相模、武藏、安房、上

總下總、常陸、近江、美濃、信濃、上野、下野、若狹、越前、加賀、越中、越

後、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、播磨、美作、備後、安藝、周

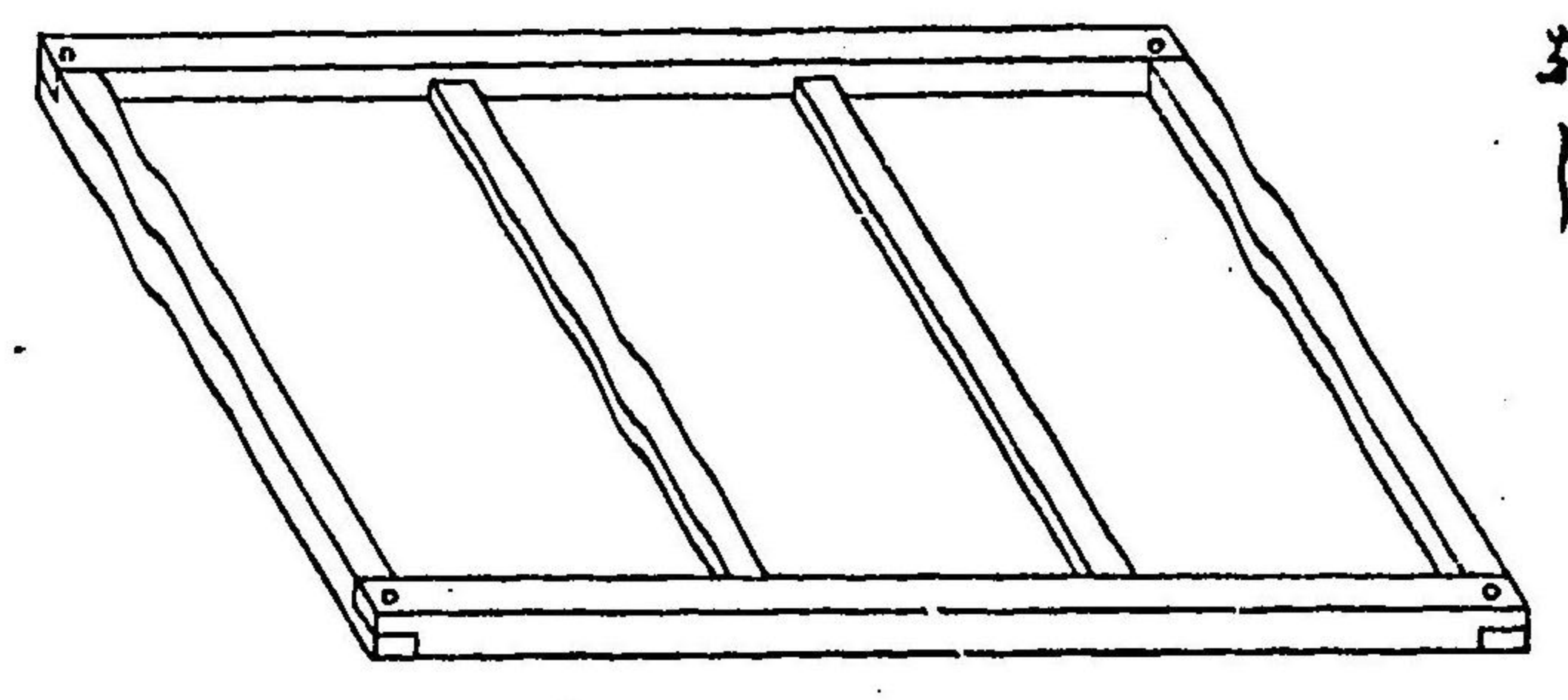
防、長門、阿波、讃岐、伊豫、土佐、大隅、薩摩、其他肥前ハ斐皮、日向

ハ斐紙、大宰府筑後豊後ハ穀皮と貢す、并ハ抄紙の料あり

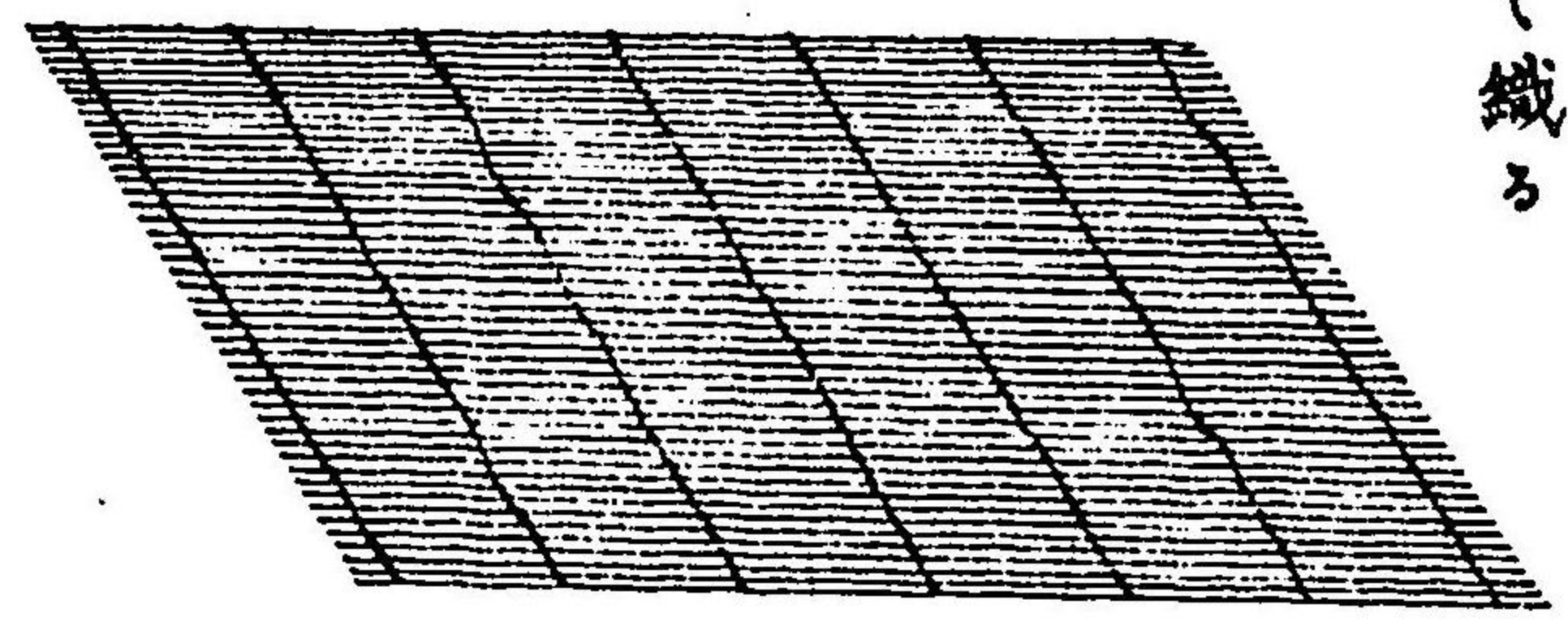
然まとも、其頃の紙へ、方今の何紙あると知らず、からん、只
源順、和名抄、文書具、紙兼名苑注云紙古文作帛和名紙
有色紙、檀紙、穀紙、紙屋紙、阿苔紙、斐薄紙等名通本屋上一の紙字と奪せり
と、まへ延喜の頃已に此數色の紙あり、なり下よことま
と考證して略其概と注し

造法概略

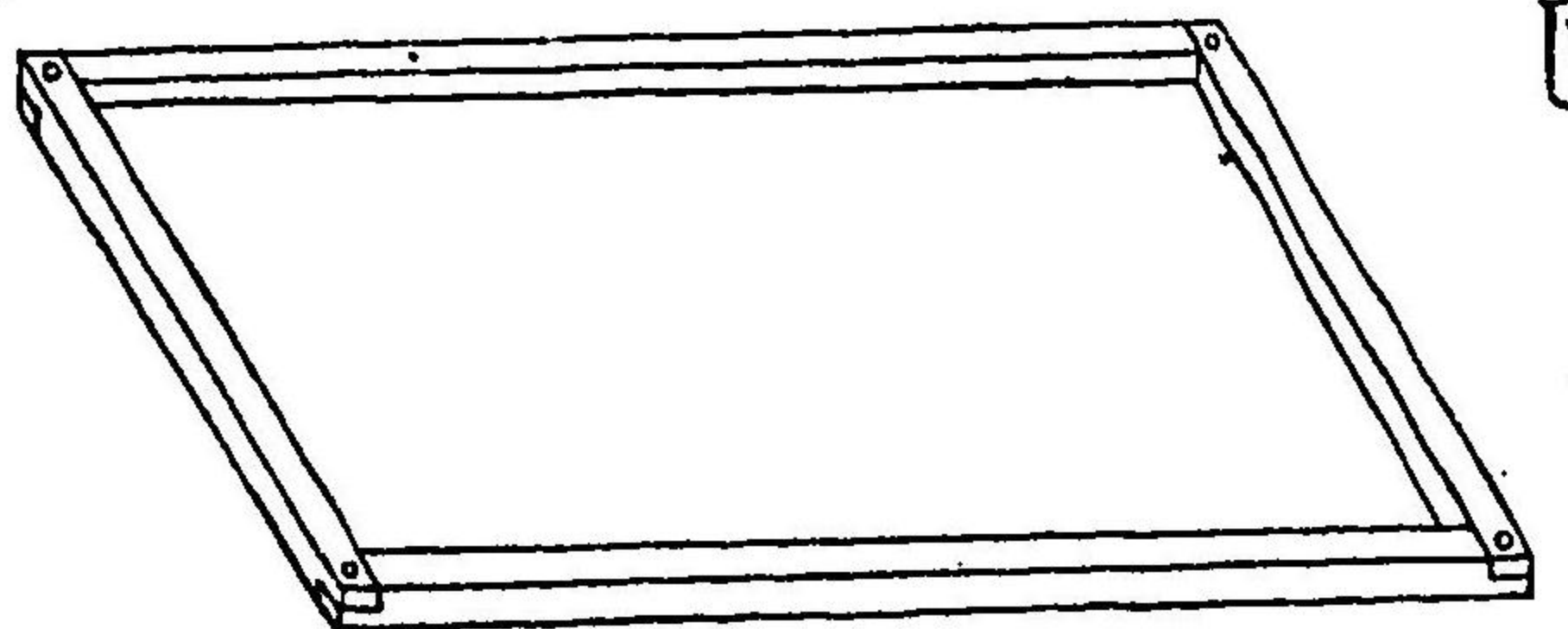
下匣 底あり



簾 細竹を織る



上匣 底あり



前の下匣に簾を敷き、楮皮敲碎し、
ろを、水と和し之を撈ひ入ると、上匣と
以て壓し、水と去り、簾と連ねて、下匣
より出し、又別簾を敷きて抄き成を
なり、

楮皮を敲碎ける棍



造法

楮を伐り、これを二三尺許に切り、釜中に蒸して、其
皮を剥き、其麤皮を削り去り、其麤皮亦楮皮紙と造るに用かる大砧上りて
敲き、細碎し、黄蜀葵根の粘液を加へ、水と和して、大槽
中に流し、空底の木匣に細簀を敷き、槽中より、適宜に厚薄
を量りて、こまを抄きあり、抄きて其簀を上げ、數枚こまを
重ね置き、水を漉り盡して後、其紙を簀より剥き、稻稈筥に
て、これを板に貼し、乾くを待ちて、こまを重ね収む、板に貼
せし所、其面平あり、これを表とし、猶委曲に紙漉重寶記あ
りて、これを記せり、こまは只その概略をいふのみ、古製の
と見るに、簀文あきと、板スキありといふ、然るとも圖書式
に據ると、簀上は紗を敷きて、水を漉し造ると見え、これに

實文ふき、布ある、因とり、板にて漉きたる
ものあり、且結香、薨花等、其製大抵相似たり

紙を作る所の植物

うち

名稱

加知 和名抄 加知乃木

宇鏡

栲 豊後風

梶

○東大寺文書
花柔莖と

垂ると以て尾よ

かうぞ

かぞ

りぞのき

かど 豊前
丹後

楮 説文 穀 毛詩

構 一種大ふる者の稱

枸 品字

楮桑

陸璣 穀桑
詩疏

同 BOUSSONETIAPAPYRIFERA 羅甸

林娜斯廿一綱四目

埕甘度爾列自然科目

苧麻科

樹高さ五六尺、叢生し、春新葉と生も、色暗緑、葉形蛋圓より
て細鋸齒ありて、葉面糙澁も、或刻缺交る、雄本雌本あり、雄

ハ、小満前後、葉腋より寸餘の穂と爲し、花を生も、一辨四出
より、暗紫、四雄葉あり、雌亦小梗と出し、小花攢りて穂と
爲し、各一長雌葉と出し、亦暗紫色なり、後實と結ぶ、

かよひ

名稱

らんぴ

かこのき 近江

やまかど

あぢあいの

き ひよ 讃岐

薨花 一種

WISTROEMIANESGNS 羅甸

林氏八綱一目

埕氏瑞香科

落葉の灌木あり、高さ三四尺、或ハ丈に至る、葉互生し、南天
の一葉に似たり、葉背柔毛茸あり、此種後、枝端葉間より小花

と出し、淡黄白色より、八雄一雌葉あり、
こつまこ

名稱 ぶゆびふさ 參河 こつえご 伊勢 こまこやぶき

周防 むらびき

黄瑞香 本草 結香 花鏡

EDGEWORTHIA PAPPIFERA 羅甸

林氏八綱一目 埤氏瑞香科

落葉灌木より、高さ七八尺より及ぶ幹枝並に三桮と爲き、
秋末枝端こども、數花朵を爲して垂り、こども小蜂窠のこ
と、春より至り花を開く、瑞香の如く、四瓣瘡長く外白く内

黄あり、八雄葉一雌葉あり、花謝して新葉を生じ、瑞香に似
て長大あり、其枝葉柔よりて結つとも折まじ、故に結びき
結香等の名あり、其皮と紙と造る、
とろ、

名稱 とろ、あふひ 伊勢 とろく 同 かうび 丹波 ふ

のこ 伊豫 京のふれり 土佐 京ぶのり 同 ねびぎ ね

己能登 びあむきう 出雲 おすけ 筑前 おとまん 肥

前 かこころ、 かこのき かぼちやあさごほ

黄蜀葵 本草 側金盞花 同○同 秋葵 汝南 一日花 郷藥 鍍金木

槿 事物 紺珠

HIBISCUS 羅甸

林氏十六綱七日 埤氏錦葵科

草本あり、春種子と下して生い、高一二尺、毛茸あり、其葉五
又にして、莖は互生い、暑月莖頭及枝間は花を着く、五瓣に
して、大二寸餘、淡黄よりして紫褐心あり、朝は開き、夕は萎む、
單體雄蕊の多雄蕊よりして、五稜圓錐形の房と結び、中は多
子を含む、子苧麻に似て灰黑色あり、其根圓錐形よりして粘
汁多し、
くら、

名稱 久良々 本草和名 末比利久佐 本草和名抄 丁止利久佐

医心方康頼本草○按は丁字ハ麻字のきつねのきけ
省あり字志片假字の下併せ見るへしきつねのきけ
仙かきなりさくげ 越後○楸 いぬまがね くさゑんぶ
めねぶ 美濃

苦參 本草 苦識 同 水槐 同 岑莖 同 祿白 同 陵郎 同 虎麻 同 地槐 名
別菴槐 同 驕槐 同 白莖 同 野槐 本草 苦骨 同 鎖尾根 鞍耕 土槐
録 三才 鹿白 本草 精義 板麻 郷藥

SOPHORBANQUSTIFOLIA 羅甸

林氏十七綱三日 埤氏荳科

每春宿根より生し、高三四尺に至る、葉槐に似て細小、莖は
互生も、夏月莖梢穂と成りて、蛾形花を開く、一雌藥十雄藥

よして、淡黄色あり、又白色紫色の異種あり、花謝して莢と
 結ふ、長二寸餘、莖葉根并に味苦し
 以上五種の植物次は圖に

楮



雄本



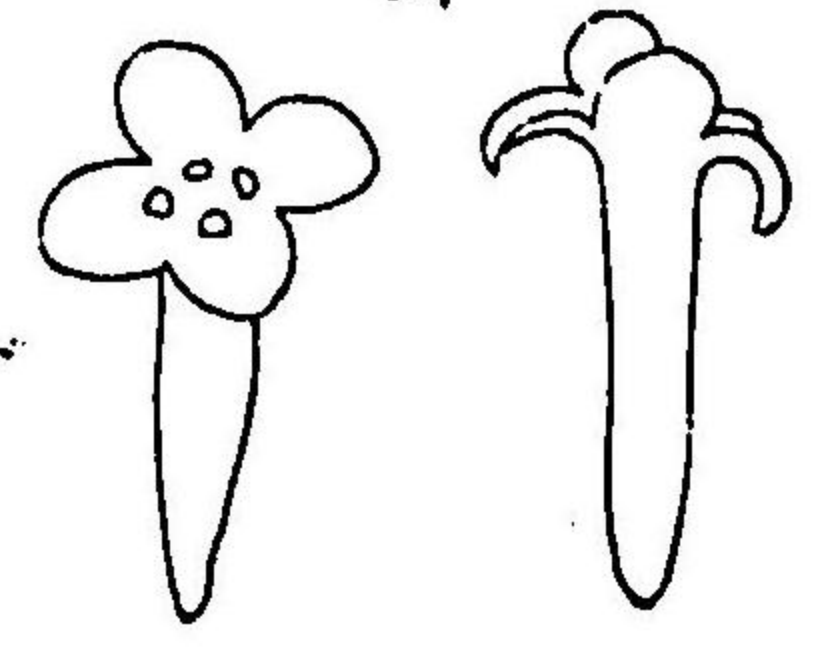
雌本



黄蜀葵

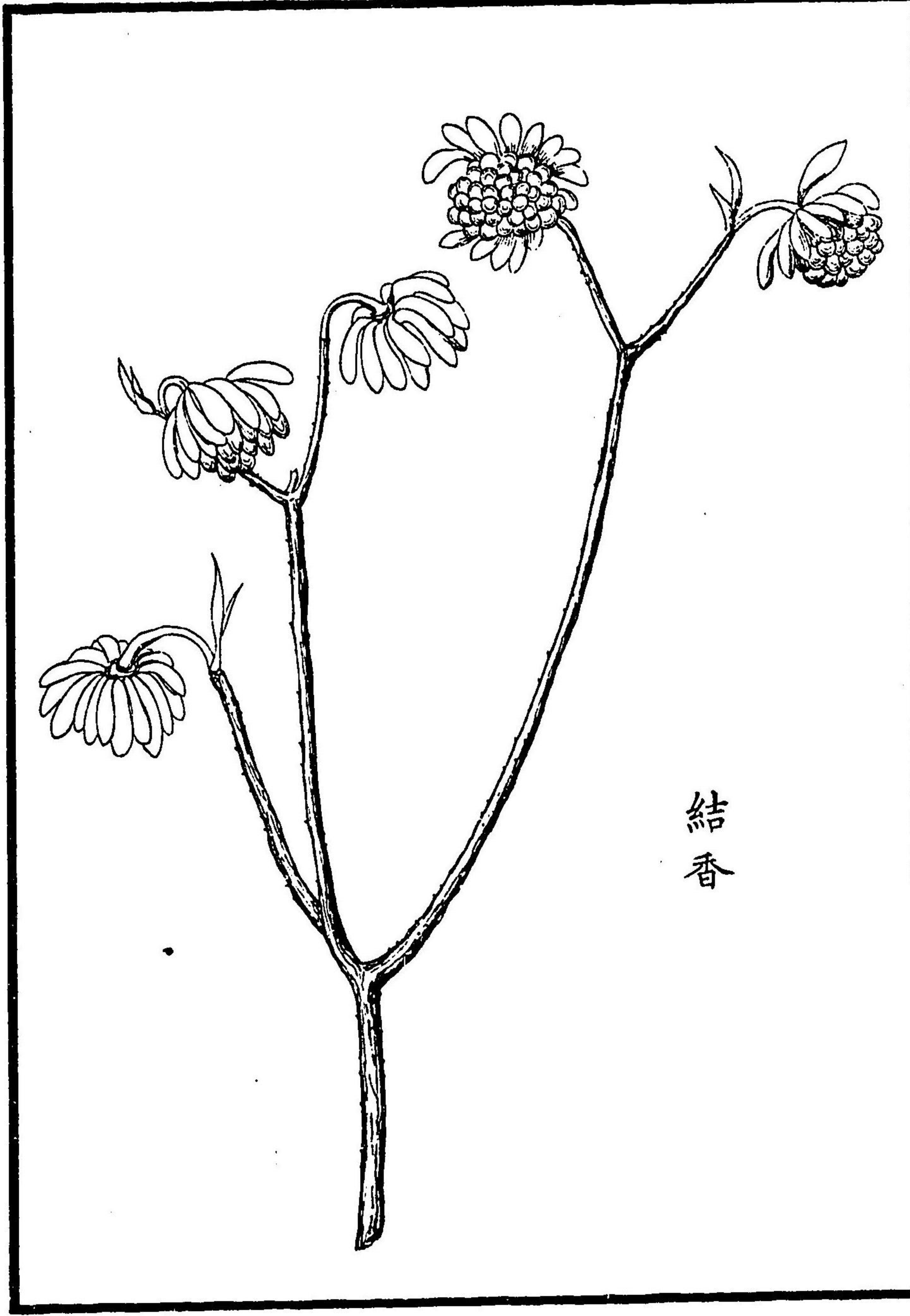
薨花一種
單よがんび
と稱する者

放大圖



分割放大圖





結香



苦參

以上五圖
良備

古昔諸紙

麻紙 此紙名、夙く東大寺の文書中に見えたり、按じ蓋二種あらん、一種の麻布と以て作する者あり、延喜圖書式に凡長功日截布一斤三兩、春二兩、成紙一百九十張、中功云々短功云々といへる者是あり、截布の字は據まじ、此紙の布と截り碎きて造りとする者の如し、然まとも布と截りて紙と造ること、假令古法ありとも、其人情は近うらざるに似たり、然るに太平御覽五百に王隱晋書と引て曰後和帝元興中、中常侍蔡倫以故布擣剉作紙、故字從巾、おとらると見まとも、今も西洋造法にてのりくといふ者猶布をく作する

こと著し、然まとも全き布よりあらト、故に布幾端といたりして、大一斤、或は一斤三兩等の字を用ゐるに、截片を將故布あるへし、此他式中布と度るに、斤量の例あり、又同式紙者調布大一斤、斐皮五兩、造色紙三十張、穀皮斐皮各一斤、造上紙各三十張あり、これ異にして、新布織將新布の截片等あるへし、其故は上紙と並へ書して、別は揚けたるに、色紙は作る料おれはあり、蓋色紙の内記式は凡宣命文者皆用黄紙書之、但奉伊勢大神宮以縹紙書、加茂社以紅紙書とあり、特は清潔にして、故布おとらへ用ゐるへくも、おし、但し内藏式は年料所造色紙四千六百張云々、毎年差圖書長一人、造美濃國造之といへる文あり、蓋其紙を用ゐらまじ、詳あらじ、又一種の直に麻皮を以て作するは、同式に長功日擇麻一斤三兩、截一斤七兩、春二兩、成紙一百七十五張、中功云々といへる者、麻皮を剉きて抄く者

して穀と麻といへど、穀は穀、麻は麻大平御覽同卷董巴記と
 引きて曰東京有蔡侯紙即倫也用古麻名麻紙木皮名穀紙
 といへる者よりして同式は其麻紙書減穀紙一百言といふ
 此二種並に麻紙と名けて別よことを標せし、只其製造の
 こと擧げてこれと別よざる者と見えたり其用は内記式
 凡裝束位記式と擧げて、縹紙を用ふ、又凡書位記料麻紙
 者上總國一百五十張下野國一百張毎年進之、詔書料黃紙
 者隨用直奏受藏人所といへるを參考とへし

苦參紙 此紙名式中何處にも見えし、只圖書式に凡造
 紙云々長功日擇苦參一斤五兩截一斤十二兩春二兩成紙

百九十六張中功云々といふ者未何者あるを知らし、蓋苦
 參は抄紙の爲に諸國より貢せしことも見えし、蓋粘滑の
 爲に用ゐしかとも思へし、成紙云々の文に據きて別よ一
 種の紙なり、典藥式に藥用の爲に貢すること見ゆ然るに舊來阿波國にて
 苦參紙を造る、是蠱食を防りんが爲に其苦味あるを欲せ
 るに、出つといふ、近時廢藩前まで之は正しく阿波人小楢
 相村曰へり蓋是古風を存せる者よりして、式中の紙に作る
 も、苦參皮あること疑を容れざるべし、

穀紙

異稱 梶紙 東大寺
文書

即楮紙よりて論ふ、これも同式、長功日煮穀皮三斤五兩、
 擇一斤十兩、截三斤五兩、春十三兩、成紙一百九十六張云々
 と見えとまり、これと擇ひ截り、春きて作るあり、今の法
 と異なることあり、然れども、同式、漆紙より用ひて、調布
 斐皮よりて、色紙を作る下、穀皮斐皮各一斤、造上紙各三十
 張とあり、其まゝよく用ゐるゝ多く穀紙ありと見えと
 事、

斐紙

異稱 雁皮の紙 宗長 手記

延喜式 圖書 寮式 斐紙の目あり此紙詳ありさうりう近來こ

れと雁皮紙ふりととる説あり 栗原信光の薄様色目の跋
 余嘗聞之、輪池先生曰、偶
 東先生、余、嚴師友也、其言云、今之雁皮紙、古所謂斐紙也、單言
 斐、不便稱呼、俗以為紙、斐訛、為雁皮、狛谷、掖齋曰、猶造紙之麻
 故呼楮為朝野群載、抄紙の料と舉げて、斐麻百斤、穀麻
 七十斤と見え、又斐麻率分二十斤、年料八十斤、穀麻十四斤
 年料五十六斤等の文あり、穀麻ハ即楮構よりて論ふ、且
 麻ハ、纖維ある草の總稱よりて、苧麻紙麻の麻も同く、線
 と為るへき植物を稱する名あり、此紙を作る事、延喜圖書
 寮式、凡造紙云々、長功日煮斐皮三斤五兩、擇一斤二兩、截
 三斤五兩、春八兩、成紙、一百九十張、中功云々、主計式上、凡中
 男一人、輸作物 飛驒陸奥、出羽、壹岐
 對馬等國、島不輸 斐紙麻三斤、穀皮三斤二

兩とつりて肥前の中男作物、別は斐皮りり、日向の作物
 又ハ斐紙りり、然らハ皮ハ前ハ照キヨ然れハ多く肥前日
 向等ハ出スルあるハ、其名も形状も他書ハ見えハとい
 へとも、中古の書ハ多く薄様を用ゐると、載ると以て考
 ふまハ雁皮紙とせん、可あろく、されどグンビハ紙斐ハ
古書ハ又ハ加ハヒの名あまハ、又ハ轉ありといふハ誤まり
ハ又ハ轉せハ非ラハ熟考をハ、さて其ガんハ
 といふ者ハ、古ハ加ハヒと稱シ、荒蕘類の總名あり、拾遺集
 物名ハ歌ハ、とつらミのおきあハヒハはふれハ、
 もゆと見ゆるハあまのいさささこれハハハの花を句中
 ハ隠ハスルハ、とつらミのおきあハヒハ形状詳ハ、難ハといハとも、清少納

言の枕草紙ハ、草の花をといハる段ハ、加ハヒの花、色ハこ
 ろらねと、藤の花ハいとよく似て、春秋開クハ常ハ非ラハ偶
 けハ、予ハ家の荒花ハ秋末花ハ即荒花ハ、然狂花と見スルハ藤花ハ似て淡紫色ある
 予ハ家の荒花ハ秋末花ハ、こハ藤花ハ似て淡紫色ある
 ハ、俗稱藤嫌フチモキの名ハ叶ハ、且丹波康頼ハ醫心方の一ハ、藥
 名の和名を載せて、荒華和名加爾比とあるハ、愈的切あり
 但今俗ハいハ、及新撰類聚往來ハ仙但此木と紙ハ
 翁花岩菲とあるハ、剪復羅ハ作れる事と聞ハ、荒華、蕘華名と異ハ實
 ハ一類、并ハ八綱一目、一雌藥八雄藥の花ハ、瑞香の科
 ハ屬ハ、支那人ハ概ハ、黄荒花ハ呼ハ、

蕘花キコガンピの類と、俗に併せてがんびといふも同一、蕘花のこし製造諸品の
下も又雁皮の紙の名も、近古より有り、宗長手記下統秋豊
雅樂の文書に曰く、御約束之雁皮之紙、上給候、雖不始于今
儀候、御芳志之至難盡紙面候とあるは、永正の頃已に多く
稱へしと見えし

再按斐の雁皮あるべきは、草木圖説伊藤ガソビの下
に、讚岐の方言ヒヨと載せしり、ヒヨ恐くハ斐麻ヒマの轉
歟、然らハ斐とせんこと決せり

産地

美濃 各務郡 西判 大さ西の内は同一くして耳と断
上有知 以四十八枚と帖と十帖と束と以

美濃判 大さ美濃幣は同一く半紙判 大さ半紙
帖數束等同一
伊豆 熱海○美濃判半紙判及半切紙
等と造る近來の産出といふ
附 烏子

名稱 烏子 下學集下紙色如
鳥卵故云烏子也

品類 厚様 鳥の子といふ古名あり、万葉集仙覺の跋文中
鎌倉右大臣所携万葉集紙用厚様紙と見
和漢三才圖會に俗云厚葉と中葉和漢三才圖會○厚薄
あまは近古まで稱へしあり

薄様 鳥の子の薄き者間合幅濶く半間の間を合ふと以て
と、然れとも、近來白垩蛤粉
と雜へて其製粗惡は趣けり、
即古の斐紙の一種厚き者にして、品類多しといへとも、中

古多く薄様と用ゐしり、故に物語中にも、消息に用ゐしり

こと、又有識書中帖紙タカミ及弓ユミ纏マキくも、皆是あり源氏物語 明
 石此イシとびヒハ、いといとり、あよいびとるうすやりよ、いといとりつ
 くしげからき給へり、又新六帖ニ散らるとこう、としみ持ち
 ころ、後まても、とどめのつけト、櫻薄ウツクやら、あと歌うたよまて、詠
 ころ程ほどよて、古書中コ散ら見せる者舉くるよ違ひらん、但方
 今出いる所の者ハ、五色イロと抄しき成せしも、其色イロ淡い、古書コの所
 謂いハ、淡い成せる者あらくし、方今出いる所ハ、紙譜シよ縦一尺一
 寸九分、横一尺六寸三分、百枚と以て一束とする事、鳥の子
 同しといふ、其類と左に舉ぐ
 越前鳥の子
縦一尺二寸八分 百枚と一束とし
横一尺七寸五分

又五色の者らりて、尺寸束數異あることなり

同 中葉 縦一尺二寸七分 横一尺七寸一分

是亦五色の者あり、尺寸等並に前と同し

同 薄葉 前に注し

亦五色あり、尺寸等同し

同 竹紙 尺寸等前と同し 薄葉の清きと云ありと紙譜よといへり

攝津名塩村鳥子 縦一尺二寸六分 横一尺七寸七分

百枚と一束とし、亦五色あり

同 大鳥子 縦一尺四寸 横一尺五寸 百枚と一束とし

同 廣 縦一尺五寸 横一尺八寸 同上

同 繪

同 土

したる下品あり亦廣あり

同 後藤

同 中葉厚葉

又五色

同 薄葉

は間合あり義釋名に注を

越前大間合

同 間合

縦一尺八寸七分
横一尺五寸四分

天子といふ白堊土を和

縦一尺五寸七分
横一尺二寸七分

并に縦一尺二寸七分
横一尺七寸七分

縦一尺一寸二分
横一尺五寸二分

縦一尺二寸二分
横一尺六寸二分

又廣並五色あり右の他

縦一尺三寸四分
横三尺二寸四分

亦百枚を束とし

寸法上は同一

同 屏風間合

其他色間合あり

名 塩大間合

同 間合

鳥の子部屬

内曇

尺素往來を以て内曇

裏陰

墨流等單尺懷紙とある

者あり下學集に打曇を作る是鳥の子の上下に青紫の雲

頭状を抄きれせる者にて俗に雲紙と稱も然まとも古人

の遺書を見るに往々錢許或は無患子の大ききある青雲を

紙上に點せしありこれを俗に飛雲と稱ひ又斜に紙上に

縦一尺二寸五分
横二尺二寸五分

六十枚を屏
風一双とし

縦一尺三寸五分
横三尺三寸五分

縦一尺二寸五分より三寸
横三尺一寸より二寸

横とをまゐるあり、多く青色此とあり、或ハ紫らること好古
日録といへり、今も越前の名産にて、小雲、内白雲、端雲等の
目らり、其麤ふるハ、攝津名塩の産あり、

墨流 是亦越前の産と最とハ、顔料を水と汎へ紙のこ
あつに絹縞紗と移は至る、其色藍紅墨の三色よりて奇
巧あり、古代の存せる者ハ、僅ハ數條の淡墨ふる者を見ら
れし、

水玉俗稱 是近來の製なり、色烏子と、水を滴せし者よりて

無患子大の白痕、諸色の中と見えまゝの者あり、
檀紙マキカミ

名稱 高檀紙禁秘抄 大高 繭紙 引合 ひき

海人 藻芥

彙考 源氏物語 末摘花 之ちのくまうこの、つとえとる

よ、白ひのうりハ、ふうり志の給へり、湖月抄又細流を引て
と云々 孟津抄同 檀紙あり明星抄陸奥

枕草子春曙 心ゆくもの 略 白く清けある、之ちのくぐこよ

いとほそうかくづくのらぬ筆にて、文りきたる、

加茂保憲女集 かきらつめハ、みちのくみまゆこの紙も

すきあふまどく

漸撰猿樂記 陸奥駒 又檀紙又漆

庭訓往來 讚岐圓座同檀紙

二判問答 一書狀料紙用引合事 中略 引合杉原雖有厚薄

大略同事歟至引合近日依其人用之事未知子細自然如此成來歟別而不可有仔細哉

和漢三才圖會 十五 厚自有皺文礫石似松皮繭之肌而墨色

好爲禁裡柳營之御紙出於備中 有大高中高小高之三種

古の檀紙ハ、まゆこの紙の義あるハ、蓋衛矛類の皮にて

造まるふるへ、是まゆこの皮ハ、纖維多くして、杜仲

ハ木綿の名はるハ、協へるを以てあり、如此纖維はる者

ふれハ、これを以て紙と抄き、仍りてこれを檀紙といひ

一あるへ、杜仲ハ、本草和名ニ和名波比末由美、又衛矛

波とあるハ、何物とるとの知きへうらハ、雖も、皆同抄

ニ檀和名萬由三とらる者ハ、一類あり、但一漢土檀及杜

仲ハ、非ハ、皆加茂保憲女集ニ、ち比くのまゆこ

衛矛の類あり、新猿樂記ニ、陸奥の檀紙あり、細流抄ニ

の、かこといひ、河海抄 蓬 陸奥國紙檀帟也

ハ陸奥紙と檀紙ありといひ、陸奥國紙檀帟也

陸奥より、檀紙をときはしむ、檀ハマユミの木也、萬葉ニ

みちのく比まゆこのりこといひ、又明星抄、陸奥より創

造といふ、源氏物語の厚肥えさるの文ニ據まハ、即檀

紙ふるへきり如し、然まとも方今陸奥ハ、絶えて檀紙

と産せも、且延喜主計式の諸國調ニ、紙ありて、陸奥特ニ

無し、後考と待つ。

藤原貞幹好古日録末云、大高檀紙ノ皺ハ、板ニ付テ乾カサス、繩ニカケテ干シ、シワノヨリタルヲ、朝露ニアテ、少シ打タル故ニ、皺文アリ、此事蹇驢嘶餘ニ詳ナリ、今ハ大高ヲ始メ、引合ニ至リ、皺ヲヨセラ、板ニ付テ乾カスナリ、又古昔ノ檀紙ハ、打タル故熟紙ナリ、簾ノ消テ板ズキノ如シ、今ハスタレノアリテ、熟紙トハ云カタシ。

此説多く古物と識まるより起まる説より頗詳悉あり然るとも板スキの説ハ信しうと云ふ似たり

産地

備中 松山廣瀬より柳井勘左衛門といふ者初て製以と

いふ 木村青竹紙譜

大鷹 縦一尺七寸一分 横二尺二寸三分 大縮といふ横ニ波文あり故ニ縮といふ

中鷹 縦一尺三寸五分 横一尺九寸五分 引合中縮といふ

小鷹 縦一尺七寸五分 横一尺四寸五分 小縮 鬼杉原といふ

以上一束二百四十枚と法といふ

○越前

大鷹 中鷹 小鷹 寸法并一束紙數備中と同

○阿波 大鷹 中鷹 總へて越前と同

○京漉 越前より同一

○丹後

大鷹 縦一尺七寸五分 横二尺二寸三分
中鷹 縦一尺三寸七分 横一尺七寸七分

小鷹 縦一尺〇五分 横一尺四寸四分

附 奉書紙

越前と最と以、中古多く奉書に用ゐると以て、此名あり檀紙の皺文なく、肌理美ある者あり、但し、檀紙は皺文なきは、是、真の引合ありといふ。越前府中より出つ、大瀧氏、加藤氏傳へてこれを業とし、上品奉書に、岩本氏、中奉書に大瀧氏、岩本氏、小奉書に定友氏、各別ちてこれと抄くあり。

大廣 オホヒロ 縦一尺四寸五分 横一尺九寸五分 三束を以て一行李とし

御前廣 中廣といふ 縦一尺三寸五分 横一尺八寸五分

束と爲すより前より同一

大奉書 本政といふ 縦一尺三寸 横一尺八寸

四束又五束を以て一行李とし

中奉書 間政 マササ 縦一尺二寸 横一尺六寸七分

六束又七束を以て一行李とし

小奉書 上判 縦一尺九寸 横一尺五寸五分

八束又九束を以て一行李とし

○丹後奉書

大奉書

寸法等越前と同

中奉書

同上

小奉書

同上○無判又立原

○因幡奉書

大奉書

中奉書

小奉書

并又寸法等越前と同
別又水引奉書といふはり

○加賀

中品といふ

大奉書

中奉書

小奉書

并又寸法等越前と同

○美作

一ふ前と同

○阿波

大廣

中廣

大奉書

中奉書

小奉書

右亦前と同

○京漉

大奉書

中奉書

小奉書

色奉書

右亦同

右の六種ハ越前ハ幕倣して大小の目あり以下諸國の産ハ皆一品又止る

○土佐

麤品といふ

縦一尺一寸
横一尺六寸三分

一束四百八十枚
七束と一行李といふ

○備中三好奉書

縦一尺一寸三分
横一尺五寸六分

束上と同

○豊後奉書

備中豊後並
紙質滑り

縦一尺一寸四分
横一尺五寸六分

束上と同

但八束と一行李といふ

○筑前奉書

縦一尺〇九分
横一尺四寸七分

束上と同
束と一行李といふ

○筑後柳川奉書

中品といふ

縦一尺一寸
横一尺五寸

束と一行李十六

○備中奉書 三好と別あり其品劣り 縦一尺二寸 横一尺六寸 束上より

○豊後高瀬奉書 縦一尺五分 横一尺二寸四分 一束四百枚と

○伊豫奉書 中品あり 縦一尺二寸四分 横一尺六寸 一束四百八十枚 上品ハ六束

入中品ハ七束下品ハ八束入あり

○安藝廣島奉書 下品あり 縦一尺三寸五分 横一尺五寸七分 束同より

○三原奉書 縦横束数上より同

○美濃袋奉書

杉原紙

名稱 きいそら さいえ 并よ海人藻芥 さい 御湯殿 日記

後世多く糊と加へるより起る名あり

彙考 下學集 下 杉原 日本俗杉或作招未詳也

和漢三才圖會 十五 奉書紙之屬稍薄軟也播州杉原村始出之

故名之今出於備後爲上豫州加州雲州次之備中丹後但馬

土佐又次之和州吉野爲下本杉原 俗云鬼 出於播州色不鮮

明而爲獻上一束一本之紙

好古小録 下十五 古代之杉原紙ハ板スキトテ簾メナレ

產地

播磨杉原 杉原ハ原播磨揖東郡の村名よりて遂ニ紙名

となまり就中思草レサカ稱する者其始かりといふ近古まで

一束一本と稱し一束一卷と呼ぶ者皆此紙と用ゐりあり

一束一本と稱するハ、此紙と兩折し束ねて、上と末廣一本
と加へりあり、一束一卷ハ、此紙上と紋緞子一卷と加ふ并
武家の古實よりて贈遺とハ、

大廣 縦一尺一寸 横一尺五寸 御上り杉原と稱と一束五百枚より

て一トより二束五帖入り一荷より二トあり

大物 同前 一トより二束入一荷ハ同斷

大中 縦一尺五分 横一尺八分 一シメ二束五帖入

漉込 縦同前 横同前 鬼杉原又十帖紙といふ色鮮明ふらさる

者あり、是亦前と所謂一本一卷と用かる者あり 一ト
二ト

束入一
荷二ト

大谷 本谷 縦一尺一寸五分 横一尺七寸五分 入一シメより三束

中谷 小谷 縦一尺一寸五分 横一尺一寸五分 同前一ト二束

荒谷 縦一尺一寸五分 横一尺一寸五分 同前一ト二束

八分 縦一尺一寸五分 横一尺一寸五分 同前一ト二束

久瀨 十二束物 縦九寸六分 横一尺一寸六分 同前一ト二束

思草 前より注以 縦一尺四寸五分 横一尺四寸五分 一束ハ四百枚

右ハ古來播磨の産あり、其他諸國の産多し、次ニ概目
と擧ぐ

但馬杉原 中品 丹後佐次杉原 備後三好杉原 加

賀杉原

土佐杉原 中品 大杉 中杉 并は粗質あり 美濃杉原

阿波杉原 豊後杉原 質密あり 安藝廣島杉原 上

同 同大杉 色白く肌滑く薄し 下野那須杉原 因幡杉原

又奉書ともいふ質美あり 越前杉原 岩山杉原 丹後杉原

中品 大和吉野杉原 下品 同小廣 小吉野又小ゲタ

信濃杉原

大抵右の如し又所謂小杉原なり略稱して小杉とい

ふ者諸國より出つ

宿紙

名稱 薄墨紙 吾孀 鑑 水雲紙 雍州府志 紙屋紙 下學集○此名ハ内局柱礎抄

柱史抄除目抄に見えと是と其比の者宿紙といハ異ありハ源氏物語鈴虫と新阿弥陀經を造るよくらうのいりて朝夕の御手ふらしは心こしよきよらうのいりて紙屋ありと宿紙ふらし其頃まで官用と給る所在野宮東とらりて中古ハ紙屋とて凡ての紙を瀧反抄きしう後宿紙の抄くこととありしありしを瀧反塵添蓋 綸旨紙 同カイ紙 古本鑑 囊抄

彙考 内局柱礎抄 四位以下者用紙屋紙 宿紙

七十一番職人歌合 澆返 薄墨漆の夕暮は白紙色は月と出ぬ

下學集 宿紙 薄墨之帝也又云紙屋之紙公家之所用也

還魂紙の我邦は行ととハ古書中に見えをといハとも

吾孀鑑 四十 正喜二年二月十九日此條經時追福の爲は其

澆當作澆

遺札と澆きて、真文料紙と云ふ條下、別注して云く、清和天皇崩御之後、東御息所、御戀慕悲歎之餘、灑朝夕所被進之數百合、勅書被書寫若干、大小乘經、中略薄墨色紙始例、於此時古今雖事異、其志相同乎、是傳何の書と出つると詳よせいと雖、古來より故紙と再抄せし見るへし、又之と紙屋紙と稱するへ、前よといへる如く、後世の轉名にして、源氏物語蓬生あるへ、うらひの語を冠せられ、宿紙といはらば、玉靖日記中禁秘抄上枕草子七等といへるも、色麗はき文ふとあれ、最宿紙といはあらざるへし、中古に至りては、紙屋にて宿紙のこを造りし者に見えて、宿帑と紙

屋紙と稱するに至る、雍州府志七紙中略古禁裡院中書捨反古堆盈中略裂之直使紙師再澆之澆紙者以紙屋川水洗之數回合登呂々根汁而澆之中略其浸水間經三五日故宿紙屋川邊而造之故俗謂宿紙其製紙處號宿紙村今於西洞院川邊造之數遍雖洗墨汚猶帶淡墨色依之號水雲紙凡職事辦官預萬事依之筆記者多故遣此紙於職事雜用或使書口宣案等遣外記外記因之寫綸旨於檀紙世人見其案紙多誤謂薄墨綸旨今造宿帑者兩家在西洞院西綾小路通西也兩家共小佐治氏也是則紙師座酋長也然まとも海人藻芥と綸旨書紙曰宿紙五人職事内裡宿直して以件帑下綸旨義也と云へり又宿紙と紙屋帑とさること塵添瑩費抄七と委しく見えたり

是朝庭にて宣旨の稿に用ゐらまゝ紙にて好古小録は、
いへる如く、承元中の者とは有りし聞けり、經文ふらひ
して用ゐるも、久しきことあるへし、

紙屋紙

異稱

ううやうみ 枕草紙 うんやうみ 玉靖日記

右の前者も舉ぐる如く、宿幣の異りて、圖書別所紙
屋にて抄ける、尋常の紙と云るあり、

修禪寺紙

彙考

下學集 下 修禪寺紙 坂東豆州紙名也
色薄赤也

古來よりの名紙として近來まで有り横にすゝれめらり
て色淡褐色を帯り

右の外は後世日用の諸帑多し今其概と擧げてこと
と附録とし然まとも方今勸業の設らりて凡織維ら
る者紙は作らざるおく諸國年々新創の紙あり猶拾
遺と編して補ふへし

○直紙

美濃紙と稱も美濃の産あり凡て四十
八枚と以て一帖と一帖と一帖と一帖と

大直紙

縦一尺より一尺五六分
横一尺四寸六分

中直紙

縦九寸五分或六分
横一尺三寸八分
○上と稱し

小直

縦九寸より九寸二分
横一尺三寸七分

障子美濃 同前の又故障子あり種々の文理と抄きあぜるれり

典具帖 縦九寸 横一尺二寸五分 ○方今の産ハ糊と多く故

ハ割刷の板又貼るヨ用カヨリ

小菊 縦六寸八分より七寸 横八寸八分より九寸五分まで 傘工の用カ

美濃厚紙 縦九寸 横一尺三寸一分 此類森下傘工の用カ

新廣紙衣と 徳の山 名禮板張 皆美濃より産カ

大和吉野厚紙 森下、小森下、國栖紙 塵國栖、宮籠國栖、薄川、塵小川、島包、大張、小澤、物以上包のむ三種あり

入川笠、細川

吉野仙過、次第紙 佛家作法の次第と記せる帖とカ

紀伊 川根高野

越前 越前厚紙 美濃ヨ 同太平赤禿

若狭 名田庄 紙名ヨ 同厚紙

安藝 廣島厚紙 同海田 或皆多

周防 岩國海田

伊豫 伊豫仙過 宇和島 吉田 大洲

備後 三好厚紙 同仙過

土佐 土佐仙過 同厚紙

阿波 阿波仙過

播磨 播磨海田

豊後 豊後笠

出羽 大方オホカク 米澤より産ル

備後 海田

淡路 洲本仙過 同廣 同島包 同廣 同國栢

同薄國栢 同森下 同名田 同高野名田

石見 石見厚紙石見宇田と稱す 辺と切りさる者 同一方切 同二方切

同三方切

上野 小面厚紙

下野 那須大八寸 同中大八寸 同小

信濃 信濃八寸

但馬 神谷厚紙

豊後 豊後厚紙 前山厚紙

○中折清帳大半紙等

廣折類 長門 廣島 安藝 片折周防 岩國 土佐 肥後 日向 伊 清帳 豫石見柳川等

上帳

諸口類 廣島 津波といふ 三好 備後

障子紙 諸口の一 廣島 因幡 三好清 備後 新廣 同上

西ノ内 常陸 程村 同上 塩子紙 同上 三十枚物 同上

柳川 同白木 同廣 溝口 越前艶無 國栢艶無 豊

後小形 同廣片カク 豊前廣片 同小倉美濃紙 因幡障子

同岩坪紙 備中三ッ折 百田紙肥後 澤中折石川 石川

中折濱田 吉加中折 柳川中折 豊後中折 土佐中折

高野中折 采幣紙美濃 岩城大半紙

○板紙類

美濃板 岩國板 山代板 石州板 判無板 柳川板

肥後板 出雲板 吉加板 廣島板 高森板其端と切り

豊後板佐伯板 中津板豊前 田度板伊豫 肥前板

洲本板

○諸國半紙 半紙ハ全紙と兩斷したる名あり其全紙

よてハ輕便ふらさると以て中古より此の如く造り創め

一あるハ其出る所處多し左ニ其名のこを舉ぐ

○長門

山代 本座と稱し岩國又次き 萩近辺より出るあり

能毛 小川 中曾根 島田 吉田

徳並 阿武 湯野 小方 立野

色好 友吉 三尾 津通

○周防

岩國 半紙の上品あり阿品行安の 紙より小瀬の紙より清く

須万 五村 徳地 鹿野

○筑後

柳川

○石見

濱田

朝倉

津茂

丸茂

市山

吉加

宇津川

伊野村

新山

殿

日貫村

○肥後

隈本

大原村

友信

鈴野川

○安藝

廣島

仁保

○豊前

中津

豊後

岡

備後

三好

備中

足守

阿波

土佐

出雲

其他文筆に關せざる者多種あり

青土佐

土佐にて造るといへども、

湊紙

亦西京大坂にても製し、和泉湊村より出つ、今ハ攝津山口より多くとと産し、青縮、柿縮等の目あり

松葉紙

出羽山縣

又名塩松葉あり、攝津より出つ、浅黄紙、柿紙、黄紙、水玉紙等あり

阿波黄紙

石目紙

藥袋紙

尺永

播磨より出つ、又木目紙あり、又いふ伊豫より出つと
 土佐より出つ、又攝津名塩より出つ、下品あり、
 近古婦人の髻に用ゐる紙にして、奉書の屬あり、越前丹後と上と、美濃、阿波、丹後、伊豫、土佐、日向等より出つ

筆

名稱

布美天 和名抄 ふむで 花の木 八雲御抄
 ○異名 心乃使 藏玉 心の鏡 同上 心の志るべ 同上
 ○異名 心乃すさ 藻塩 心のす 同
 ○異名 あり

創始

筆の始も、紙と同じかるべし、姓氏録、左京未定雜姓に、筆氏あり、曰く、燕相國衛滿公之後也、善作筆、預於一流、因茲賜筆姓とらるも、當時の韓人にて、歸化せし筆工あるべし、然るとも、其後如何ありや、大寶年間に至りては、其製造亦圖書寮の管する所にして、職員令義解、圖書寮の下に、造筆

手十人掌造管と見えたれど、何如ふる制よりて、何の毛と
 以てせしむ詳あらば、又延喜民部式下、年料別貢雜物と
 載る其中、筆と貢する國ハ伊勢管尾張同參河上同參河上同
 江管一千駿河管一百甲斐管三十相模管一百武藏同上總同上
 常陸管三百近江管二百美濃管一百五十信濃管一百三上野管一百下野
 同陸奥同越前管五十但馬管八十因幡管八十伯耆同出雲管五十播
 磨管一百美作管六十備前管一百阿波管八十伊豫管百大宰府一千
 廿管兎毛鹿毛以上皆其國工の造れる者あるべし、然ると
 も、大宰府の外ハ、是亦其何毛あると言を以、只同書圖書寮
 式、凡造筆長功、日兎毛十一管、狸毛同鹿毛三十管とあるよ

據より、其毛概兎狸鹿の三種あり、且其用を異よりて見え
 て、凡兎毛筆一管寫真行書一百五十張注一百張、墨一廷書
 三百張、鹿毛筆一管とあまると、我國ハ古より、多く鹿毛を以
 て作りしこと、萬葉集十為鹿述痛歌、吾毛ワカケ等者御筆波夜
 斯吾皮者御箱皮爾ハハカハハハ、なと言ふことと見え、清少納言の枕草
 子本宸翰、筆ハ冬毛、こめもよりとあるも、鹿毛ハ夏冬の別
 あるよりて、起まる名あり、既ハ夏冬の間あると、秋二毛
 といへるる如し、高忠其夏毛ハ、赤色と帯ひ、冬毛ハ白色あ
 るより、今も赤毛ふる馬毛筆と夏毛といふに至る異制
 庭訓往來、書色紙者可用夏毛といひ、七十一番職人歌合

又「ふひくわど、いり、ゆい、ま、我爲の夏毛の筆の、心ある
 さ」とらる是あり、支那でも、晋より趙宋に至るまで、鹿
 毛と第一とせしより、高木紹安いり、羊毛の行そり、
 明末より清に至りて、盛にありありあり、又狸毛とも重せし
 り、遍照發暉性靈集^四奉獻筆表にりて、狸毛筆四管と、筆生
 坂井名清川に造らしめ、支那の法に據ると陳も、又東宮に
 も、狸毛筆と奉る筆生槻本小泉の造所とあり、當時狸毛筆
 の、行いれしこと見るべし、又兔毛も白氏長慶集^四樂府紫毫
 筆の句に據るに、唐人も重せし故、延喜頃より、行いれし
 こと、七十一番職人歌合の詞に「兔の毛いりらおもてこえ

ぬり大事よて候といへる詞あるに、後世までも用かゝる
 り、然れども、方今の多く用かる者なく、鹿狸馬の三種を以
 て至用とし、中古一種藁筆あり、和名抄と和良不美天とい
 ふ、夜鶴庭訓抄にも、之を用かることを云ふ、且庭訓抄に
 薦筆とも用かること見えり、皆大字の用と見ゆ、さて官
 用の筆工絶えてより、何人の命して作らしめり、詳なら
 ず、後世に雍州府志^七に筆工小法師造大筆小筆獻禁裡院
 中其外河原町祐仁、京極南裏辻等爲巧手、凡造筆謂結筆^{ユラ}其
 造之者稱筆結、多以福字爲氏、相傳弘法大師入唐歸朝、日誘
 中華筆工福氏人來、今稱福者其裔也、と福字の姓はる筆工

日本總鹿子等に見えたり

造法

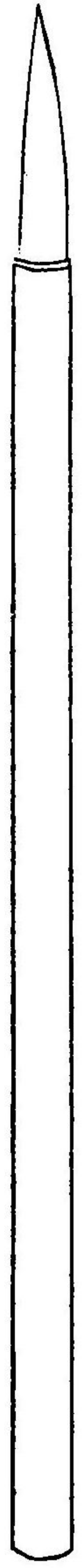
筆を作るは、何の獸毛に關せし、掌中へ置き筆粉粉と散し、兩掌にて摩擦し、獸毛の油膩を去り、上下と齊しく整頓し、櫛を用いて、これと梳き、其櫛櫛にて別製するあり、梳き終りて、これと舐り、筆の細大を隨ひて、厚薄を定め、鹿角菜鹿角菜煎汁汁を整ふるあり、下同一と以て、一寸餘を粘着せしめ、其中、逆は雜する毛と撰ひ、小刀の尖よてこまを去り、心を作りて、其上へ中毛を纏ふ、粗品は中毛の心の尖より、少し下けて被るあり、中古用かる和筆は、其上を紙よて、半許これを包し纏ふ此の

如くして、其毛を舐り集め、小刀の刃を伏せて、筆尖を向ひ數十度これを擦り、其毛を整頓し、これをケヅリ、又シタテルと稱して緊要といふ、筆の優劣、此時に在りといふ、其上へ上毛ウハケと被らしむ、其毛を周圍に遍ららしむる許を、小刀にて分ち取り、能く梳り疏して、中毛より、又一層下けて、周圍に被らしめ、其上毛の本を、麻絲よて繫り、其緒餘を筆管中に通し、毛を管端に容るゝなり

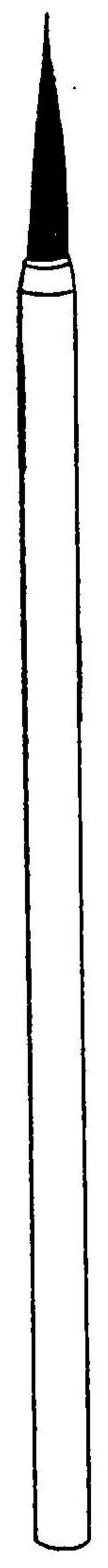
筆工稱する所筆名并圖

世尊寺流

筆の櫛尖り、柔強兼毛よて造る白色あり

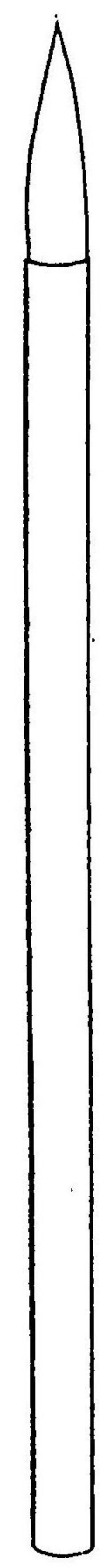


近衛流



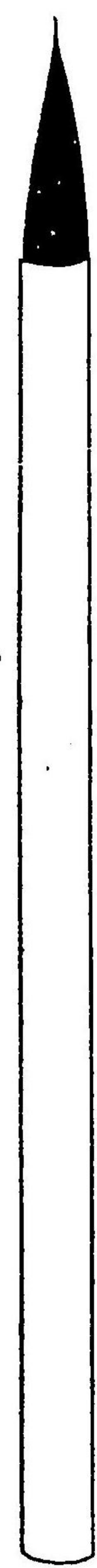
黒色の強毛より先尖り腰強

定家流



白毛強柔と兼ね先細く喉より少く肉と持より

光悦流



狸毛より先細く剛

鳥飼流 傳内流



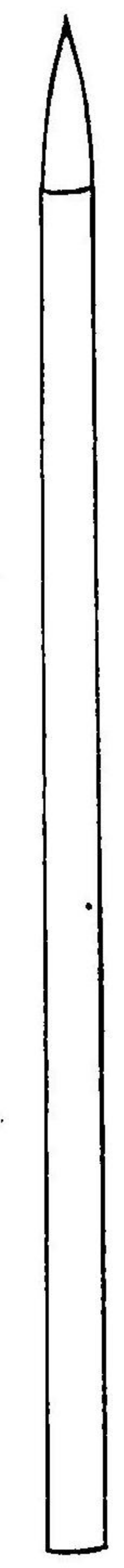
先短く剛柔兼毛白色

大橋流



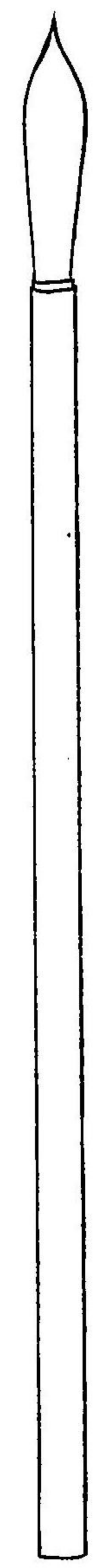
先長く白き柔毛あり

延文筆 粟田御殿流



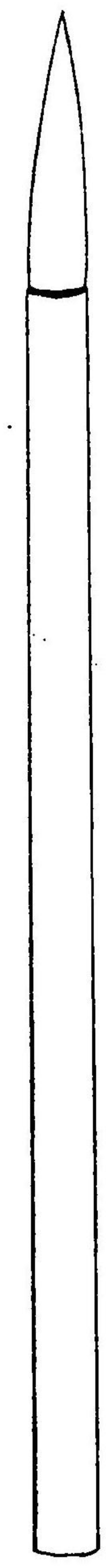
鹿の柔毛より造る

勝守



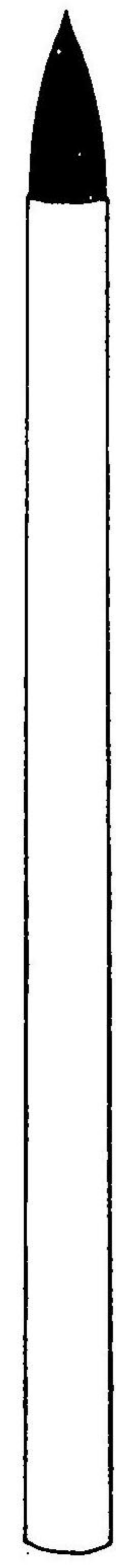
是ハ京師勝守氏の我名を付たる印紙の通稱の弘りて筆の名とありとるなり

持明院流



白色の鹿毛剛柔と兼ね其管朱色管内の小軸黒色に染む

大師流



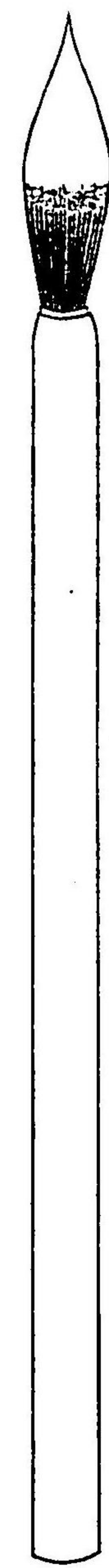
青毛の強毛鹿よて作る先短く管白

松花堂流



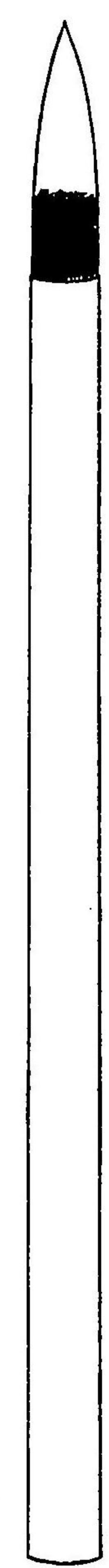
青毛の強毛八幡山一山の諸坊皆此筆を用ゐるなり

廣澤流



鹿毛よて強く腰よ夏毛を纏ふ徳ハ青馬毛あり

烏石流



廣澤流よ同一腰よ紅毛を纏ふ

東江流



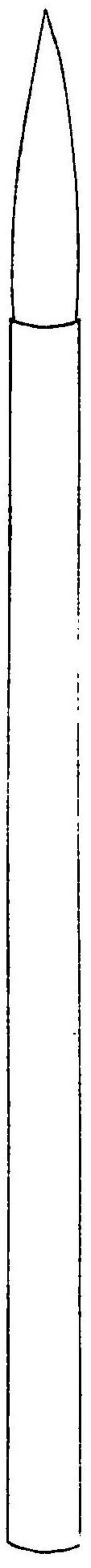
白毛鹿よて剛柔と兼ね藍毛と間きること三條あり

千蔭流



瀧本流よて形異あるのみ

菱湖流



鹿毛と用ゐる腰よ鱗と入る水筆の製これよてある

真書キ



此筆大坂の文人創意にて作るものにて支那の法せり
又非らば管と二重三重よりて毛を縛り其系餘よりて管又
引き入るなり支那朝鮮より無りて只我國のもの有る筆
なり

右造法以下紹安高木壽頴の録せる所なり

文藝類纂卷七終

138
8
44

東 京 圖 書 館				和 書 門
四	三	三	類	
八	一	三	書	
冊	號	函	類	

文藝類纂

文具志下
神原英野編

卷八

不
出
館

文藝類纂卷八目錄

文具志下

硯

硯論

製造法

諸研各樣圖

諸研材產地

墨

墨論

製造法

採烟法

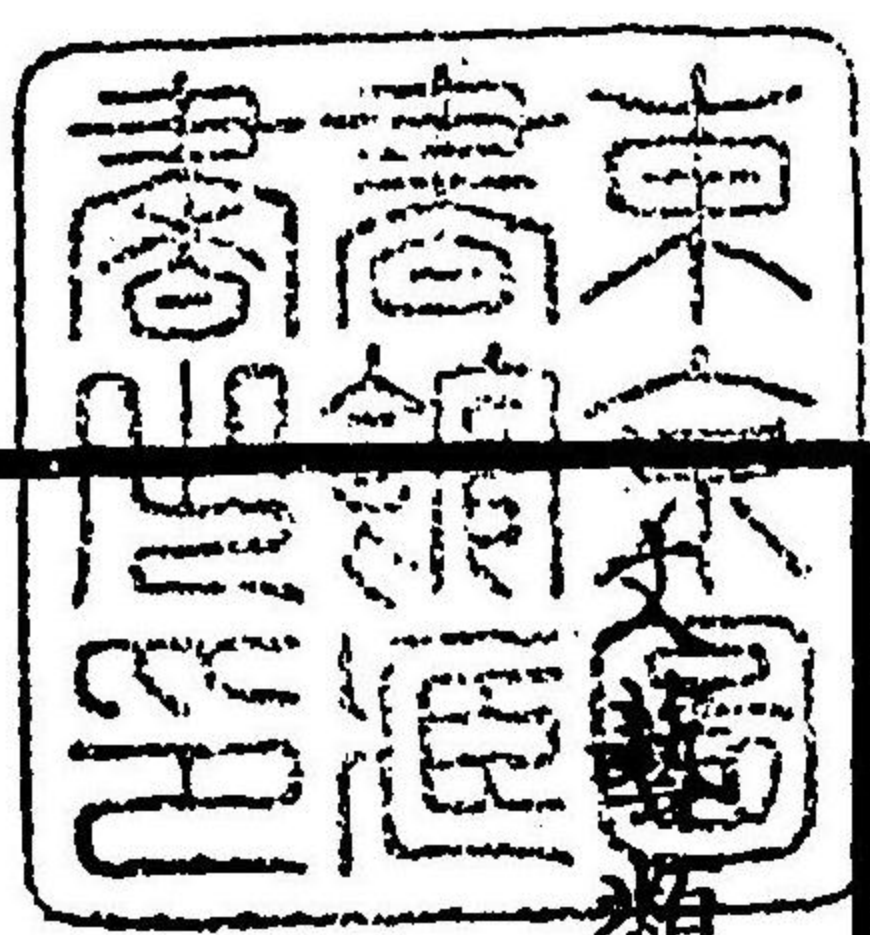
刻本

刻法并圖解

刷法并圖解

書卷沿革

諸縫綴法



類纂卷八

神原芳野 編

文具志下

硯

名稱

須美須利

和名抄文書具の硯音五旬反訓須美須利

轉ふすばり竹取物語見る石硯字と分てる異名あり○細
り、さきりふりの揚杖もつゝをさきり管家とありて
後世の憑託ありといへとも亦一の異名あり河海抄より
此事と石の便集玉心の湊同筆の海藻塩草
いへり

我國の硯古ハ多く瓦硯よりて、石硯少ふ、是錦繡萬花谷

は唐人只多以瓦爲硯といへる此頃の時風ふるへし藤貞
幹の好古小録坤は昔人の所謂瓦硯ハイカナル物ニヤ露
及雞冠木研ノ名ヲ書生故實抄ニ寶物ト稱シテ石硯ニハ
名アル程ノ物ハナシといへるも蓋これに因れるふるへ
し露雞冠木の名器ふる延喜主計式上ニ凡諸國輸調云々
ハ江談抄にもいへり猴膝研サルアシスリ二口備前國調云々猴膝研十八合とありて前後皆
陶器ふるを見れハ亦瓦硯ふるへし朝野群載六左辨官下
尾張國應早速進上猿頭硯貳拾口磁貳拾口事上右左大臣宣
件硯等外記結政左右廳并陣頭用途料宜仰彼國依例令進
濟者國宜承知依宣行之寄事左右莫忽其勤長治元年九月

廿九日左少史時宗とあり是磁と共ニ尾張に命せられし
ハ古より陶器と貢する所ふれハふるへし此猿頭研とい
へるハ猴膝といハ別ふるも但頭字ハ誤寫トモ思へト
群載諸本皆同一故ニ姑原ニ
從然れとも磁と并ひ命せられしハ陶研の證とふるへし又
後世の書ふれし類聚雜要抄四ニ二階硯筥の圖と載せて
其中の硯ニ瓦硯と注せりされハ女御入内の御調度猶此
の如し後世の瓦硯ハ雍州府志ニ大佛殿南造瓦者燒之と
いふ只石硯の古きハ壬生寺ニ藏する所の忠岑形俗ニ忠
岑ノ所
藏ハハ紫石硯人の知る所なり好古小録ニ載る天授
柔兆執徐夏自造の字ある紫石硯等其古き者ふるへし其

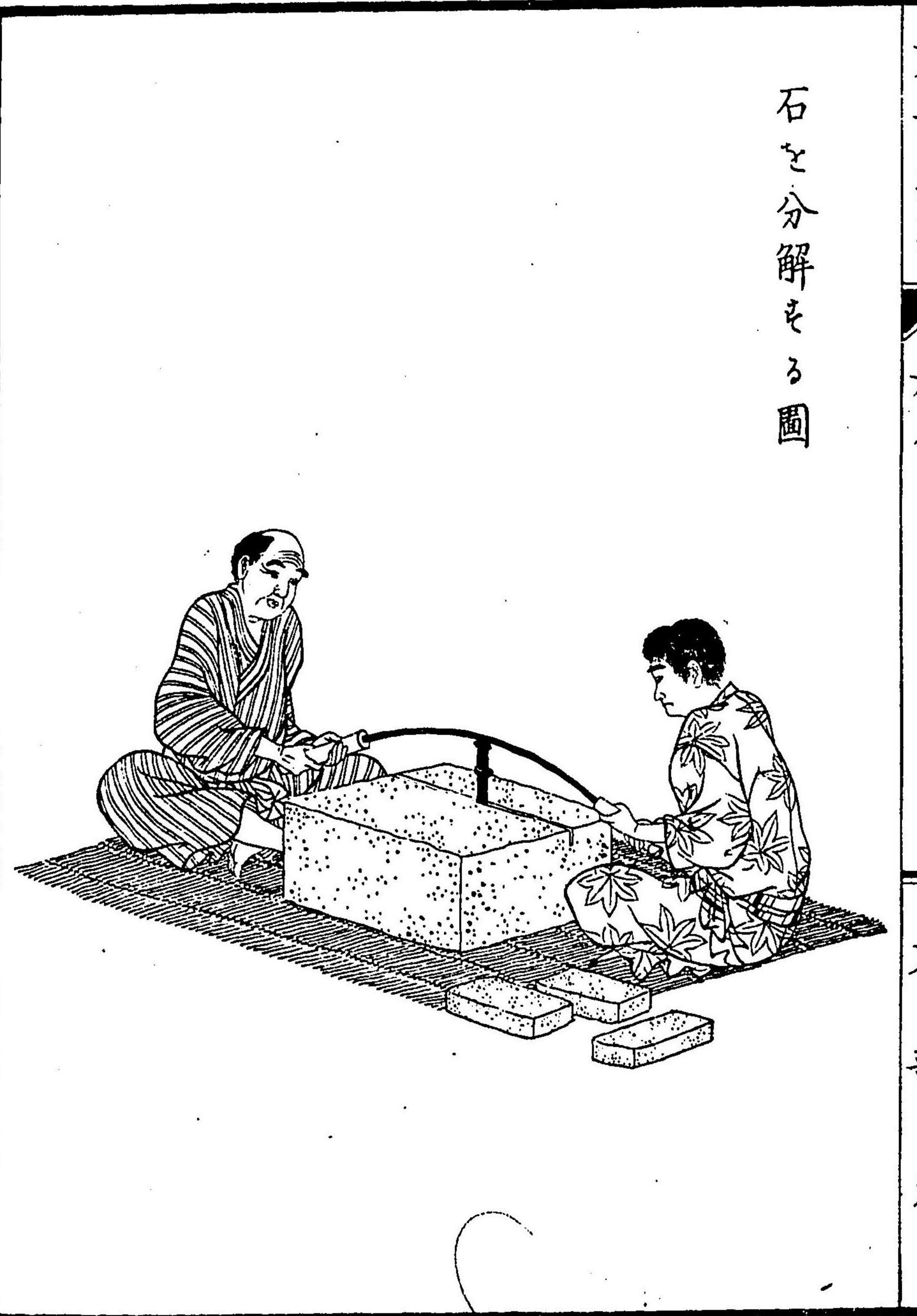
石硯の行をれり、何時の頃よりと、詳より難多れと、除
秘抄仁治三年正月十二日硯青硯、下ノ方縁アリ、又先ニ執筆硯、下方
ニ縁アリ、紫石ニテ傍不塗之、ふとの文あるハ、此頃除目
石硯と用ゐられ、又除目抄下、是大臣之時、普通硯、參
議之時、瓦硯之間、聊有口傳と云へるハ、石硯と尋常とせ
よ至る、龜山殿七百首、道我法印水くきの、便と見て、石
硯、くとき契の、果をうき、又爲尹千首、寄硯戀、人心こ
れや憂世の、さぐいの、筆と墨とも、つくもてつ、ふと
あるハ、其頃より、石硯行をれて、明應の頃、土佐光信、畫け
る、七十一番職人歌合の畫上、石王寺ハ白ミ堅くときり

よくきの語ありて、且其月の方の歌、かきのくら、月け
見れハ、土佐石の、おりの光ハ、すくふかりけりの語あるを
見まハ、其頃ハ中々、石硯盛よあり、あり

製造

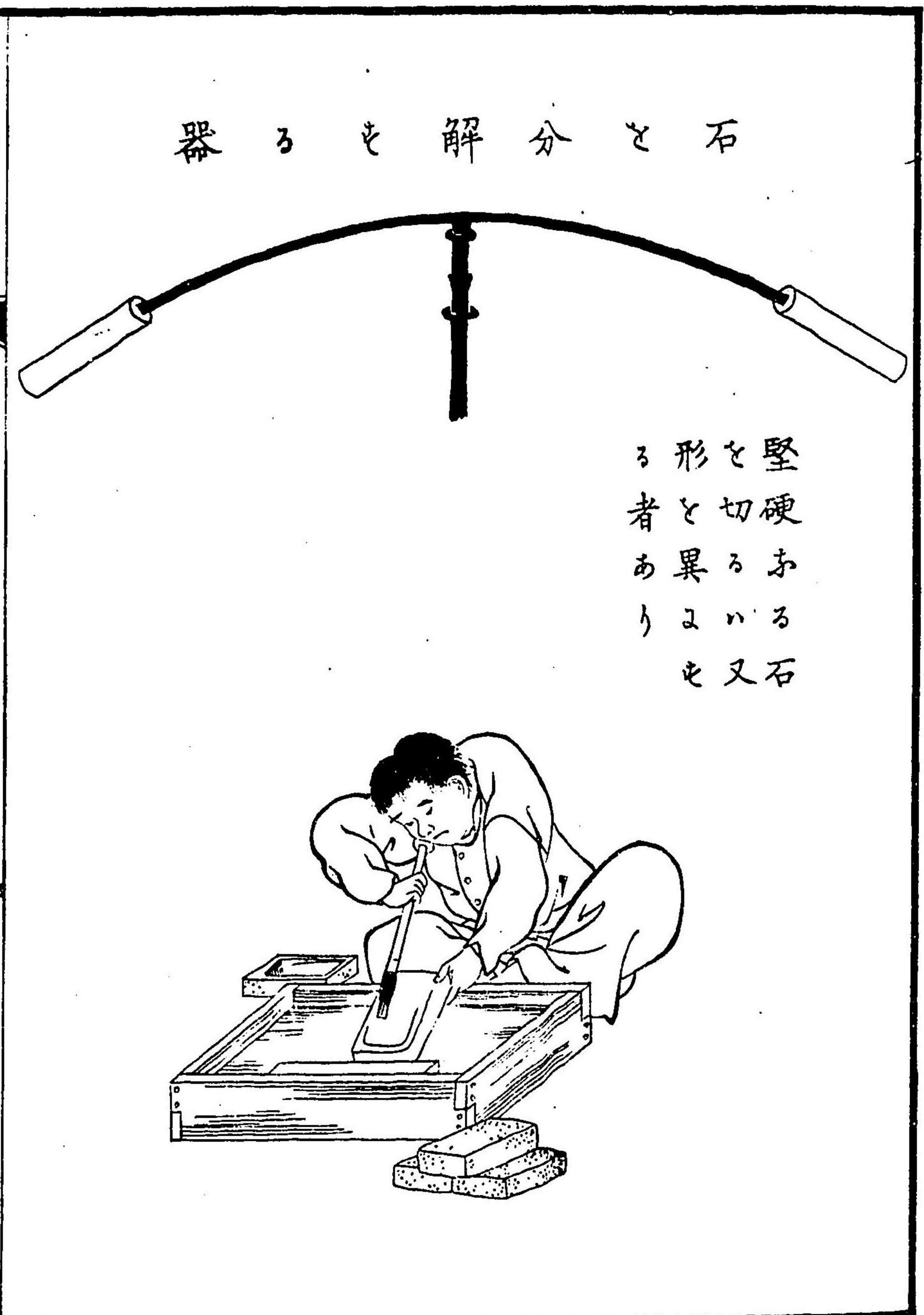
石硯ハ、次ニ圖せる器を以て、左右對して切解き、白砥は濱
沙を布きて、これを磨き、池を作るハ、次ニ圖を出せる鑿
と以て、右の肩窩、當て穿つふり、粗穿ち終りて、再手鑿
よく削り上げ、其上を青砥よく磨くあり、上品ハ名倉砥と
小石と手よ持ち、墨道墨池表裏とも磨くあり、

石を分解する圖



石と分解する器

堅硬なる石
 を切るに
 形を異にし
 る者あり



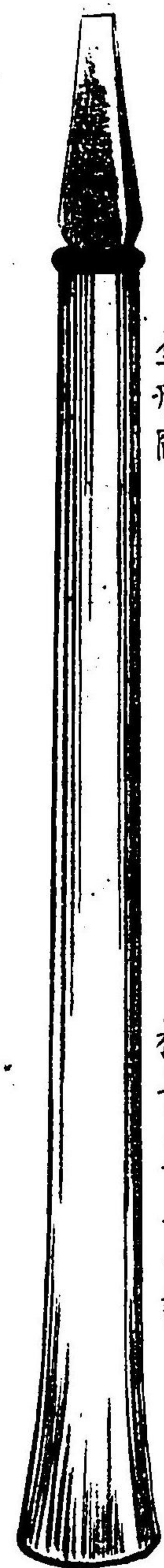
平鑿

全形圖

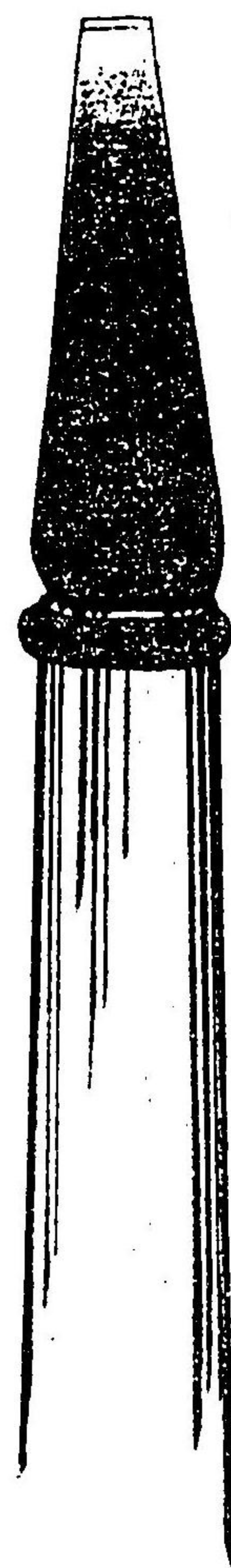
双キツテ全體鋼鐵

刃柄又入事三寸餘

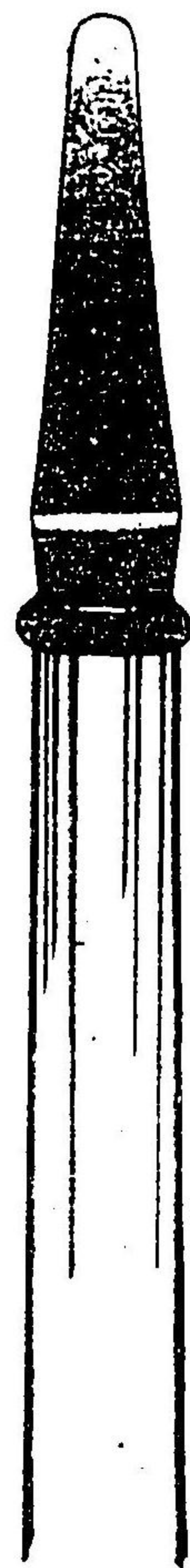
柄長八寸七分許



平鑿大如圖



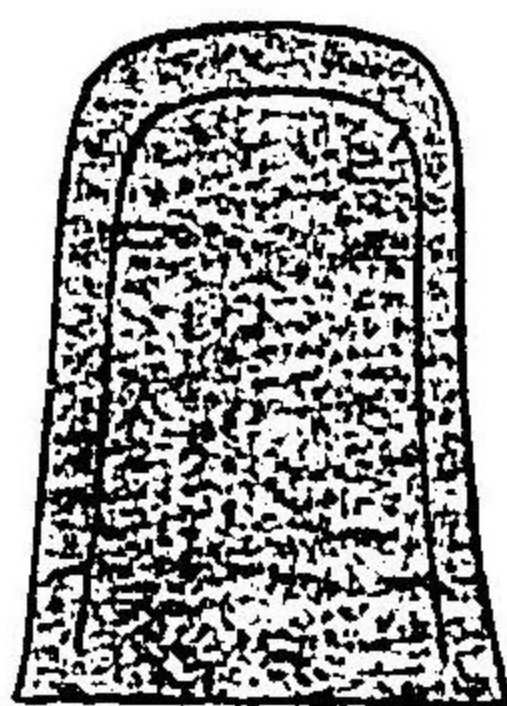
丸鑿同前



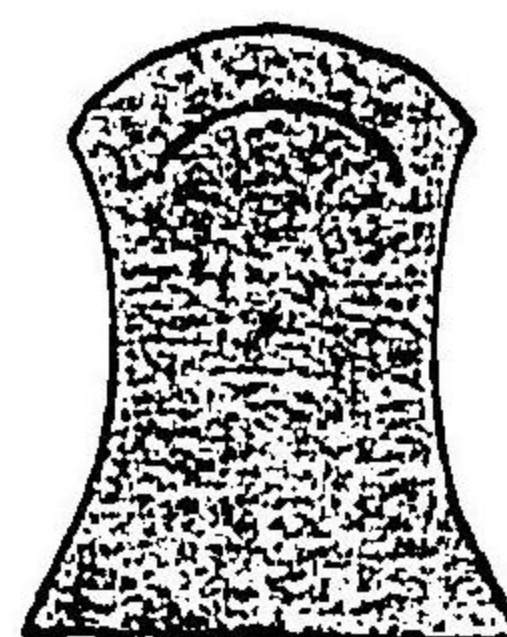
小丸鑿同前

研各式

風字硯



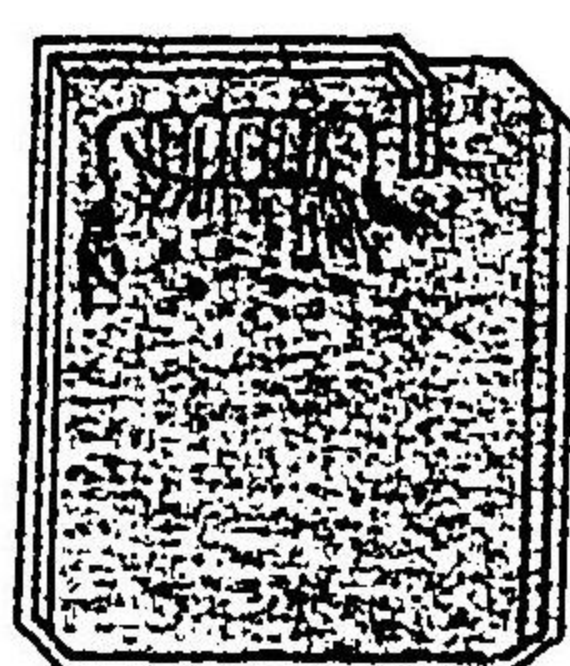
芥硯



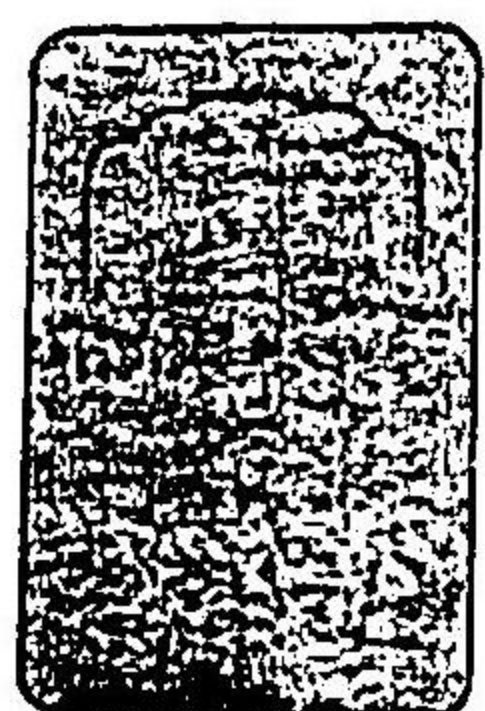
日月硯



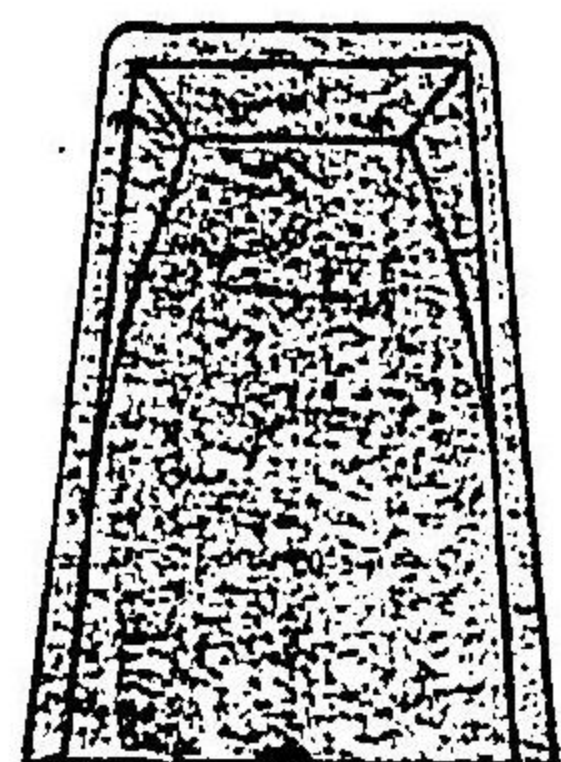
忠岑硯



松蔭硯



源順硯

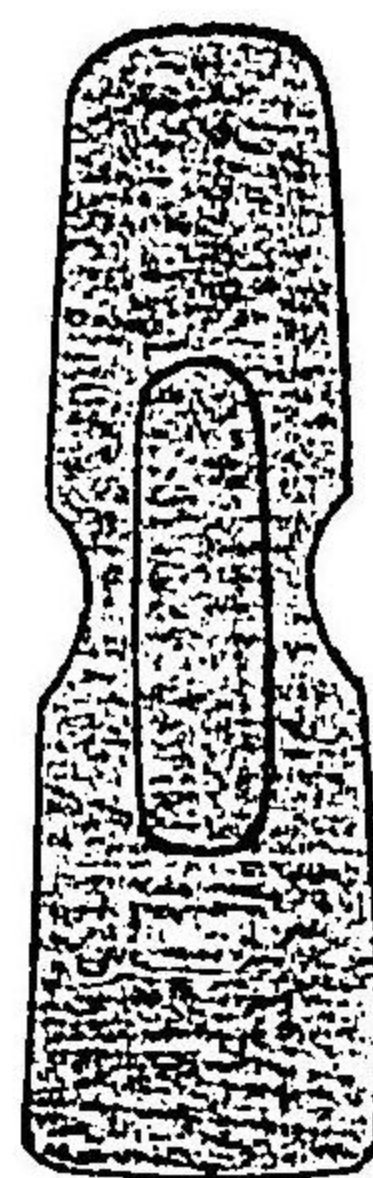


石部 六

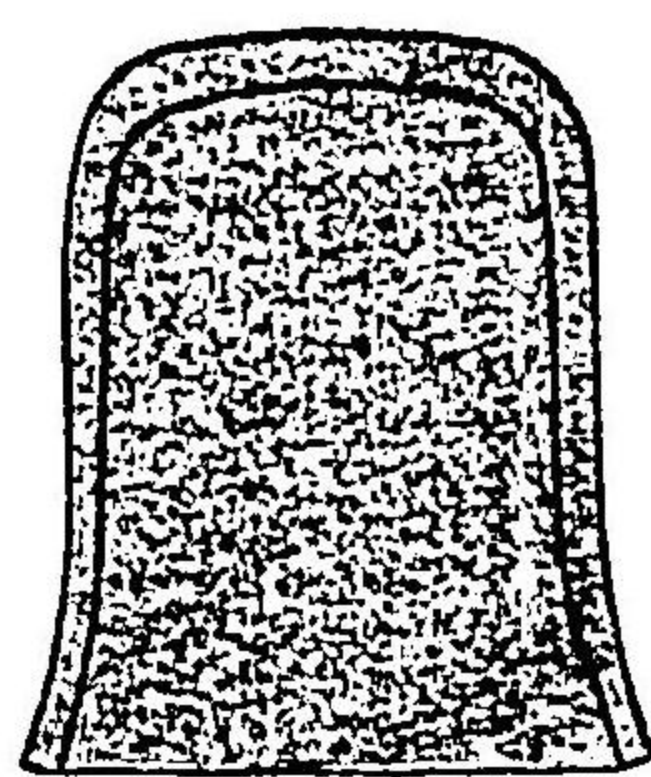
圓形研



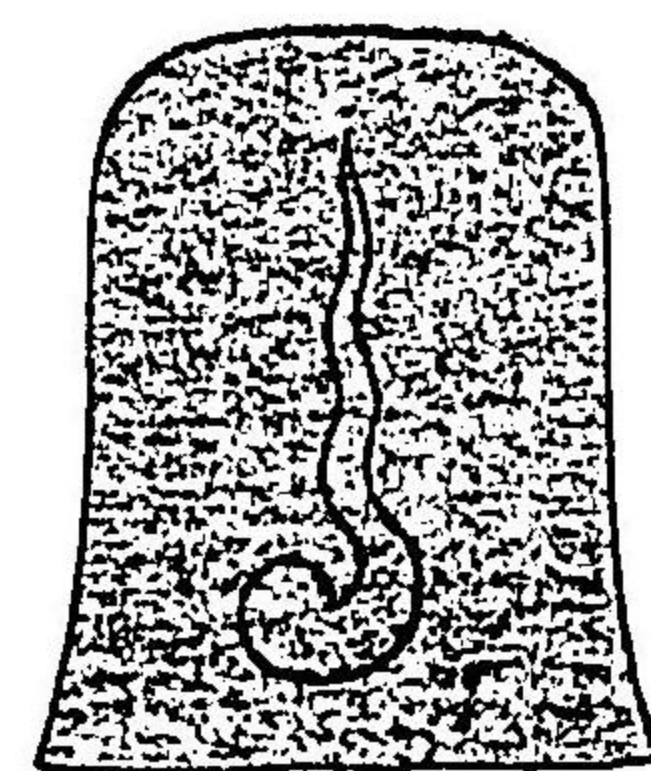
御琴形



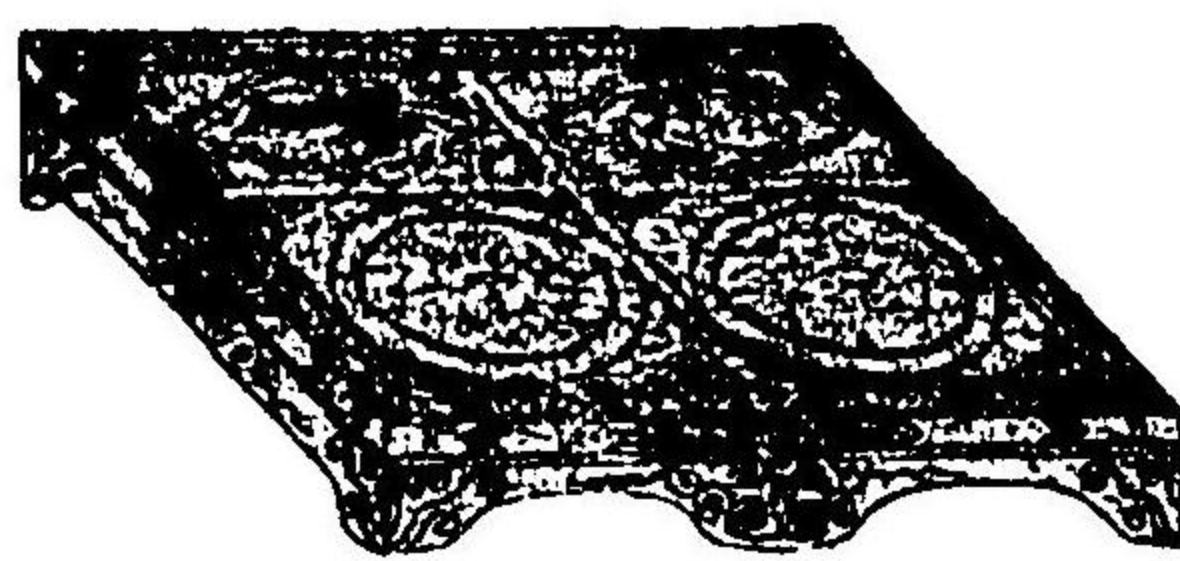
管公研



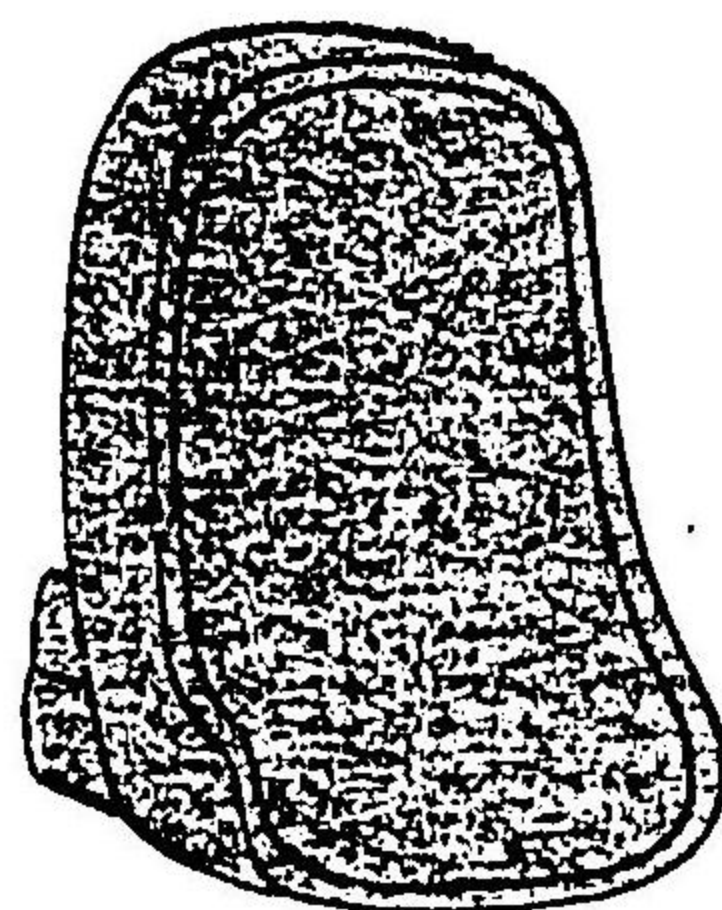
同背



紫式部形



猿面形



○硯に用ゐる石材

好古小録に出来る所

土佐

海石あり、石中銅鏡の如き者を含む、此ふきと佳し

石王寺

丹波○銀紋うろこ易きハ、新坑より佳なり

雨端

甲斐○奥山端山の二種あり、奥と佳し

鳳足

若狭○上材得かよし、紹安曰く一名高田石と云ふ其色赤し、發墨最好し

月輪

山城○古硯に絶佳なる者あり

高雄

山城○同上

高島

近江○同上新坑に材あれし、堅實なり

日光石

下野日光山○深黒色上材あれし、至て堅し

櫻川

上野沼田

寒水 島寒水 非常陸

黒山 陸奥○堅緻ふる者得々

金鳳石 三河

養老 美濃

内山石 豊後○何れも上材得々

高田 美作○古研の上品あり

加茂川石 山城

高野川石 山城

鏡石 伊勢○俗に笹瑪瑙といふ

二見石 伊勢○白濱に似て柔あり

白石 肥後

白濱石 紀伊○此等皆研材に非されども好事者強てこれと用るといへり

高濱 肥前○希に佳ふる者あり

木葉石 越後及諸國 堅實の者あり固より研材に非ら

高山石 紹安曰く羽後の産堅剛にして用ゐるべし

赤間關 長門○又豊前よりも同材出つ天下に布て研材中の廢品あり

饅頭石 磐前岩城○外淡褐色にして中純黒あり外面を磨いて黒石に墨池と穿つ質至て堅緻あり

○補遺 高木紹安曰く維新以來新坑處々に發見は是

正法寺石 其新ふる者と補ふ 陸奥○石質少く粗くして磨墨に却て好し

雄勝石 同上○黒石あり墨色に適をること支那蘄州石

延岡石

日向○紫石よりて發墨亦好し

丹波黒石

丹波○兩端より似とる新坑の石あり漸々盛大
に至るへし

流川石

甲斐○紫石よりて兩端の山脈より出つ支那端
州の紫石より似たり

深澤石

信濃○黒石よりて兩端と同類あり

筑波石

常陸○黒石よりて高島石より同し

武州黒石

武藏○黒石よりて江州虎斑石より同し

石巻石

陸奥○黒色の石よりて磨墨より適ん

金星石

上野○支那龍尾山金星石より同し

川越石

武藏○灰色よりて其性江州石より同し

墨

名稱

須美

和名抄文書具墨和名須美○案するは隴廩の
音轉とせざる説あり然れとも炭よりすしの訓

ありて黒き者の稱ふ
れハ今これとらに

まつのけぶり
御抄松烟集

墨と造れる始り筆より同し
り、善く作りし由ふれハ其頃より愈巧はふれるあり古こ

れと造るは、供御及諸司等の用ハ、圖書寮にてこれを作る、

職員令、圖書寮に造墨手四人、掌造墨とある是あり、其後延

喜に至りても、同一人員にて、只長上一人と多くは、延喜圖

書寮式に、凡年料所造墨四百廷、長五寸、廣八分、絹七尺八寸、篩墨、綿

八兩、拭墨、調布一丈六尺、袋并覆料、紺布四端、阿膠小六斤八兩、席

八兩、拭墨、調布一丈六尺、袋并覆料、紺布四端、阿膠小六斤八兩、席

一枚、食薦フコモ二枚、并干墨料長上一人、造手四人とある。據れハ、粗其造法とも見るハ、又其度量と載せて曰く、凡造墨長功日焼得烟一石五升、煮烟一斗五升、二日二夜乃得熟成墨九十三廷、長五寸廣八分料膠一斤中功日焼得烟九斗、煮烟九升、成墨八十二廷、短功日焼得烟七斗五升、煮烟七升五合、成墨六十六廷、而して、神祇官以下は、頒つ廷數と載せたり、又民部式上は、年料別貢雜物、筆と諸國より貢せられ、墨ハ只丹波國墨二百廷播磨國墨三百五十廷大字府墨四百五十廷の三國の、是此國古よりの産と見えたり、又新猿樂記ハ、淡路墨を擧たり、然れとも、一時の産出ふりりと見えて、他書に見ることあり、又

藤白墨ありて、中古行ハる、著聞集三後白河院御熊野詣、藤代の宿はつうせおハりまゝとりける、國司松烟と積て、御前は置たりけり、中畧此墨ハ程の物ぞ、試よと勅定有りけれハ、下略又入木抄、墨の事、御稽古ハ、藤代墨相違あるへうらひ等見え、中古頗賞せられり、是亦後世絶たりと見ゆ、好古小録坤古昔藤代墨武佐墨並ニ入木家此ヲ賞ムル歴々タルハ、今殘墨タニ傳ハラズと、方今紀伊の藤代近江の武佐、並ニ墨を作ることと聞り、只南都松井氏專其名と檀ハ、古梅園墨譜ありて、支那方氏程氏の譜ニ擬ハ、人の知る所あり、雍州府志ハ、近江武佐、丹波貝原、并

洛下大平墨之製造、自古有之、然其色淡黑而鹿薄、中世南都興福寺二諦坊、取持佛堂燈火烟之薰滯屋宇者、和牛膠而製之、是南都油烟墨之始也、今偶存、爾後南都土人倣之、取油烟造之、又書用カるハ油煙を最トシ、藥用ニ入ルハ松烟ト佳トシ、互ニ相反セリ、方今兩煙を雜ヘ製シ、上等ハ純油烟、下等ハ純松烟ナリトイフ、

製造法

紹安高木壽穎録

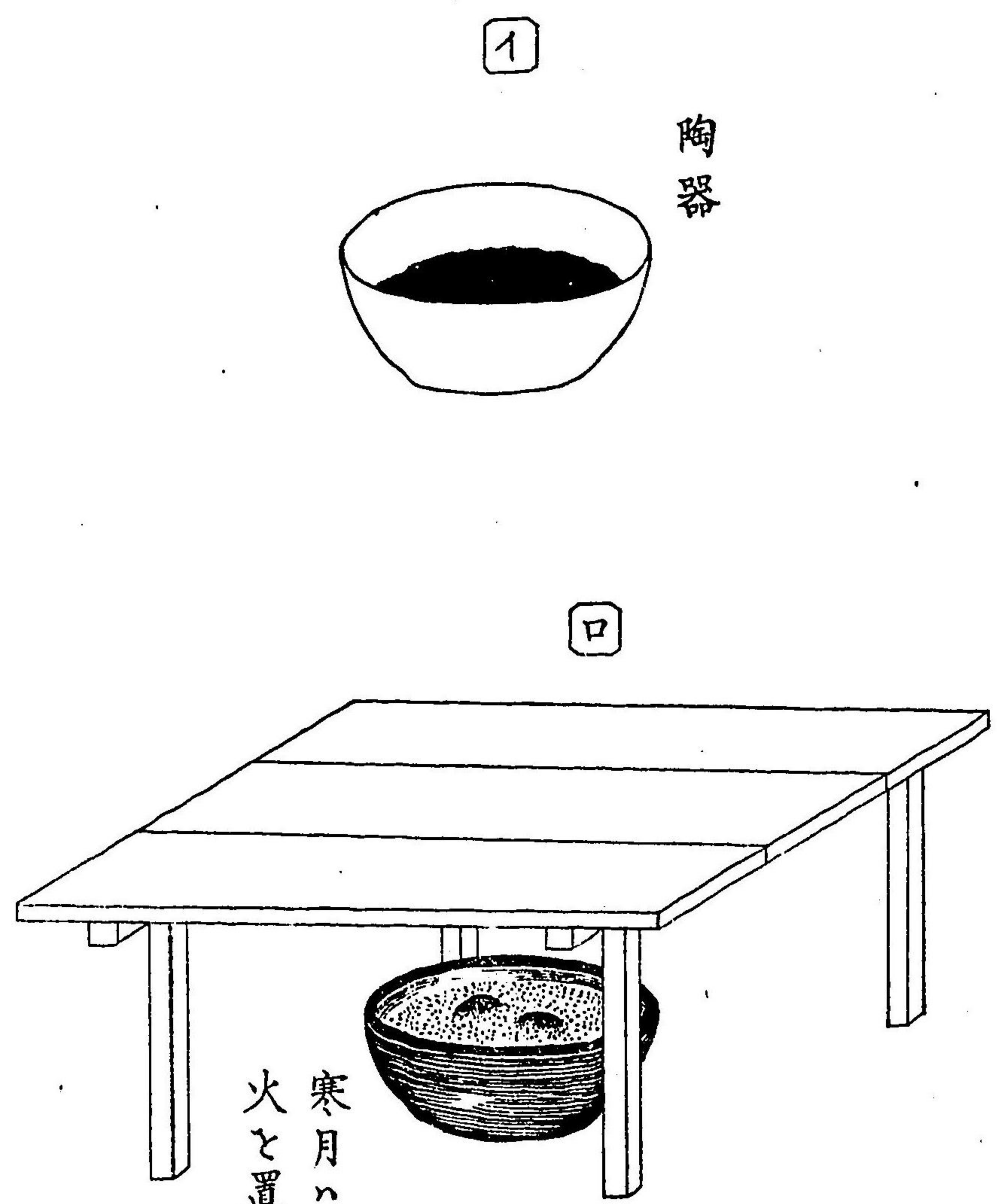
油烟松烟ニ關セシ、イ號の器ニ傾ケ入れ、膠汁と合セシ、膠斤ニ水一升を加フ、これと和セリ、其初ハ枯燥シテ離散ト産業袋ニハヒリ、煙ニ百五十匁を量トシ、度トシ、産業袋ニ膠一斤水一升と煮テ塊と成スルヲ度トシ、

漸ニ洩シテ、麩粉の如ク、自塊と成シと要シ、これを洩ルニ板の上ニ於テ、回の板下ニ炭團の火を埋メ置キテ、膠汁の凝結を禦ク、多く寒天ニ作ると佳トスル手と以テこれを洩シ、煉ルこと愈久ニタレハ墨愈佳トイフ、さて十分塊と爲シ、至リテ、これを墨模ニ入れ、形と作る、此墨模ニ壓を置クあり、又搾木ニテ搾ルモあり、字畫繪圖鮮明あるハ、一ニ此時の巧拙ニ由レリ、これを出シ、濕灰ニ入れ、灰ニ水と減キ、埋むこと四時間ニシテ、又これを出シ、乾灰中ニ埋むルあり、これと墨エこと一日、又取出シテ、再極乾の灰ニ入れ、灰換と稱シ三日と經テ、これを出シ、水ニテ洗フ、これを洗それよりこ

れと磨く者、彩色とる者等ありて、各其工と施して成るるあり

芳野曰く産業袋、油煙を厚き紙に載せ、甑に布を敷きて、文火にて蒸し、油氣を去りて用かることと云へり、蓋式の煮煙の字是あらん、

古梅園墨談に云、墨の形昔は鐵にて造る、南都二諦坊墨の形今は残り、是を鐵形といふ、今の形の枇杷或は梨の木にて造る、形は大小厚薄の品あり、板三枚よりして中の板と墨の厚さとし、上下二枚の板は、繪様文字等を彫付ると、三枚形と名づく、又二枚形あり、



附 採烟法

油煙松煙の別あり古の多く松烟あり後世の油煙と貴ふ

油烟採法

上の蓋の陶器細と施さるるにて火と妨さる爲に少く隔て、五

十乃至一百も列ね間斷

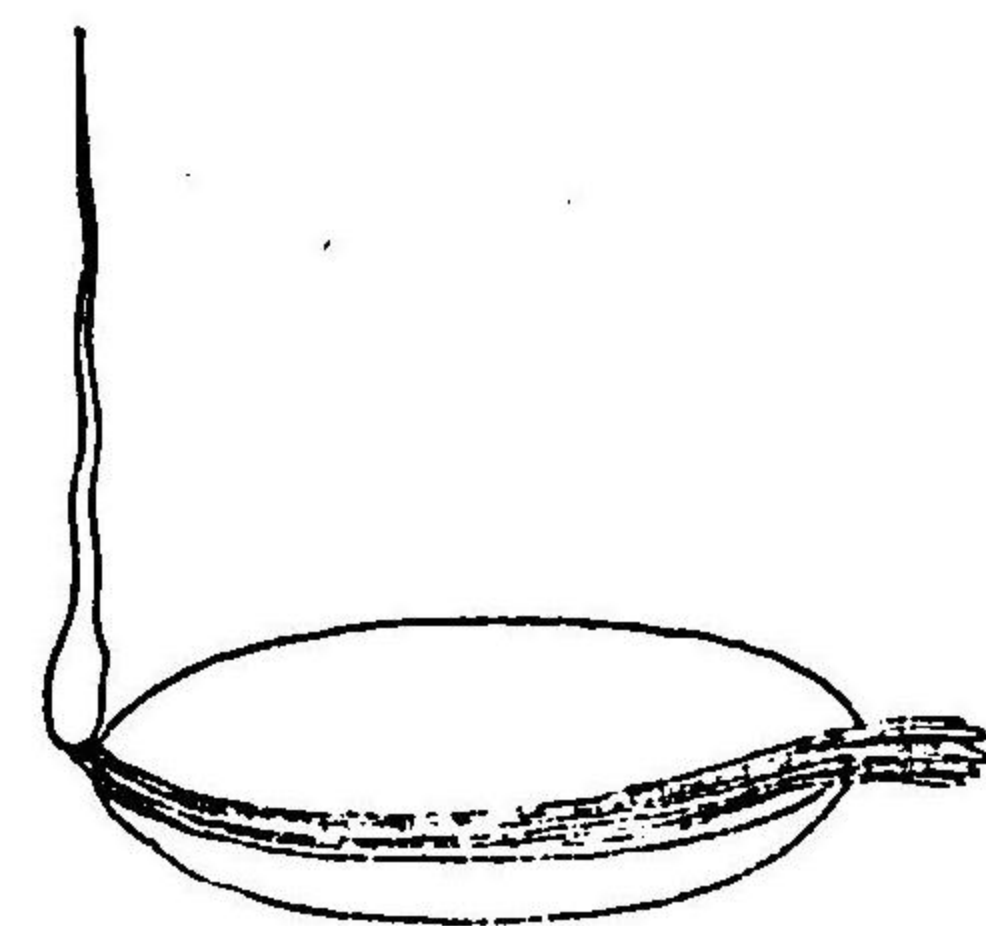
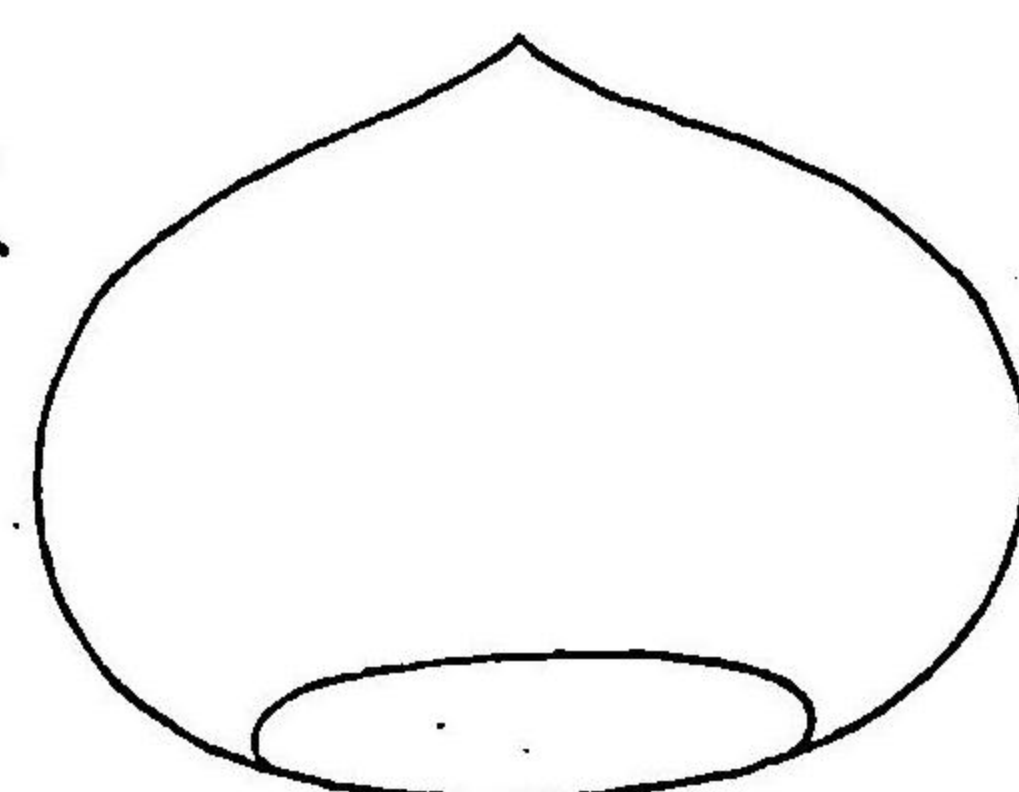
おく羽帚にて掃

ひとるあり採ら

ひいて時間久し

きよ過くれり油

烟凝結して用と爲さる



油の麻油と最とし菜油と次とし燈心の細きと佳とし一
蓋五七本も入るあり凡油煙の上品の墨と造るゝ用ある

松烟採法

方三間又の方四間の四方ぬりやにて其中に隔を設け壁

の細川紙等の裏を出して貼り、烟を止むるは滑あらさ下

の焼場を營石にて低く圍松枝節の脂ある所を俗は細

く割きて焚あり、下品の者其煙紙は滯るを掃ひ收むる

あり、脂あき常の枝を焚紀伊田邊より多く輸出し又日高

熊野より出つ近江土山大和十津川土佐丹波日向伊賀

等より出つれとも紀伊の者も及を以

刻本

刻本の始ハ、續日本紀寶龜元年三月百萬塔と作らせ給ひ
 一、事見えとれと、史ヨハ書寫及印刻のことと載せ、然れ
 とも今存する所の塔中の陀羅尼を見る、正しく刻本の始
 とひ、諸印章ハ古よりありて、銅にて鑄成し、今も往々
 存するを以て、或ハ此陀羅尼を折して、銅鑄の者とい、然れ
 とも、其鮮明ある者と檢する、全く木刻と見えたり、削刷の者
 も見てこれ、其後久しく木刻あると聞けり、山槐記 治承三
 年十二月二日、有御送物摺本大平御覽百鍊鈔、四 永延元年丁亥二月
 十一日入唐僧裔然歸朝、隨身第三傳、釋迦像十六羅漢繪像

并摺本一切經到蓮臺寺とある、其本の舶來ふれと摺本
 の字を用かると以て、其前己ハ我國にて製造の久しきと
 見る、一、摺本支那ヨハ絶て無き名あり 又吾妻鏡 六 文治二年六月、觀音
 經轉讀、同像一萬體、摺供養事あり、又 十六 正治二年正月、摺
 寫五部大乘經のことあり、又 廿五 寛元元年六月四日、爲前
 大納言家、御願奉爲後鳥羽院御追善、日來被摺寫法華經百
 部、此形木、即所被彫、彼宸筆也、仍今日被遂供養、同 廿六 亦
 此板を摺寫せしことあり、上の如く佛像を刻せし者、慧
 心僧都の亂板、坂山坂本來迎寺ハ藏を縁起、曰く寛仁元
 年三月十五日、曉弥陀の來迎と感拜し、片板
 又画きて自刻、日蓮上人の帝釋天、武藏國葛飾郡柴又村、題
 する所と云ふ

元禄三年刻
人倫訓蒙圖
六の職
板木彫り
板木屋弘法
大師石摺と
不り恵心亂
板不り給ふ
今の櫻木の
板の善福と
いふ者はり
始一とらや
善福其時代
を詳せし
と雖其始近
古ふるべき
ら如

幅一尺五寸梨材にて両面は等、今も存せる者あり、然れども、刻し自名字花押を刻せり。等、今も存せる者あり、然れども、建久年間印行の選擇集あるを見れり、大抵其前後より行れりあるは、其後正平十三年板行の論語、堺浦道祐居士重新命工鏤梓とあれり、其前己に論語の刻本の有りあり、此頃よりして、刻本漸く行れ、周防山口板、大内義隆の刻せしめし書よりして、聚分韵略等今も往々存せり、其他享禄戊子、永禄甲子の刻本韵鏡等、世も残れるは、愈刻本の行をれりこと見るは、且古活字の書、年世知るは、くらさる者も、皆此頃より先後して刻せしと見えたり、慶長年間に至りて、幕府七書の活字を作りしは、活字七書の跋に見

北村節信の
嬉遊笑覽
曲亭云錦繪
ハ明和二年
の頃唐山の
彩色摺を習
ひて板木師
金六といふ
者板を其
と語らひ版
木を見當と

えり、其文は云、維時内府家康公以刊字數十万賜予、即開六韜々々是文武備書也、吾公治世不忘亂、謂乎、慶長四奄集己亥仲夏吉辰前學校三要於伏見城下書焉、又五彩を以て刷印するの始、江戸真砂六十帖、元禄八年、元祖市川段十郎鐘馗を扮し其容を畫き、刻て街に賣、價錢五文、又江戸圖鑑綱目、地本屋長谷川町、松會三四郎版、錦畫の始とあれ、傳へ云ふ芝神明前、上村吉右衛門、江見や某、板木師金六といふ者は語らひ、初めて四五遍の彩色摺を製せしは、又關根新兵衛、馬喰町の創意といふ、書籍の刷印、彩畫の權輿等、上の如くふれと衣を摺る

付ること
工夫して初
めて四五遍
の彩色摺と
製し出し
程よく所
にて摺出
事あり以
と金六語ま
り彼金六ハ
文化元年七
月歿せり

爲の刻板ハ至て古一所謂摺衣と造る刻印あり和名抄裁縫具
の横俗語加太岐と云へるハ裁縫の定木よりて同名異物あり今南都東大寺に存せらる
所天平勝寶の年月を記せる屏風の袋あり、穀布を以て
之と作り、花紋を印せること、今の刷印の如し、其色料紫
の根摺、埴摺、何を以てせると辨をへうらひと雖、國
史及萬葉集中に所謂摺衣も、亦外ありさるく、且神事
の時、着せる青摺亦是あり、只其紋小草、梅、柳、蝶、小鳥、藤
棕櫚等の定則あると異とい、枕草子五かよきの形、畫
かきとる織物の唐衣といへるも、其青摺の紋といへる
ふり、其青摺の法ハ、飾抄下三條裝束抄等に據れハ布を

其形木の上、糊貼し、上より物を覆ひて、踏固め、其文の
凸出せる上、山藍或麥葉目の葉を碎き、其汁を塗り、乾
てこれを剥き、是中古の法なり、唐紙唐紙ハ唐帟障子と貼る帟といふ
近古所謂畫半切の如き者ハ、早く七十一番職人歌合、
を記しといへる有りて、畫及紋を摺り、つらと見ゆ、詞は
梅の花をかり、さる布と易きといへる語ありて、歌は
「明らけき月と見れと、さすう猶ほりめはくもる、摺形
木は又えびずりの、花田はまどる實紫、いつれよりつ
る、人の心とといふ歌は據れハ、已に彩色摺もあり、あ
れと、數板を合せて彩を爲せハ、前といへる頃より始り

一ふるつ

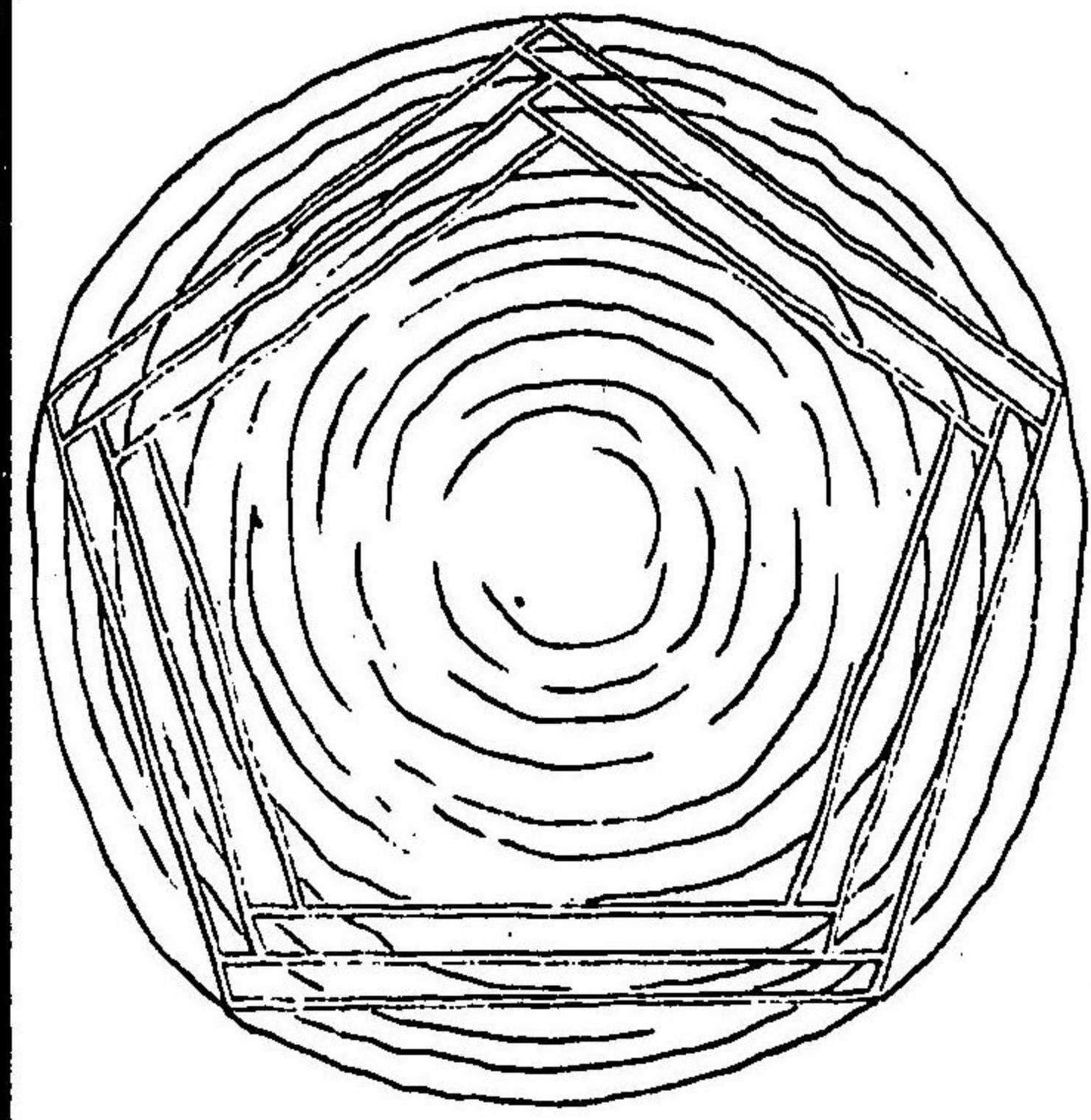
名稱 摺本 百鍊抄〇印摺寫 東鑑〇刷形木 同〇鏤摺形木 北
院職人歌合七十一番
職人歌合〇同上

以下印
刷之法

宮田之行案

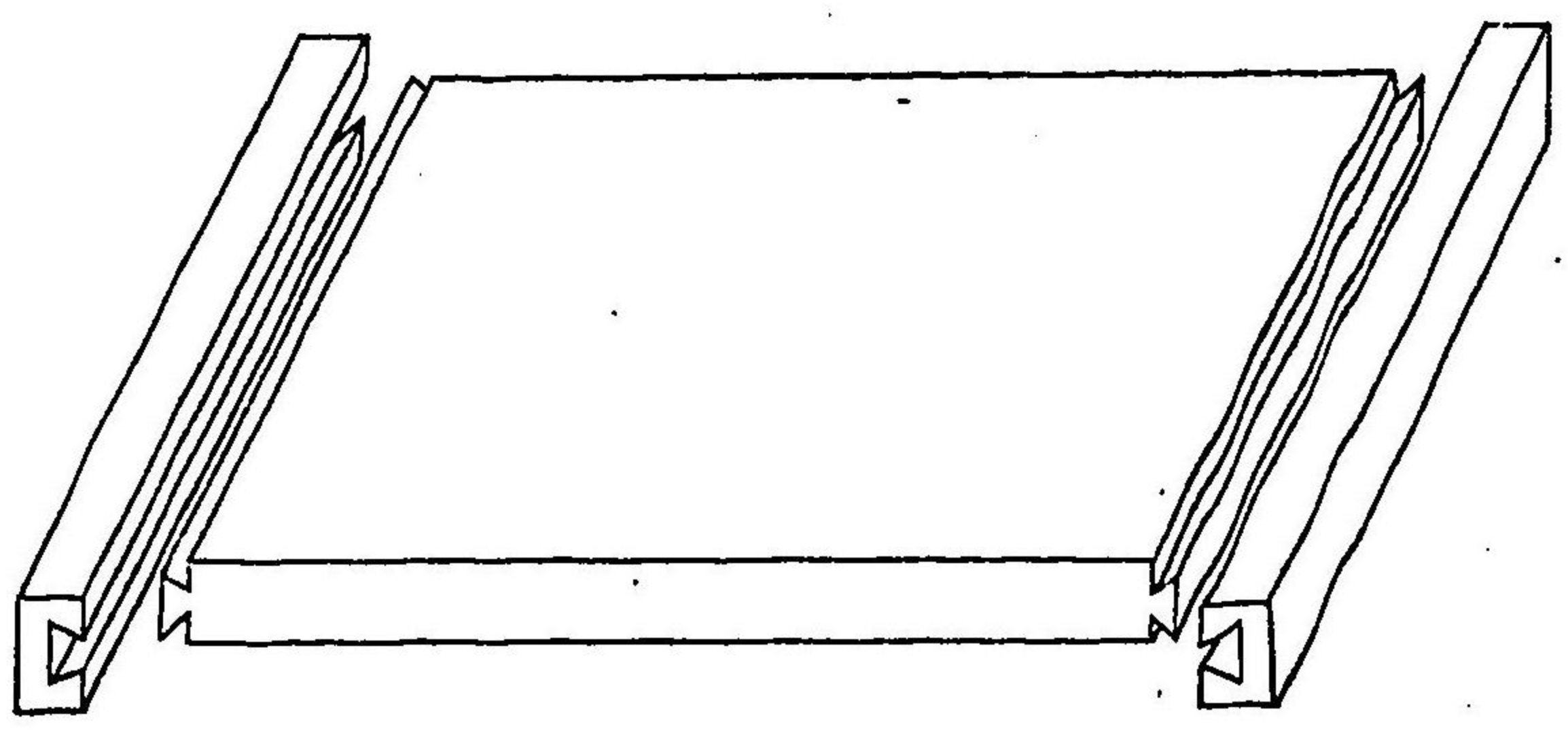
材と解くの圖 其木理圖の如し

櫻の一種山
中よ生し山
嬰桃と稱き
る單瓣白花
の者なり

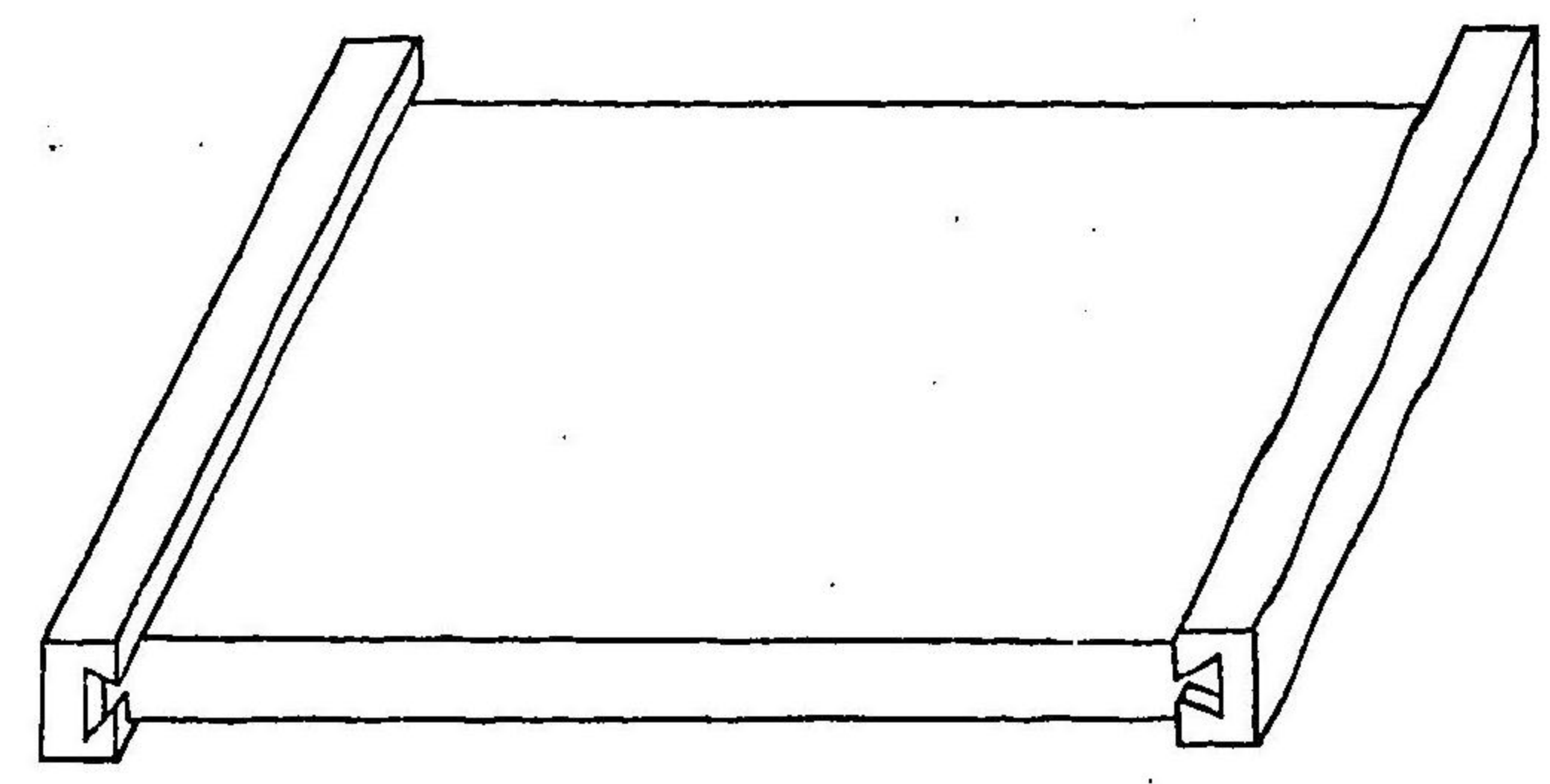


材と向陽よ
て乾いと忌
む陰乾日と
經とる者と
佳とみ

ハシバミ

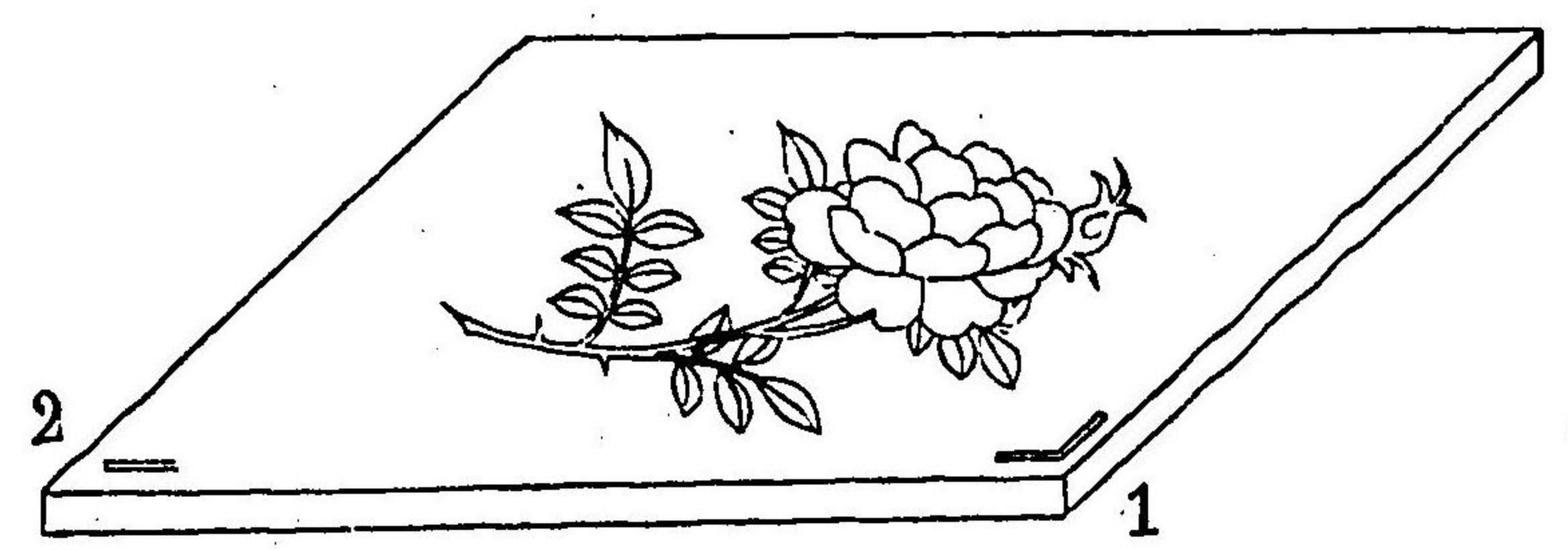


ハシバミ
と入れて
反りと止
め且毀缺
を防ぐ者
なり



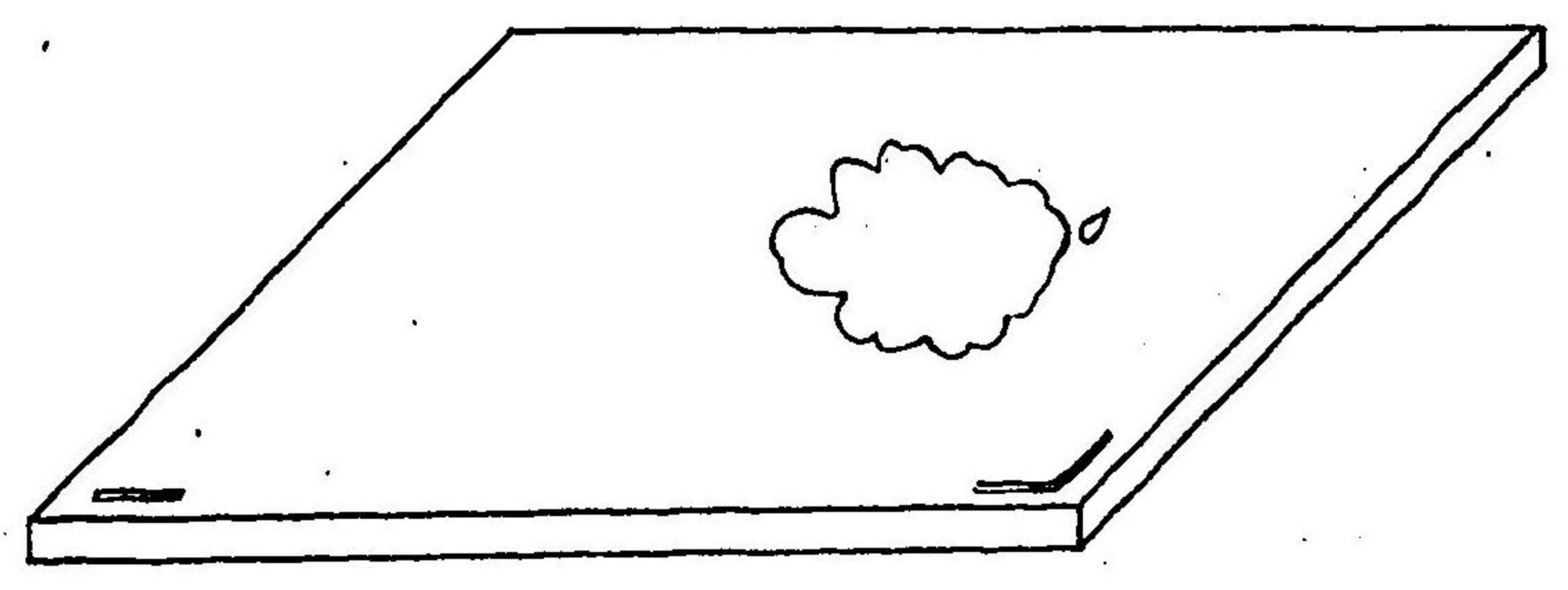
第一板墨を用ふる者 臺板と稱い

彩畫板式



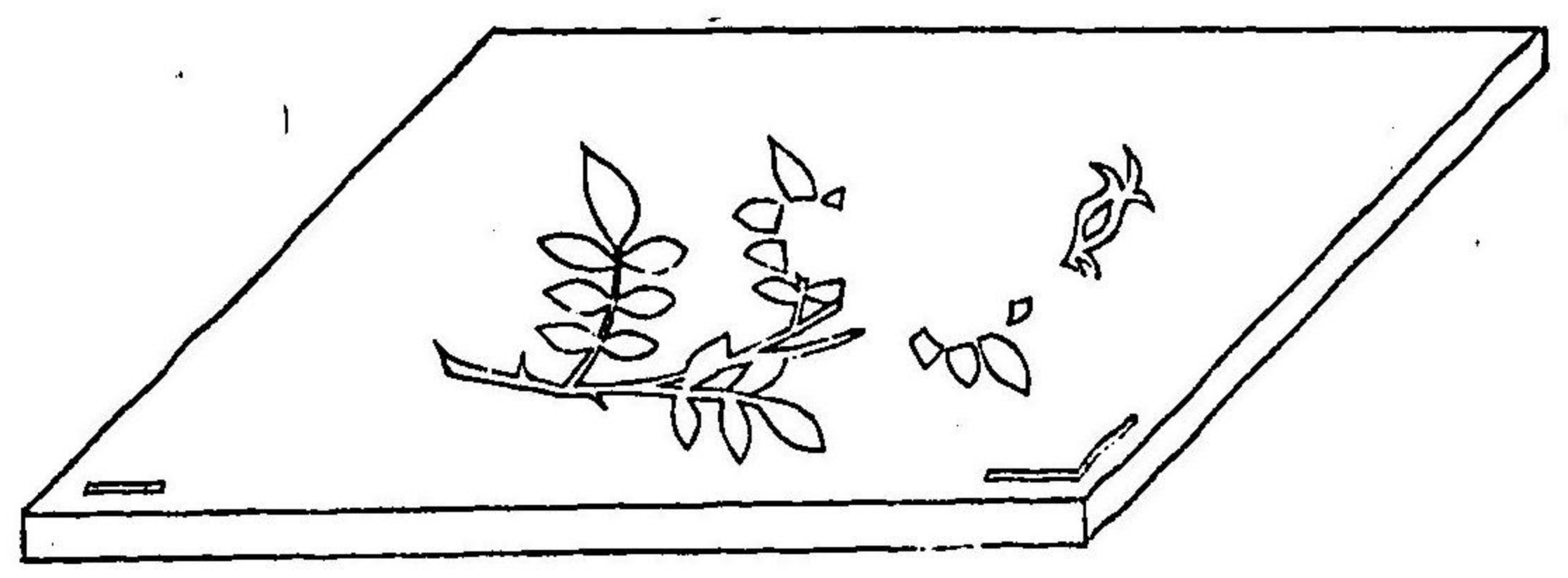
1を鈎カキと稱い紙の右邊
の下を容と2と引付と
云左邊の下を容る鈎引
付の二と併せてケンタ
ウと稱い見當ミタテの音なり

前マエの蕃ツバキ紅と抹ヌグもる者



第二板 色板と稱い

前マエの蕃ツバキ綠葉と用ヨウる者



第三板 色イロ板イタと稱いシ并ナよ

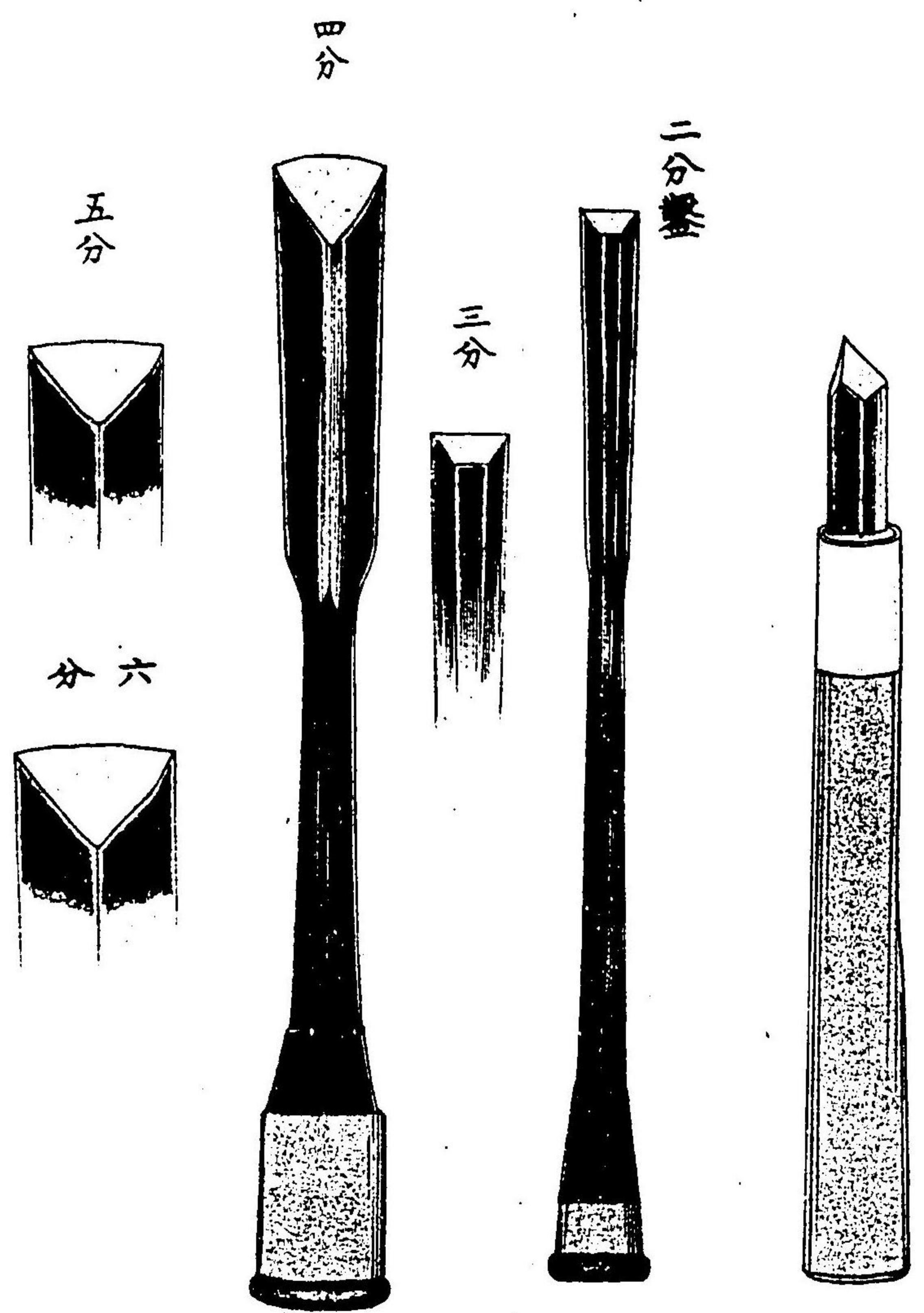
右の如く次序して成る但臺板ハ堅緻と欲し、色板ハ柔軟
を要し、

刻法 書畫并ニ鴈皮紙西判と稱するハ厚くして堅し故ニ
これを用ゐるハ美濃判半紙判を用ゐ
るふ 或ハ薄美濃を用ゐ、糊を水うて稀ユるめ、板はニ塗ぬり、指ゆで
て拭ぬひ去り、其上の紙を貼りて、其後手掌で磨り、紙の背を
とりひく剥ぎて、字畫を分明ふらしめ、乾きて後之を刻を
刻をる前麻油を塗ぬ
り愈に明か徹せむ

刻器

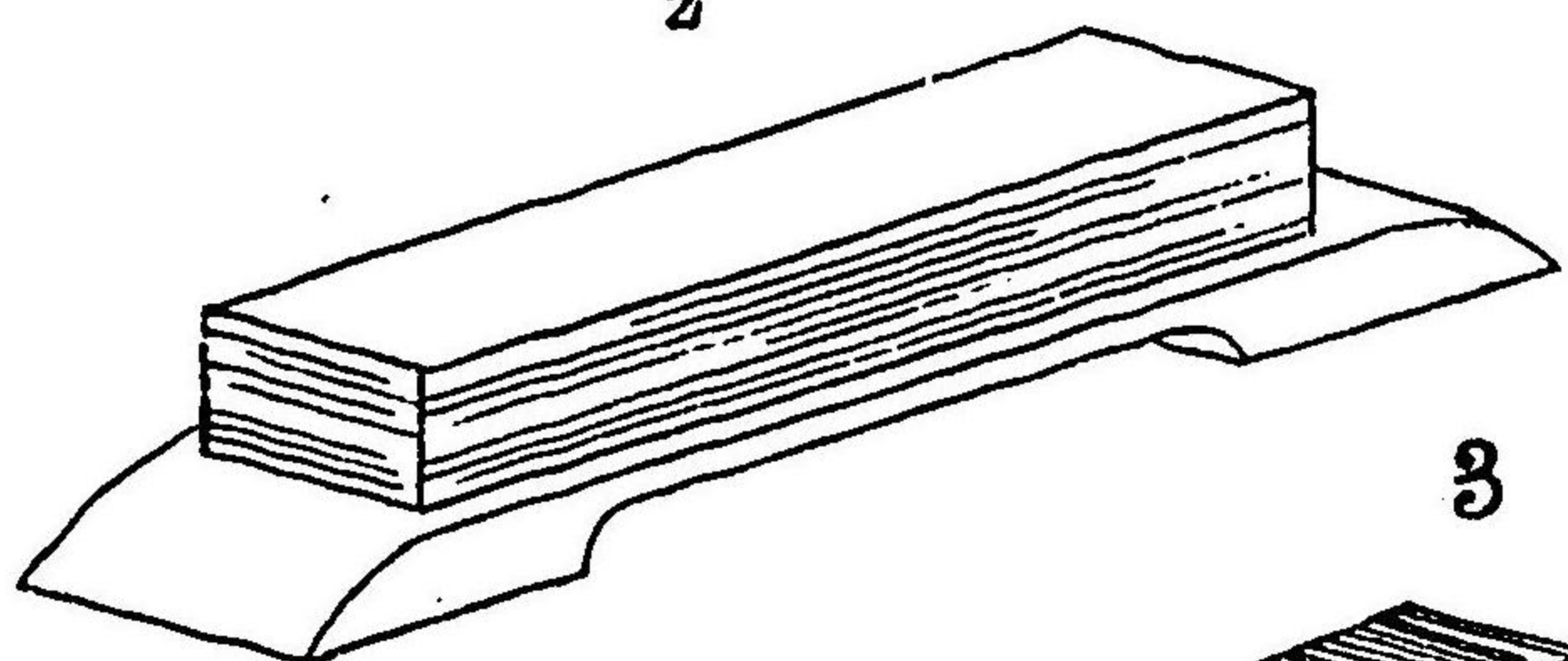
刀鑿の圖 并ニ諸器

小刀 種々ありカサヤ小柄小刀剃刀等を磨り
て作り用ゐる字畫の周圍を彫る器あり

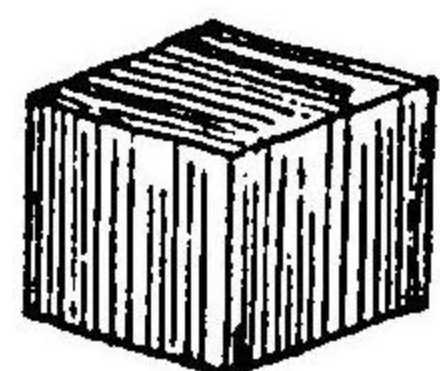


越砥

2

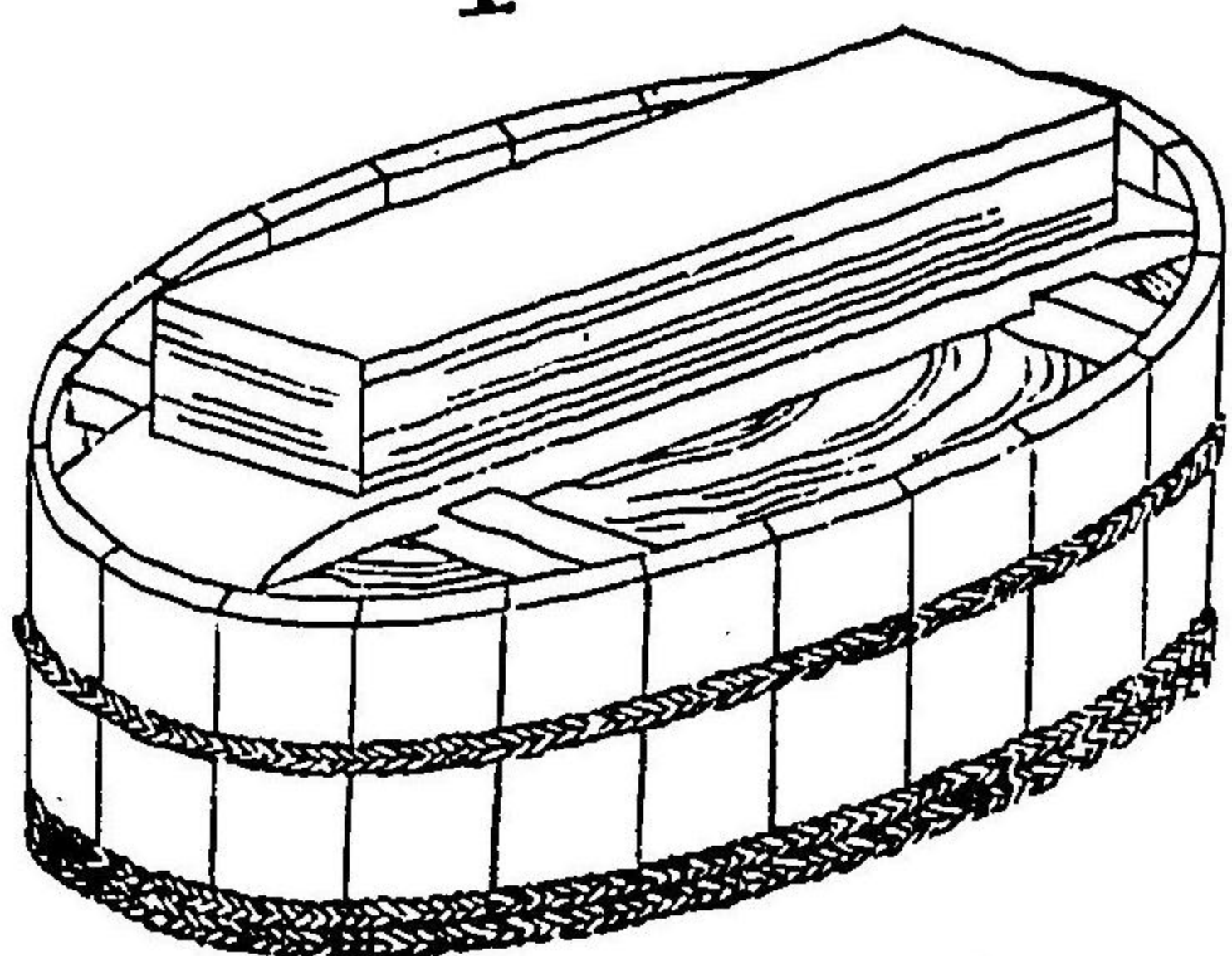


3



白砥

1



さらへのみ

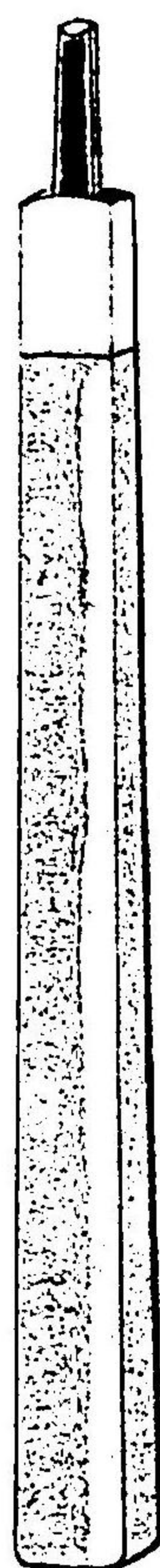
字畫の

間を削

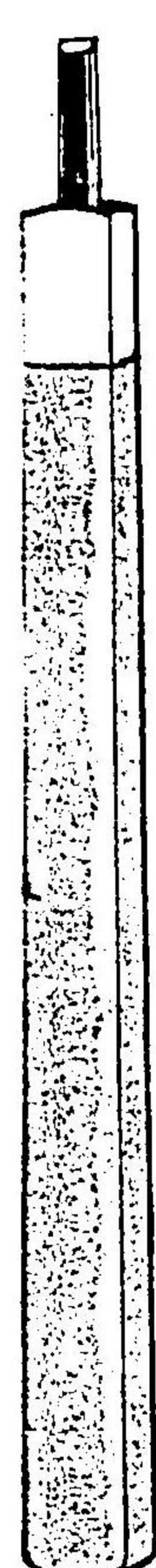
り去る

具あり

廣スキ



中スキ

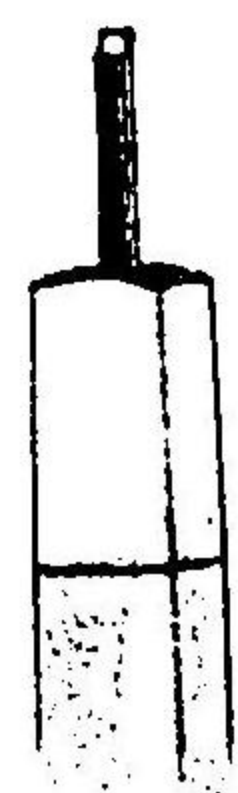


小スキ

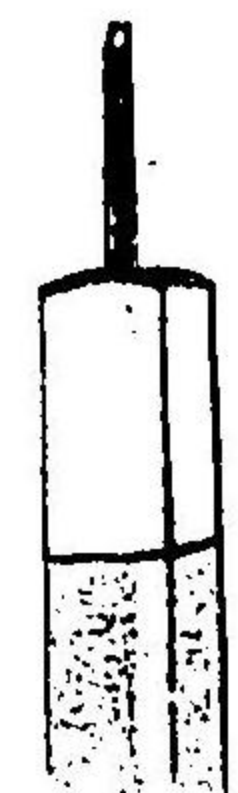
これハ刃と角よとぐなり



フトフスキ



中小スキ



以上の諸器を磨くは1にて粗其刃を製り後3を以て2の面上を擦り平よくして後2にて磨き成をふり

櫛をらひ柄竹にて作り毛ハ熊毛なり

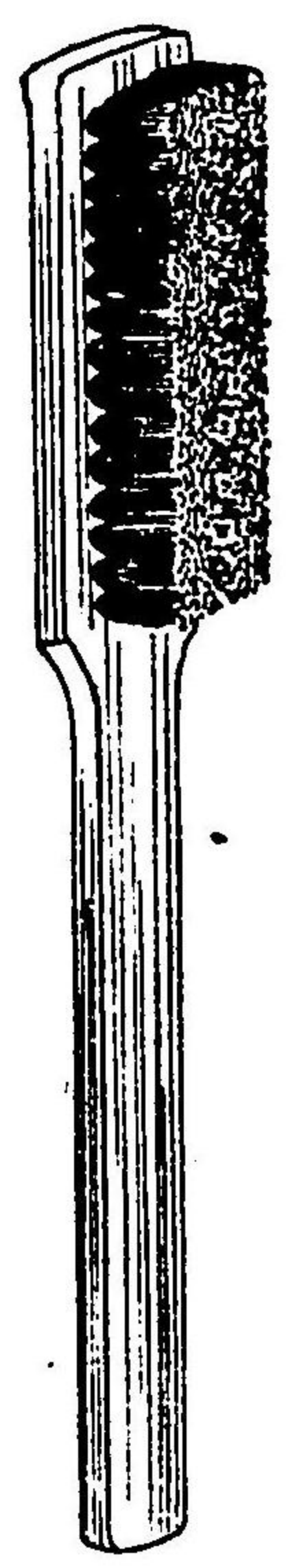
木屑を掃ら

ひ去るは用

かろなり隨

て彫り隨て

掃ふ為なり

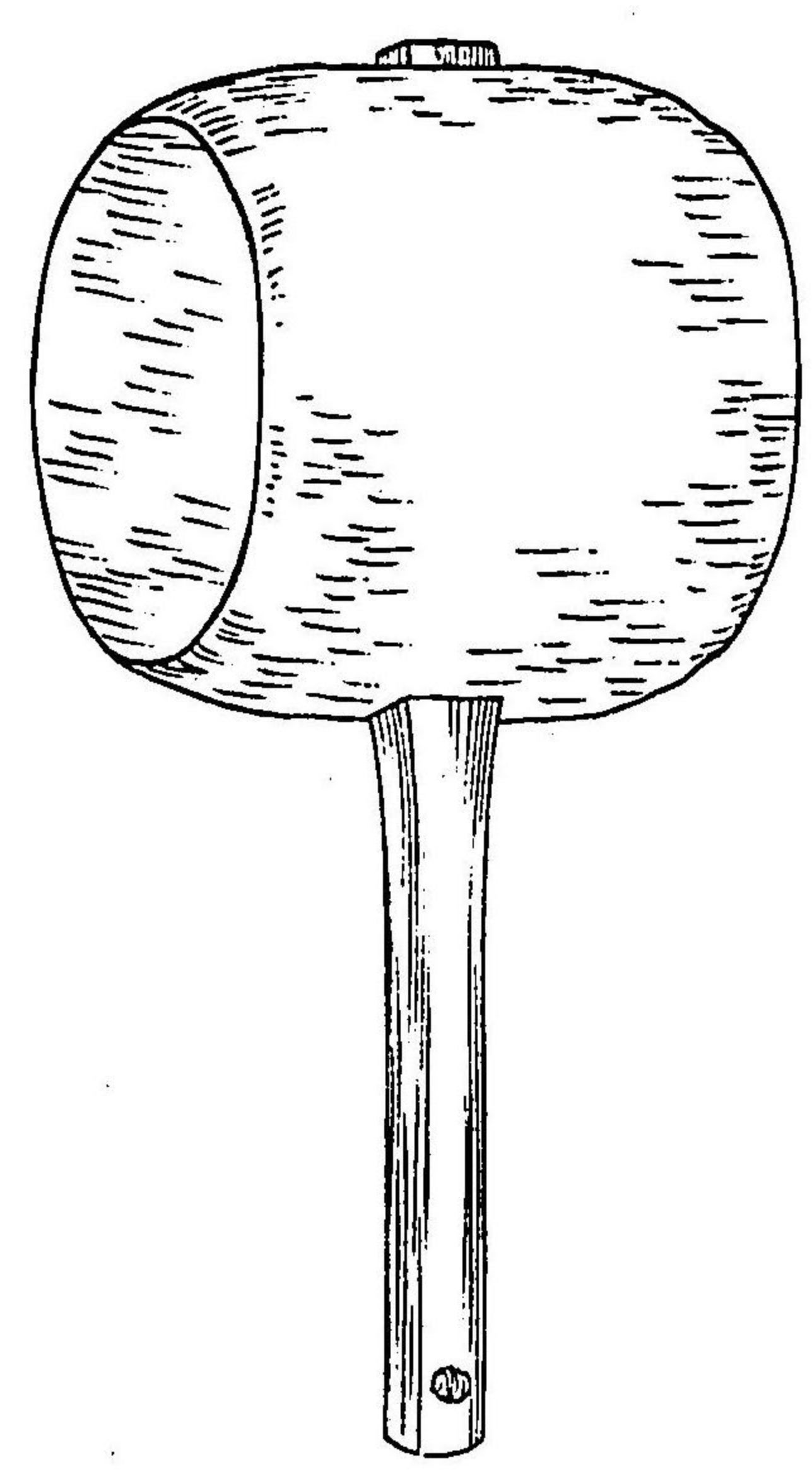


總合さいづち

總合の四邊の

潤き處を鋤く

さいづち

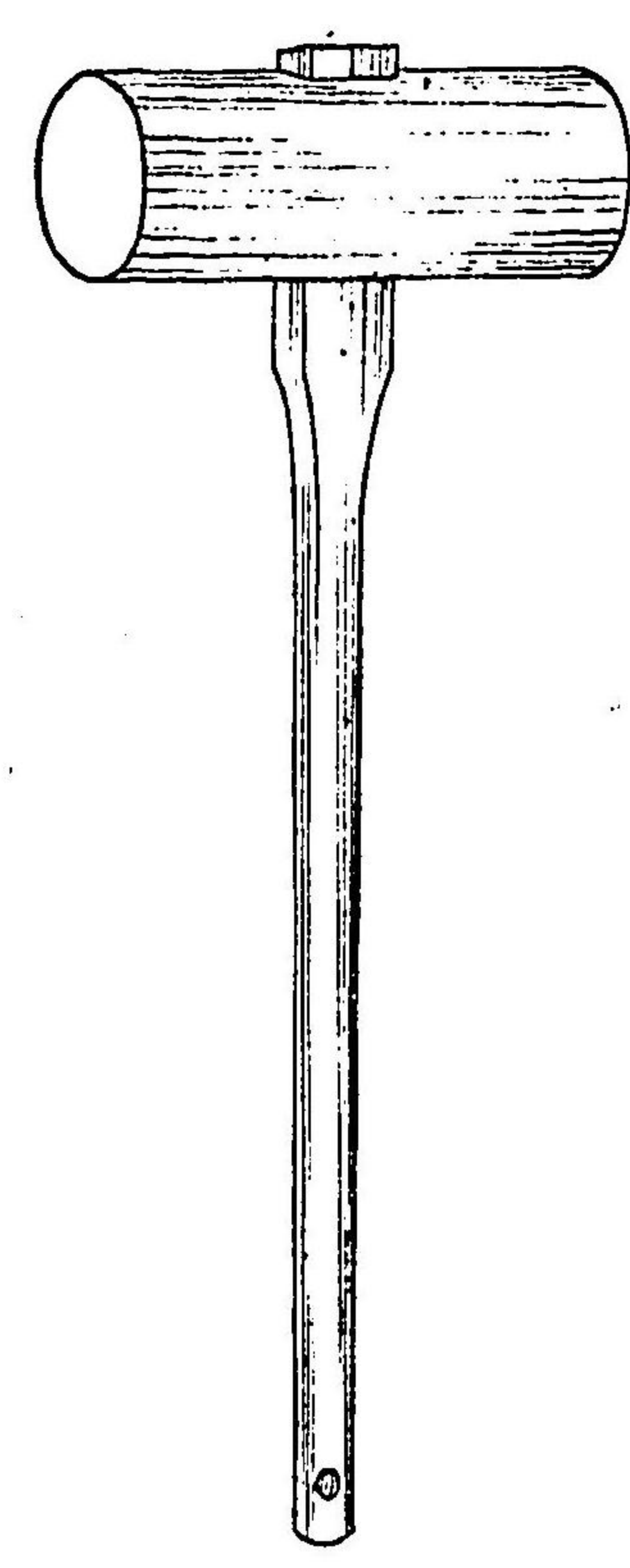


合切さいづち

合切の書畫の

分界を切るな

り



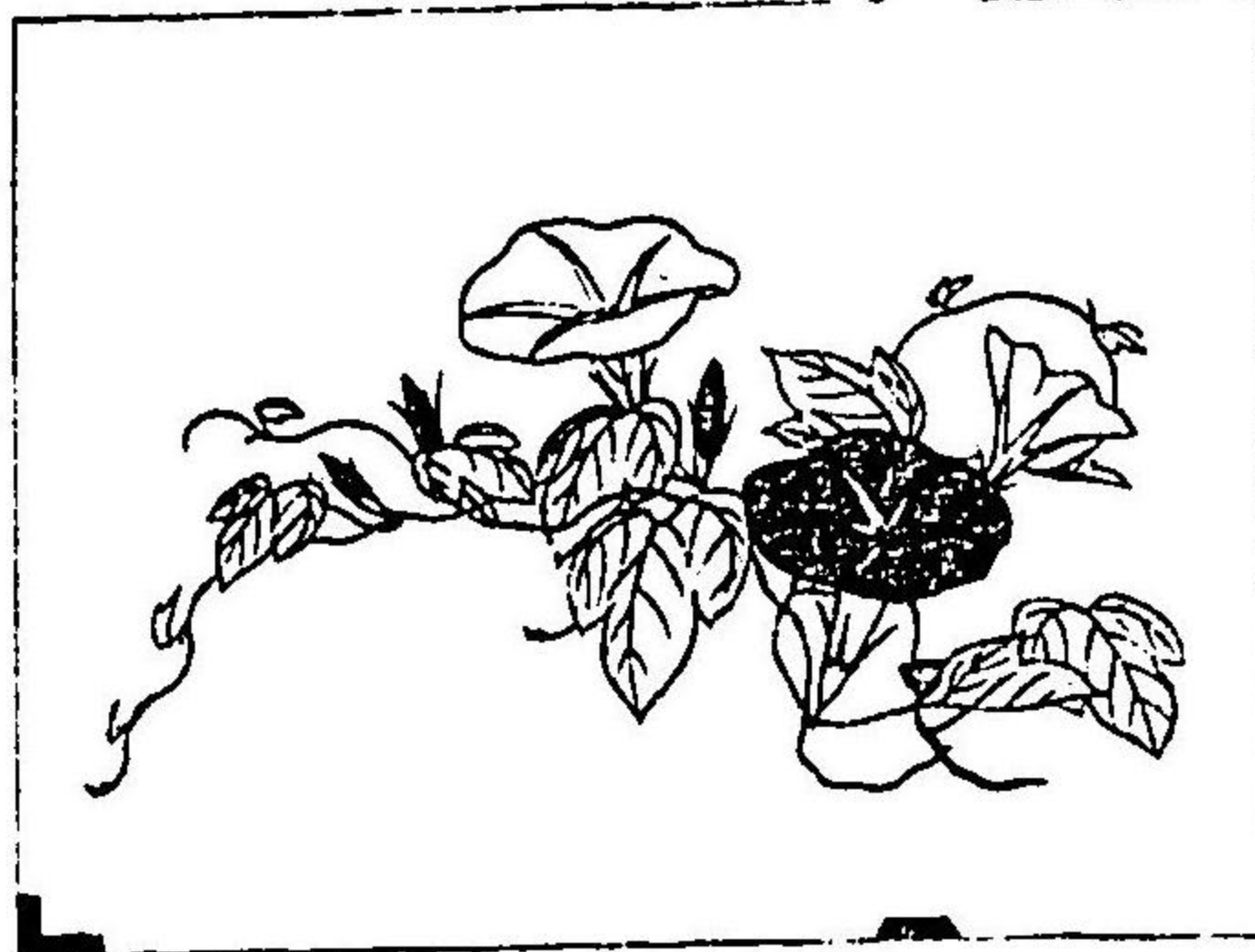
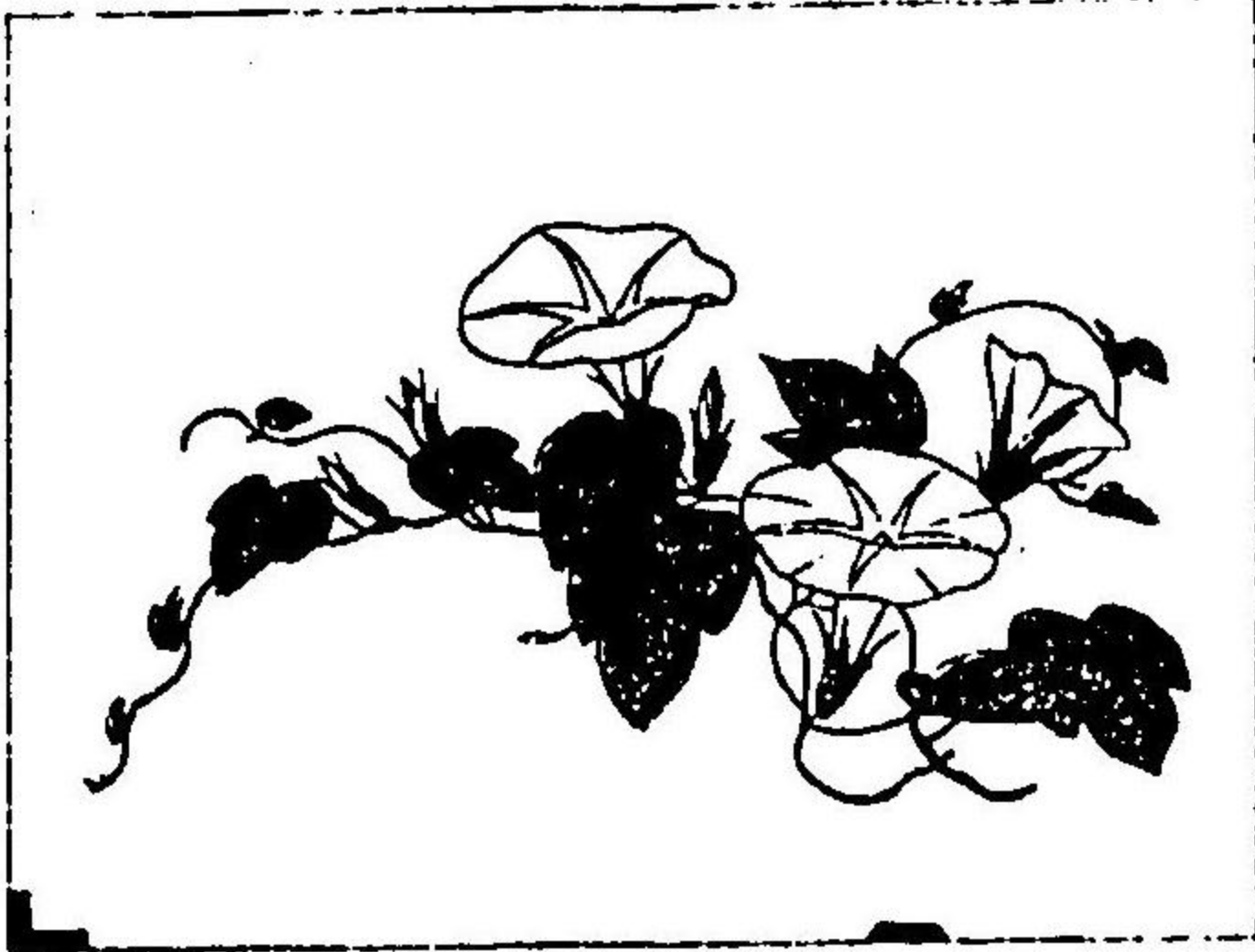
右の諸器にて、所謂臺板を刻し、其彩色の品數に應じ、これと美濃紙に印を、但此次の所謂標的と連ねて、墨を塗り、これと印を、これ其標的を併せ刻せらるる爲なり。

此一紙葉帯と残り削り去りて綠色の板とし

此一紙後の二花と残り紅色の板とし

此一紙前の二花并葉と残り紫色の板とし

美濃紙に印を
數紙



前の如く、墨にて印し、紙上、顔料を用かるべき部分と、臘脂にて塗り、其見やまき各其紙を一枚の板に貼り、紅痕のみと存して刻し、其餘を削り去るこれを色板とし

刷印諸法

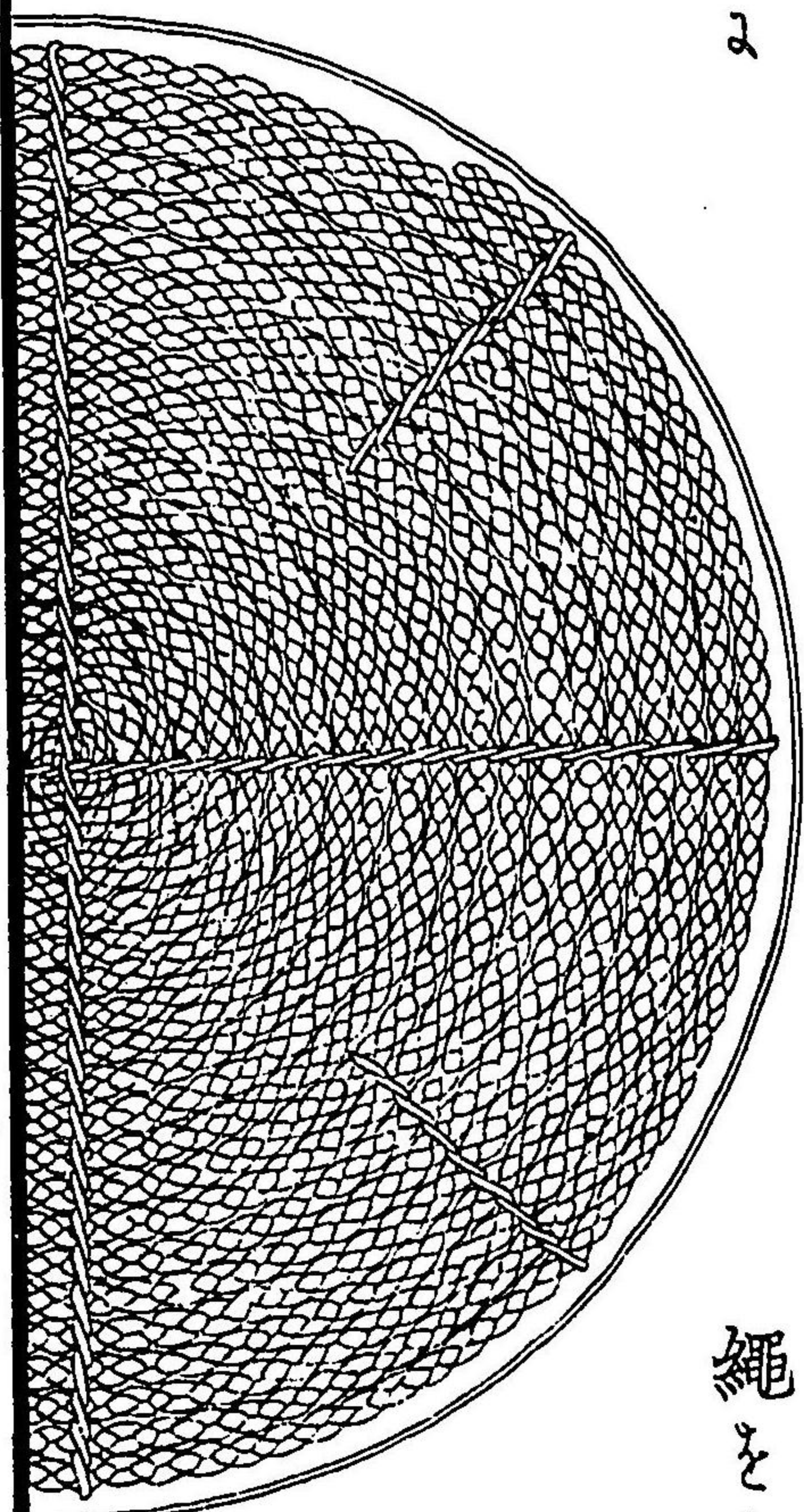
刻成の板、これを水にて洗ひ、表面の残紙を去り、刷毛に墨及諸色料を點し、板面を平均に塗り、紙を覆ひ、バレンにて擦り、其紙水を刷りて微潤ならしめ、六時間を経て潤燥の間を住せりとし、

又彩繪もこれと同じ、但其紙膠礬と刷るると異とし、膠礬淡といへども、寒時の膠を減し、暑月の膠を多くし、又膠礬

と用ひ、奉書紙に印するは、フクサと稱ふ刷工の難と
する所なり

刷印諸器

バレン底面の圖



外廓は太き捻紙の

繩を嵌めの中ハ總

て篠皮の細

繩にて旋

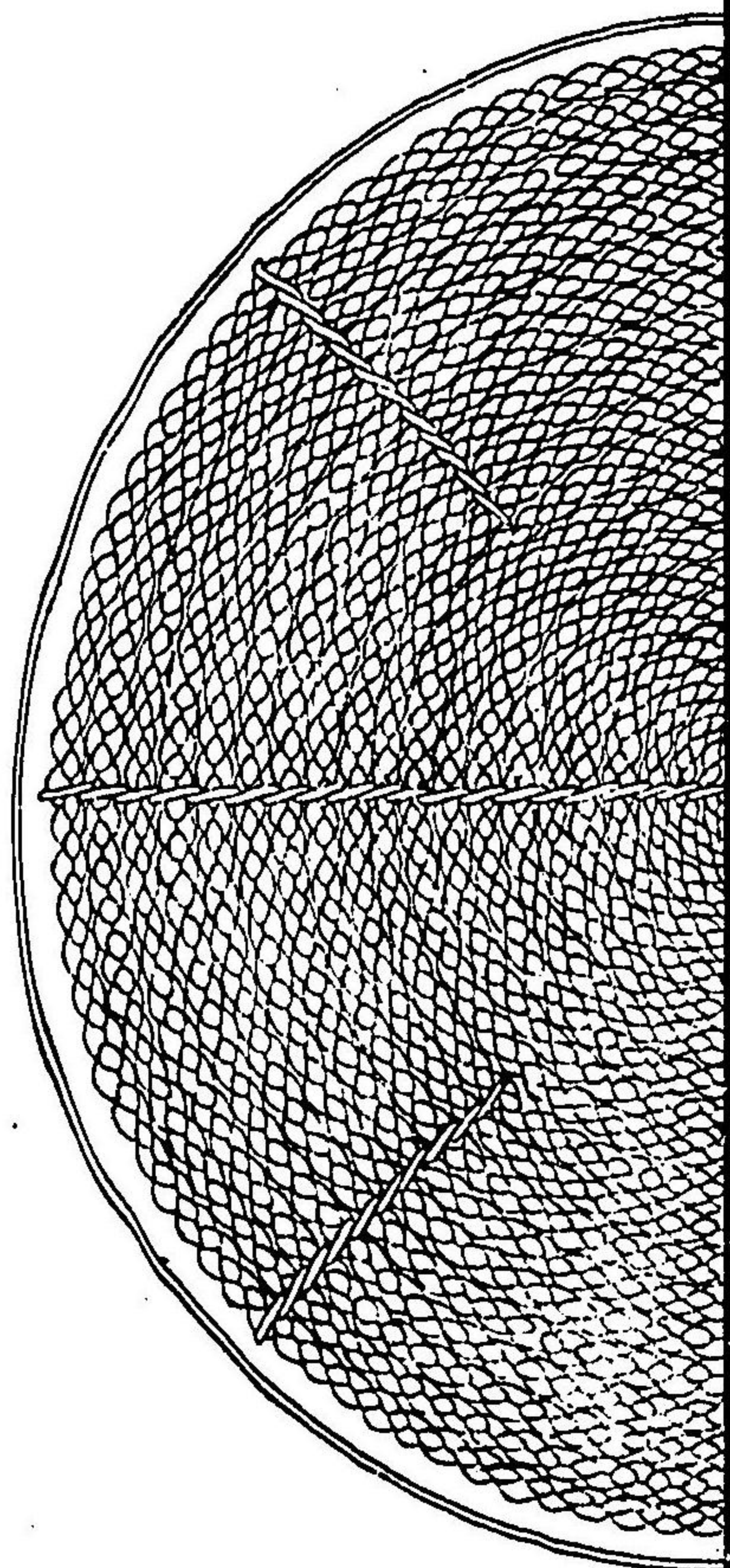
轉して

渦紋と

紙捻

て編

む



成り

表面は紙糊にて扁き皿の如く貼り成り

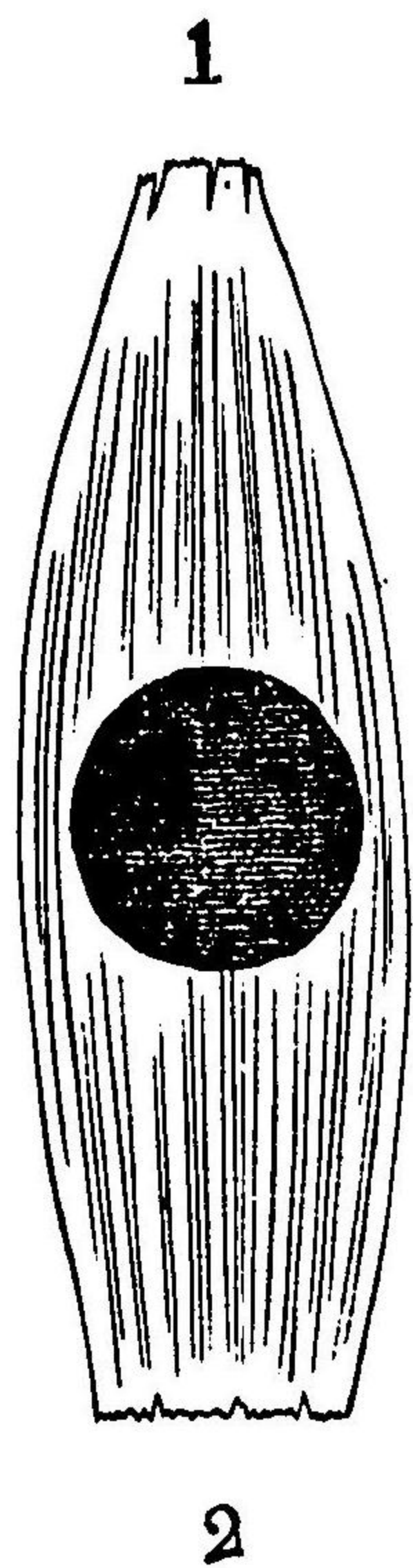
バレンの竹籜の下邊厚くして柔靱なる部、下四五寸は過

れを用を細く割き、線の如くしてこれを細繩に縫ひ、又再こ

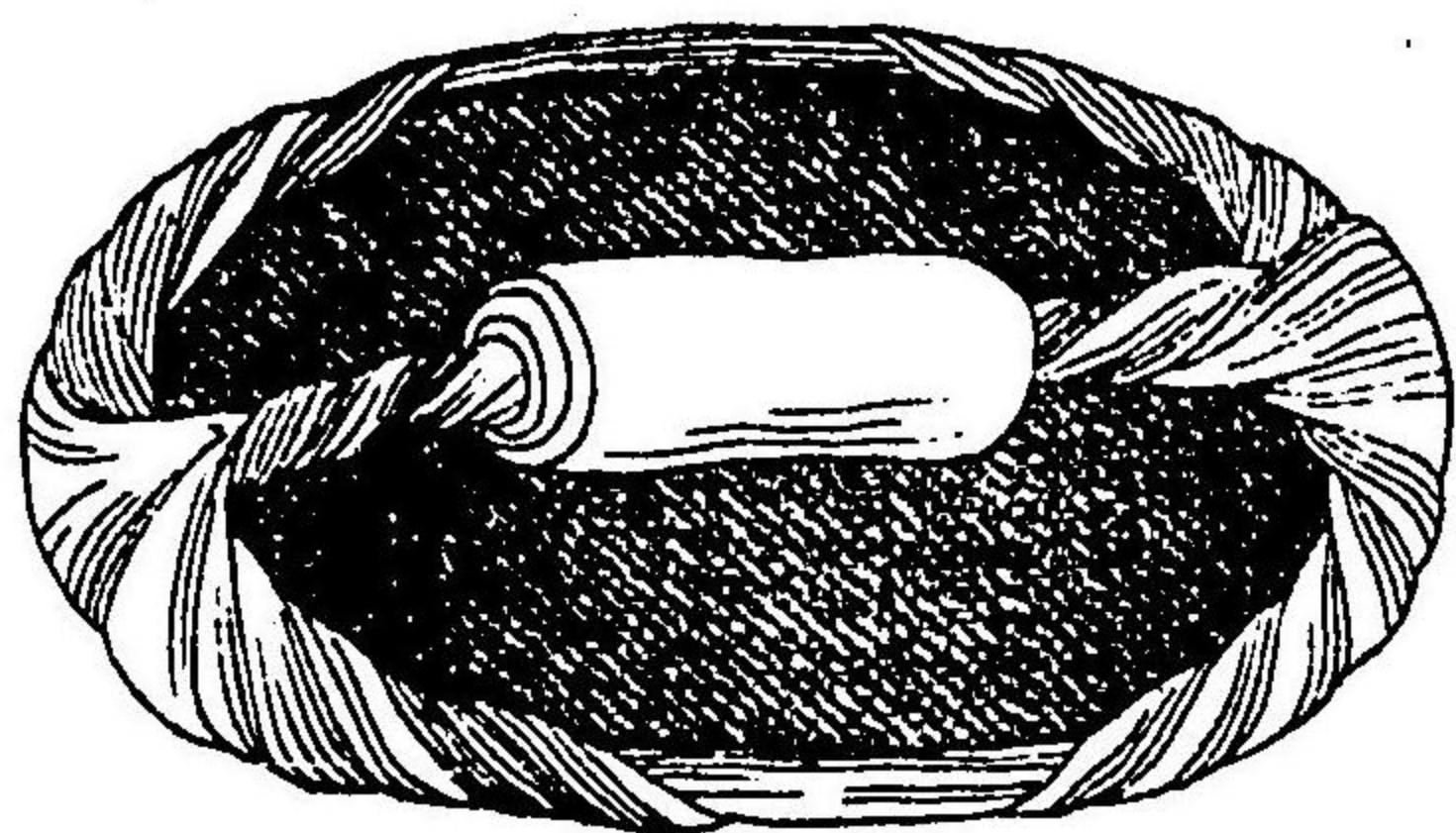
れをより、又三タヒこれをよる、即八條とある、通常これを

用ゐるなり、若細くして精あるハ十二條に至る

右の上と復籐皮より包み用ゐるなり



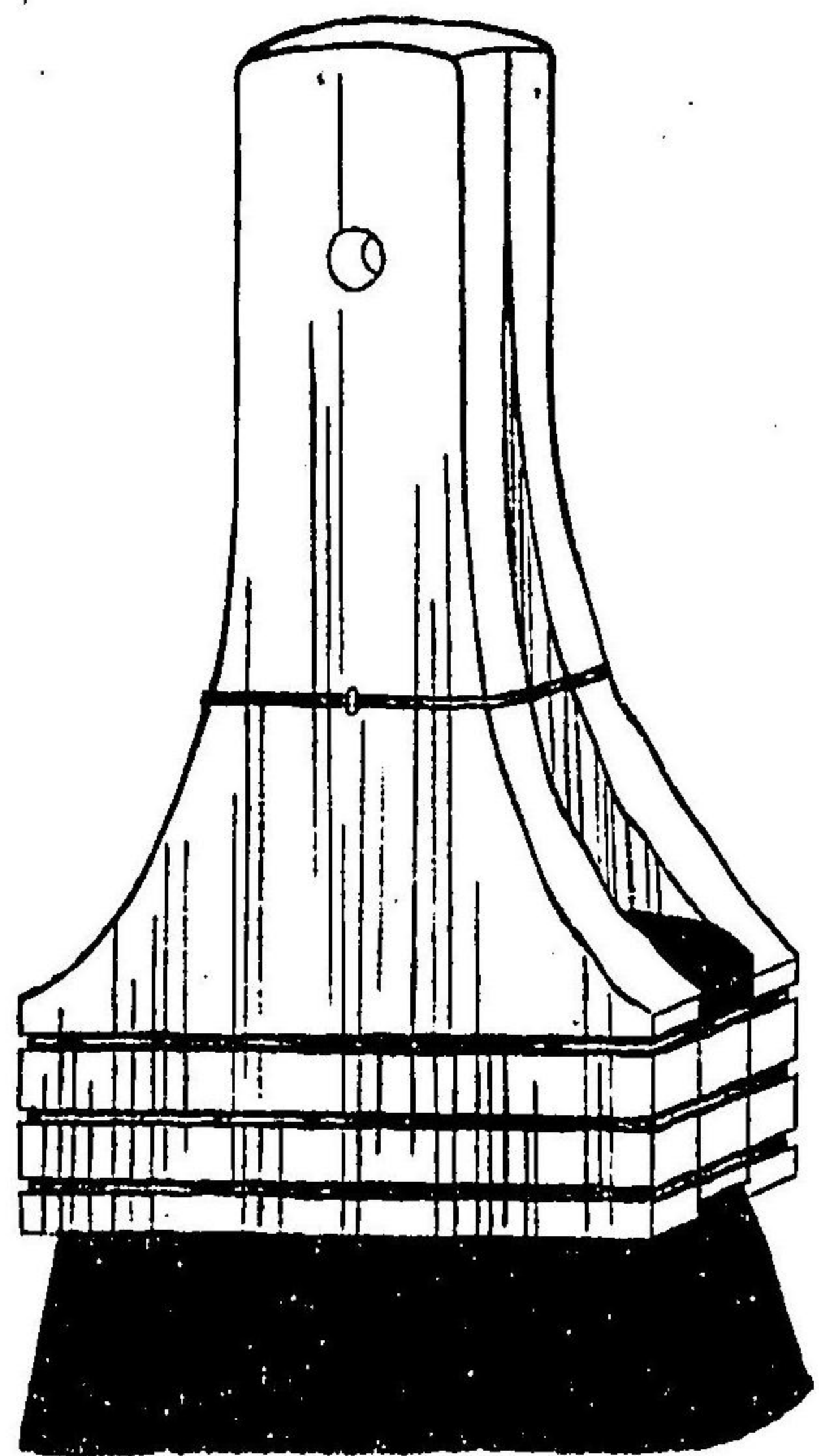
籐皮の四隅を剪り去り四方より疊々包みて12の二所を縫う左右より麻絲を以て結ひ蒂鼻を作る即これと攪り執る



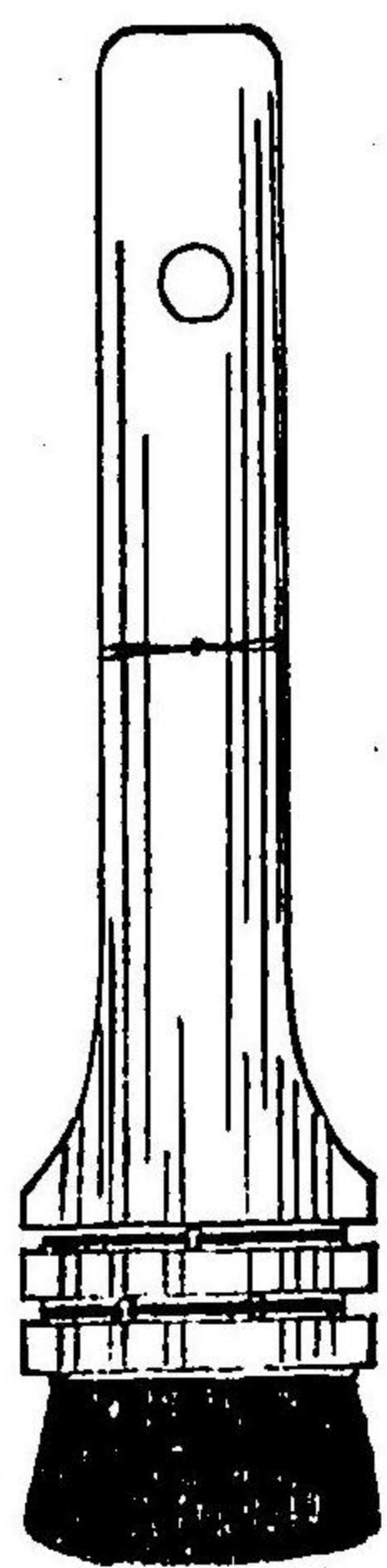
底面微しく麻油を抹紙上と磨ゆる滑おると助く

刷

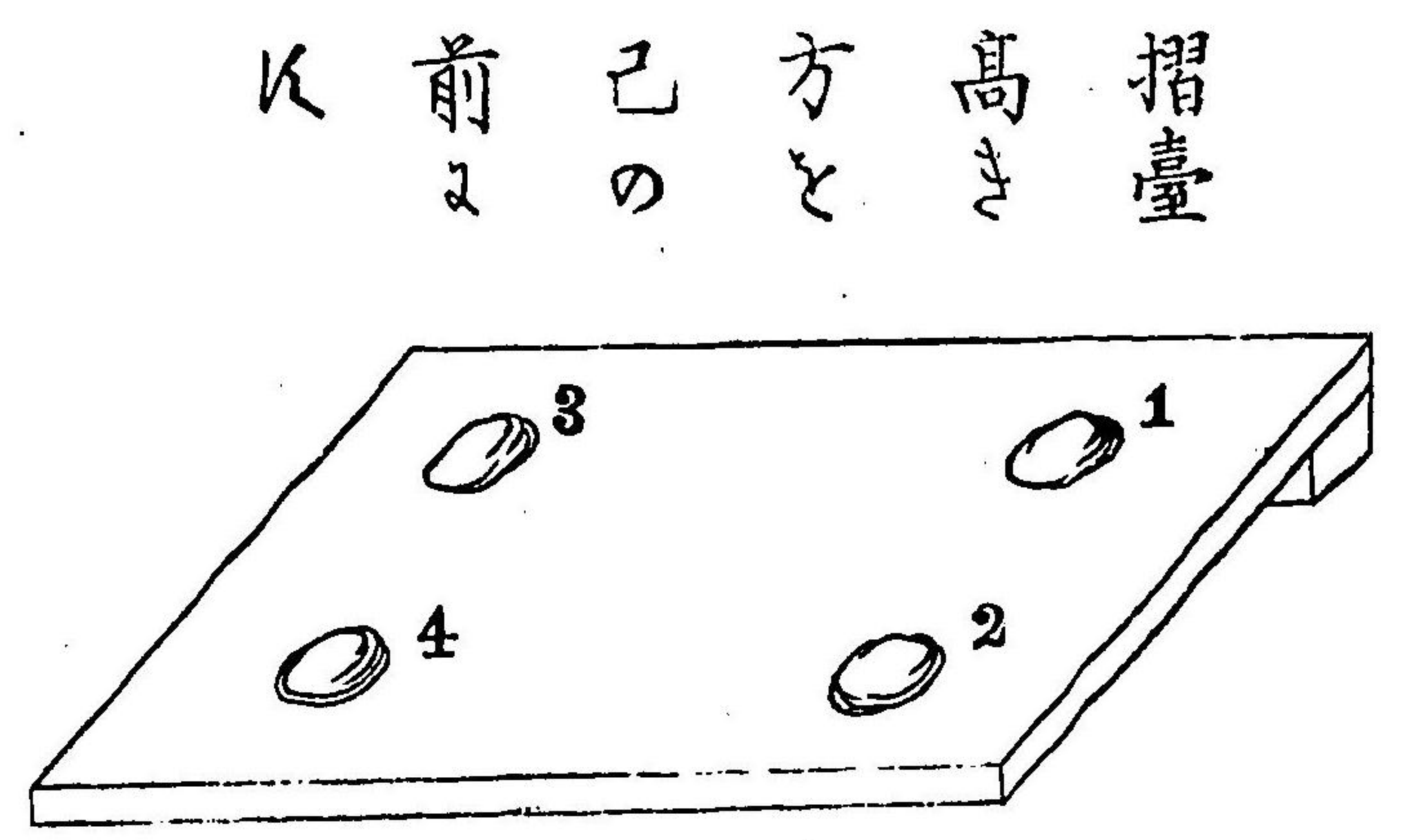
馬尾の本の剛き所を以て作る



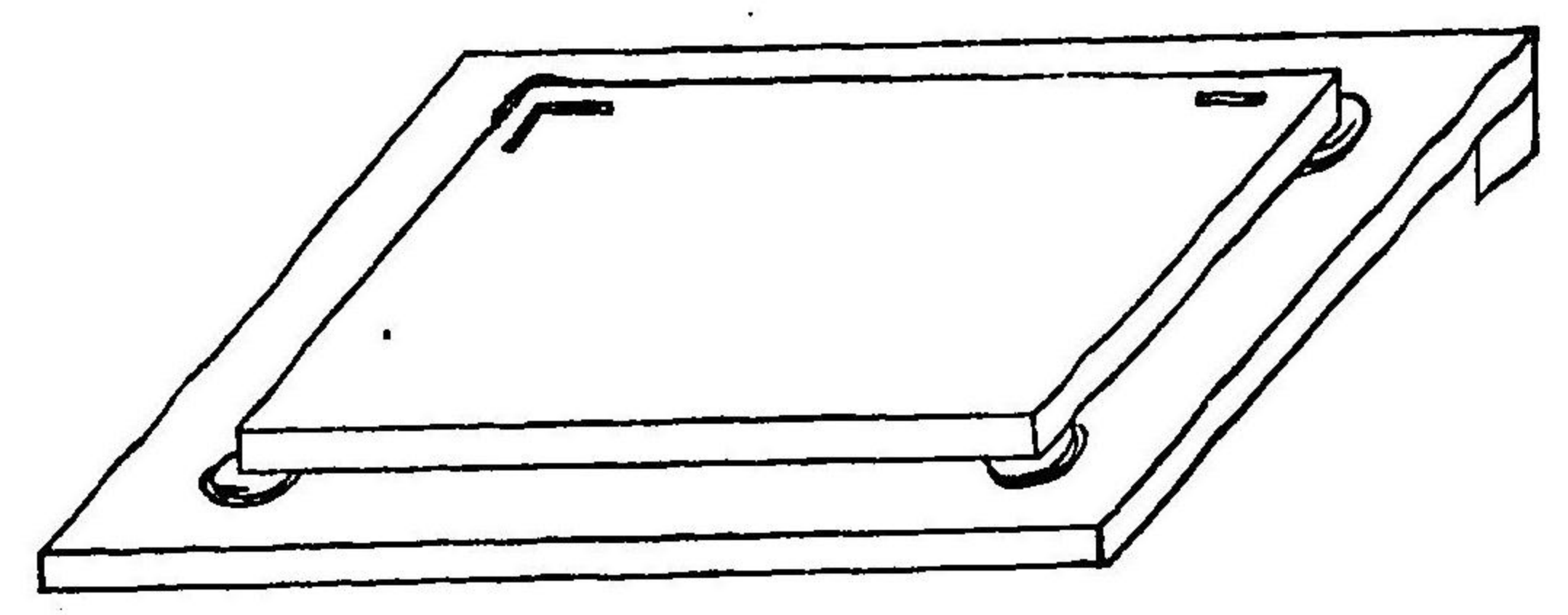
顔料と用ゐるハ其寸小



足一寸餘



1 2 3 4
 の四點ハ
 濕布を疊
 ん刻板と
 載せる足
 とにこれ
 とヤアラ
 と稱ん



摺臺
 よ板
 と載
 せと
 る圖

諸顔料

○紅 細工紅と稱れる臘脂と用ゐるふり其臘脂烏梅ムキウメの水に浸しとる汁と和ん

○青 藍蠟と用ゐ洋青と用ゐる

○黄 棠梨タナシ又石黄シキワウと用ゐ其精ふるハ藤黄センワウと用ゐるあ

○紫 鴨跡草花アマガサの臘脂と和して用ゐる近來ハ舶來

の紫粉と用ゐる古法ハ前よいへる如く落葵ツルムラサキふ

○緑 洋青ハキアヲと和し又ズズは藍アヲらふと和ん

○橙黄 棠梨^{スミ}と鍊丹^{ベンガラ}又臘脂と和^レ

○墨 油烟墨と水と浸し、五六月と經て、木硯中^ニ於て

木片^ニてこれを溶^レ用^カる、又ツヤ墨と稱^スる

ハ、搗盆^{スグバチ}と入れ、火上^ニ置きて、これを溶^レ、これ入

髮等、光彩ある濃墨^ニ用^カる者あり

○金色 鎗粉^ニ膠汁と和^レ用^カる

○銀色 鉛粉^ニ膠と和^レ

○銅色 銅粉^ニ定粉^ニ膠汁と和^レ又蛤粉^ニも用^カることあり

○白色 繪と表^ニし^テる色板と刻^レ其上^ニ紙を置き野

○光澤 猪牙^ニを以て磨^レ故^ニ正面^ニス

○布紋 紗或ハ粗目の羅と畫上^ニ貼^レ枹漆を塗^リて剛

硬^ニふら^レめ畫中所要の部を存^シ餘を刻^レ削^リ去^ル事他の顔料^ニ同^シ

○暈^ム ボカシと稱^ス又同色上の暈^ムをハキカケといふ

皆顔料を塗^リ濕巾^ニて拭^ヒ其界を模糊^ニあら^シ

○其他鍊丹^{ベンガラ}鉛丹^{タン}雲母^{クモ}等用^カる物あり

附 書籍縫綴法

古^ニ始^メて書有^リ一頃ハ、我國も猶卷本^ニして、今猶存^スる

古^ニ始^メて書有^リ一頃ハ、我國も猶卷本^ニして、今猶存^スる

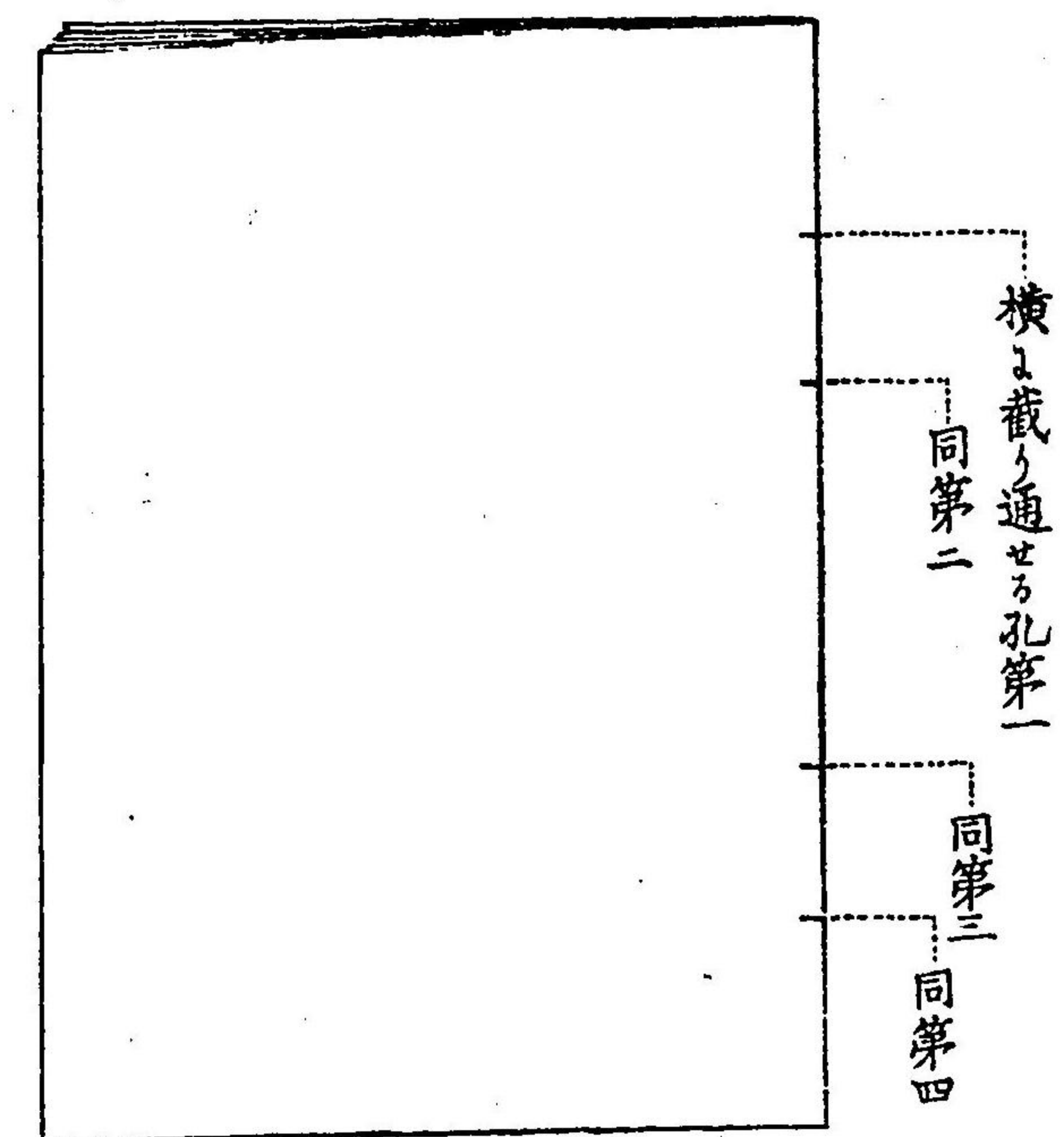
古^ニ始^メて書有^リ一頃ハ、我國も猶卷本^ニして、今猶存^スる

古^ニ始^メて書有^リ一頃ハ、我國も猶卷本^ニして、今猶存^スる

古^ニ始^メて書有^リ一頃ハ、我國も猶卷本^ニして、今猶存^スる

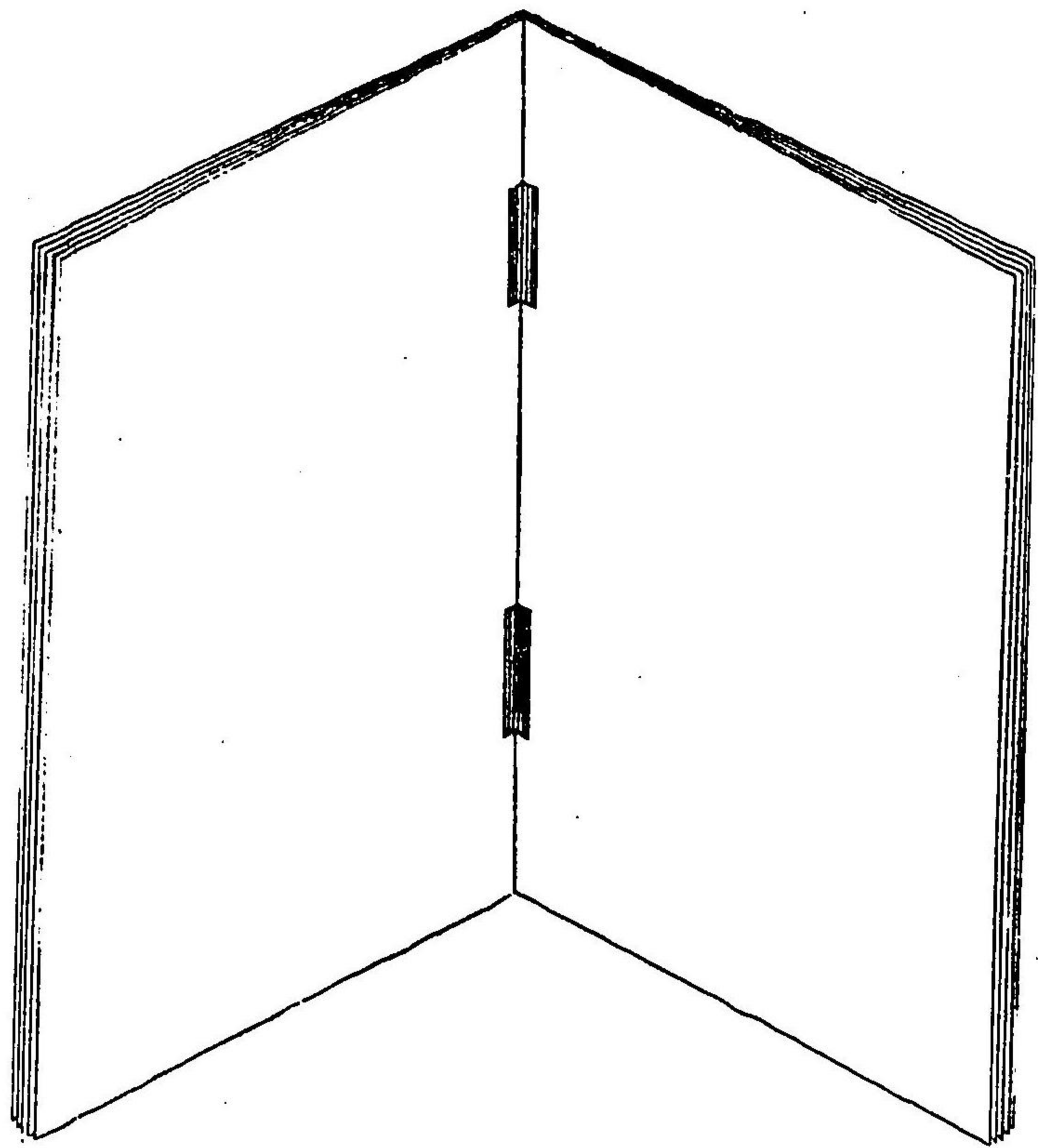
者あり其後帖と製は、是佛經等より轉せしあり、然れとも未目撃せ
 り然れとも、支那の如く旋風葉あるを聞うは、好古小録は古書袋草子
 の名ありと未と唯貼葉オチテフ製せる者、古時佛家供養の次
 これを詳とせり、第書は残りて、往々見ることあり、即二三葉兩折して、其隅
 と綴ち、糊を以て粘せし者あり、又一葉毎に貼せる有り、其
 製六半本として、六半の杉原を六断せし方形をいひ、四密
 家台家より往々存せり、是巻本より轉して、冊子に變せる始
 なるへし、好古小録は、今粘葉の接縫線の如き者希に存り
 二三百年来者縫繼一分廣ハ二分及ひ、糊法可ふらりと
 いふ、然れとも是又未人間に多うらば、これより轉して今

の冊子とふる、其冊子綴法西洋諸籍の如くして異ふは、是
 猶方今希あるり故に、こゝに其綴法と圖に



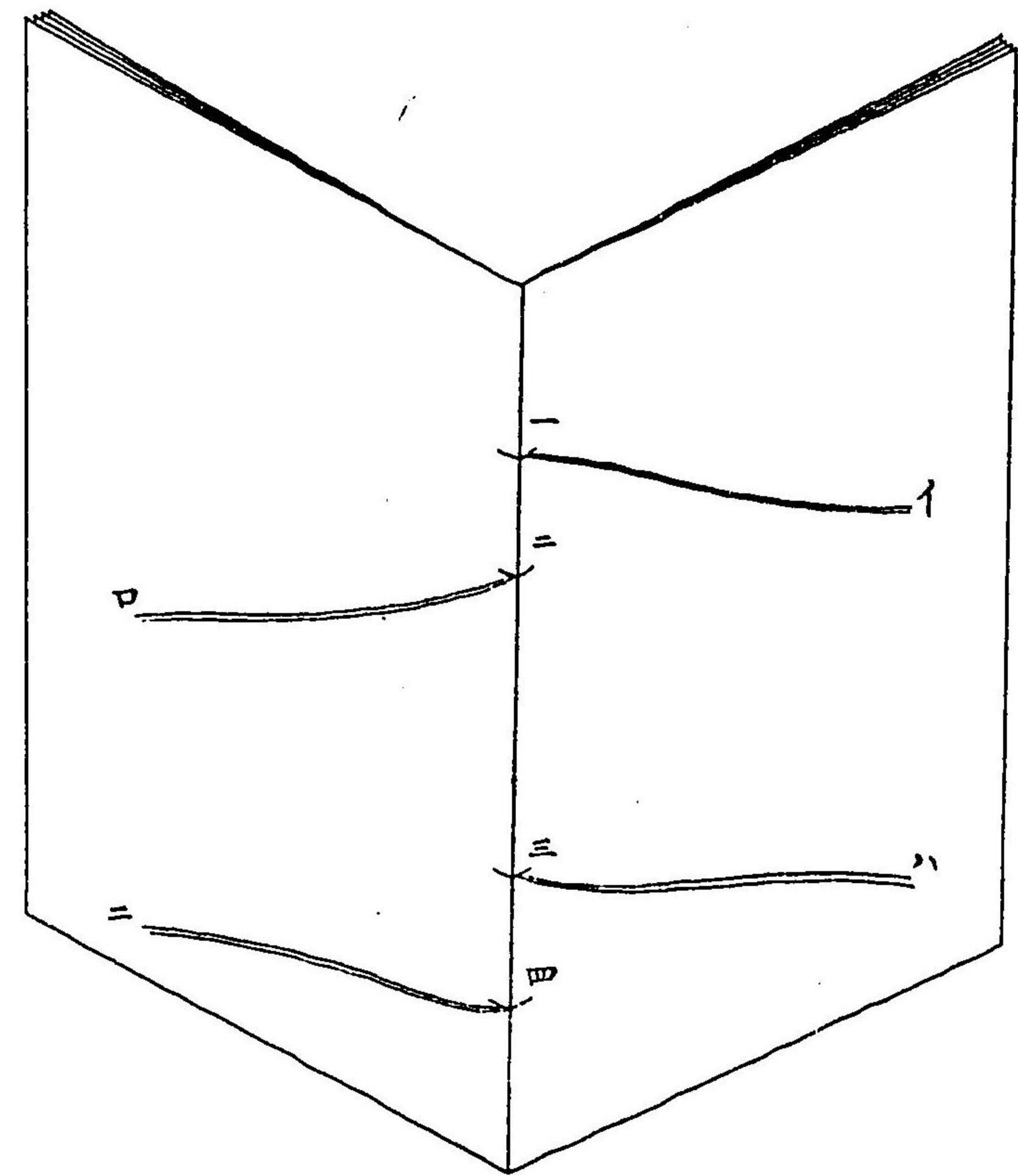
鳥子の全紙と五
 枚或は十枚兩折
 して一紙の表裏
 と書ること西
 洋各國の書籍の
 如し

第一帖の内面



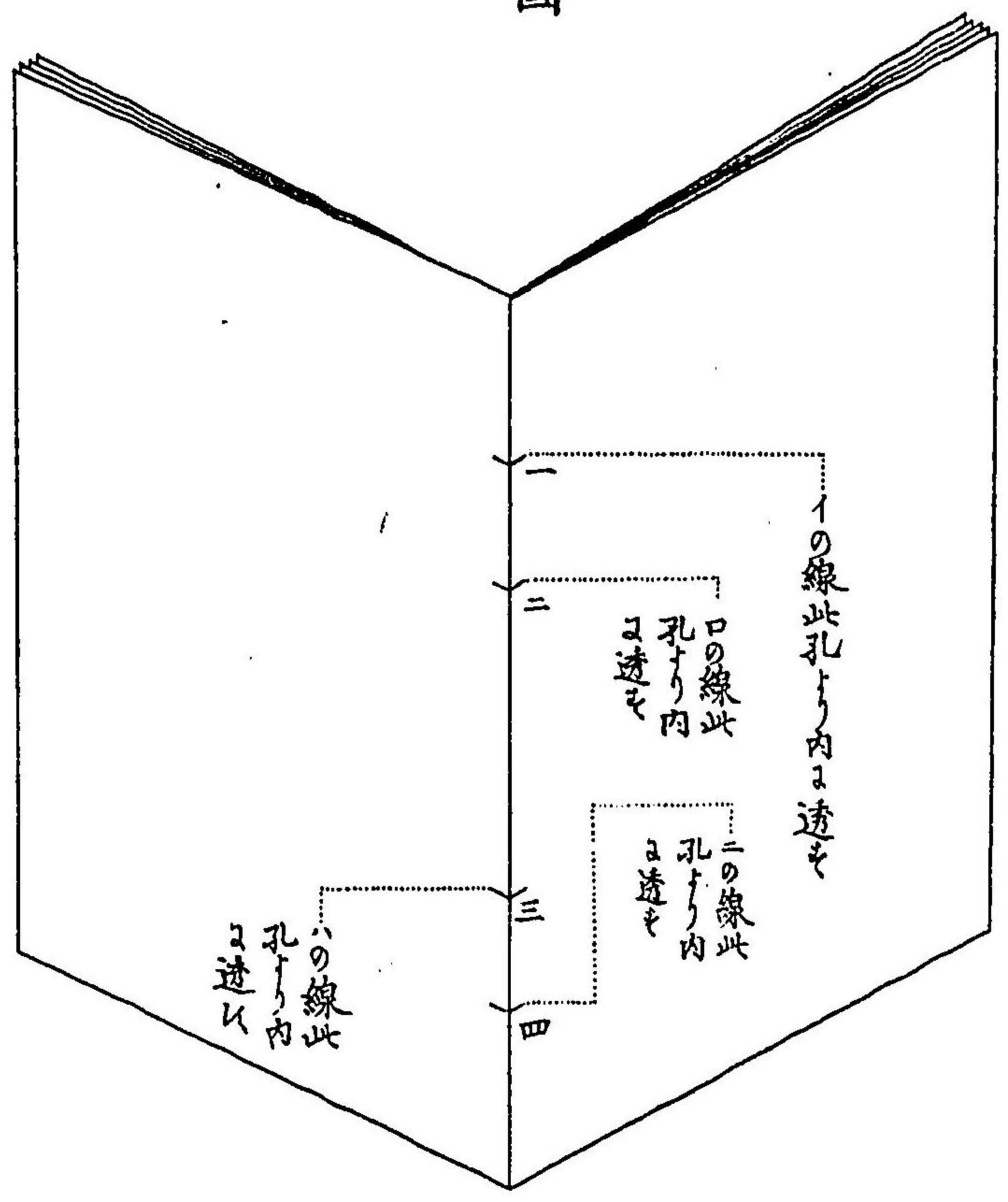
孔より数條
の線を透し
線の端次圖
の如く背面
に出つ

第一帖の外表面



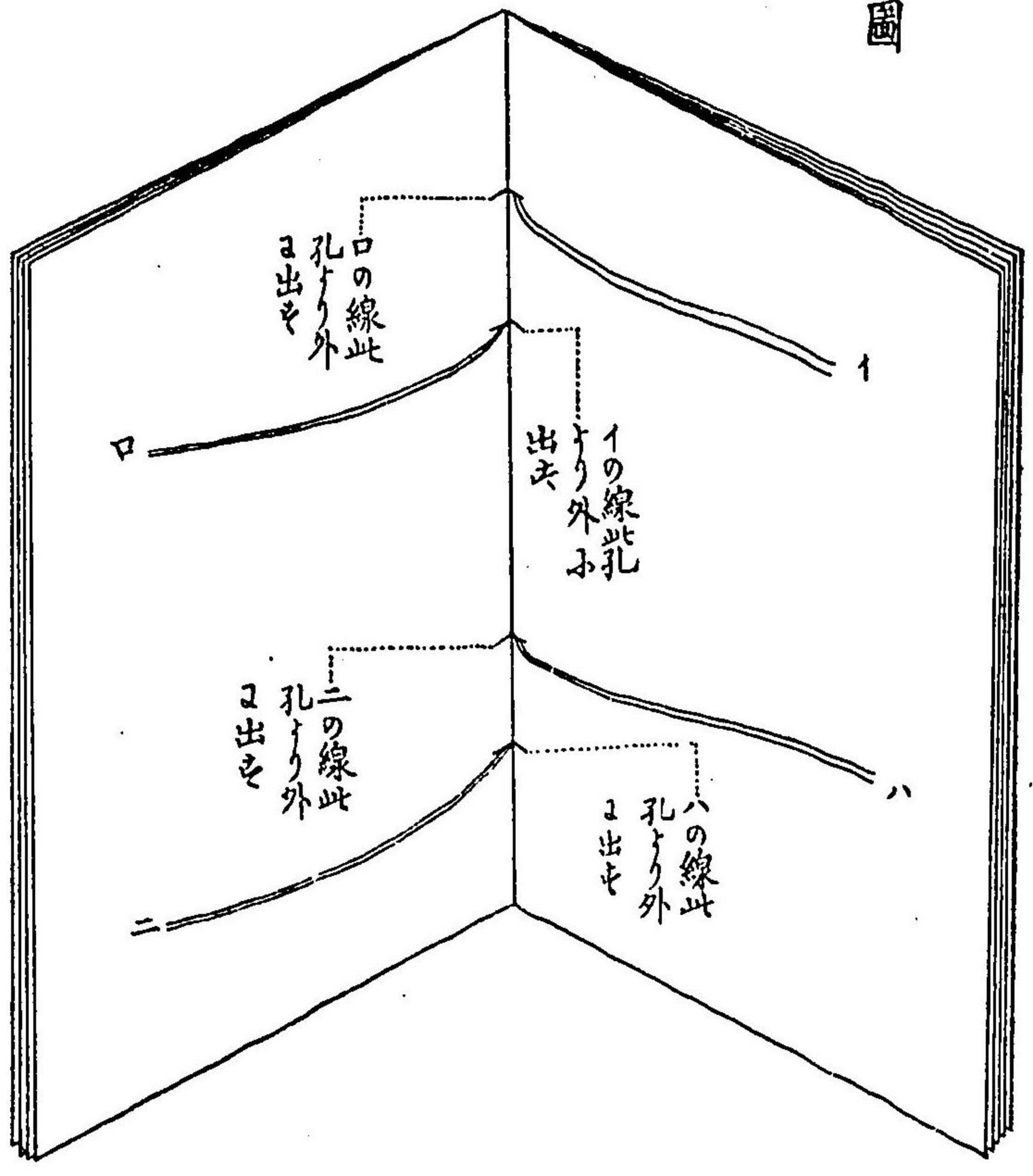
第二帖の外

一圖



第二帖の内

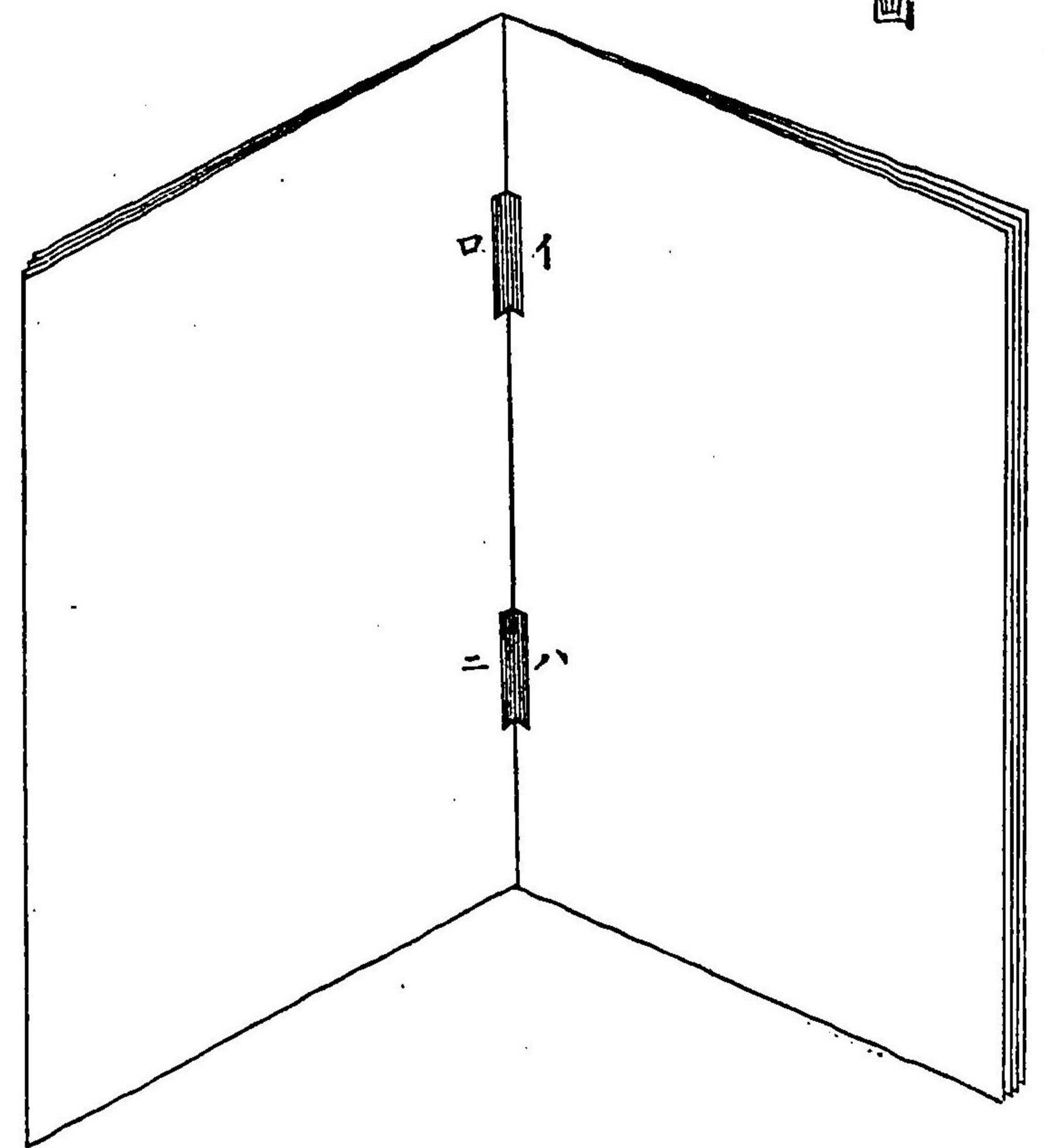
一圖



文部省
大蔵省
工部省
陸軍省
海軍省
農商務省
内務省
文部省
大蔵省
工部省
陸軍省
海軍省
農商務省
内務省

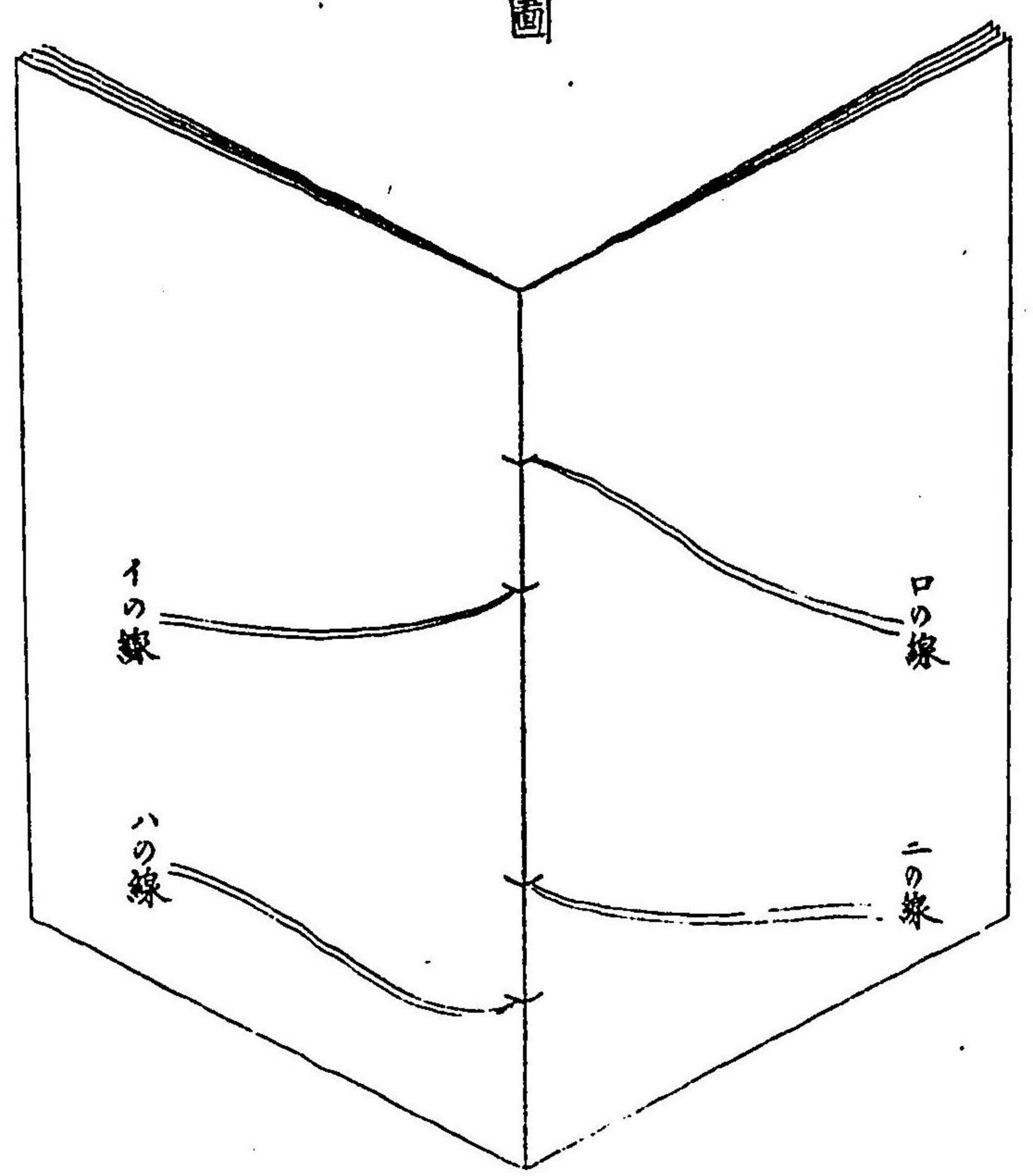
第二帖の内面

二圖



第二帖の外側

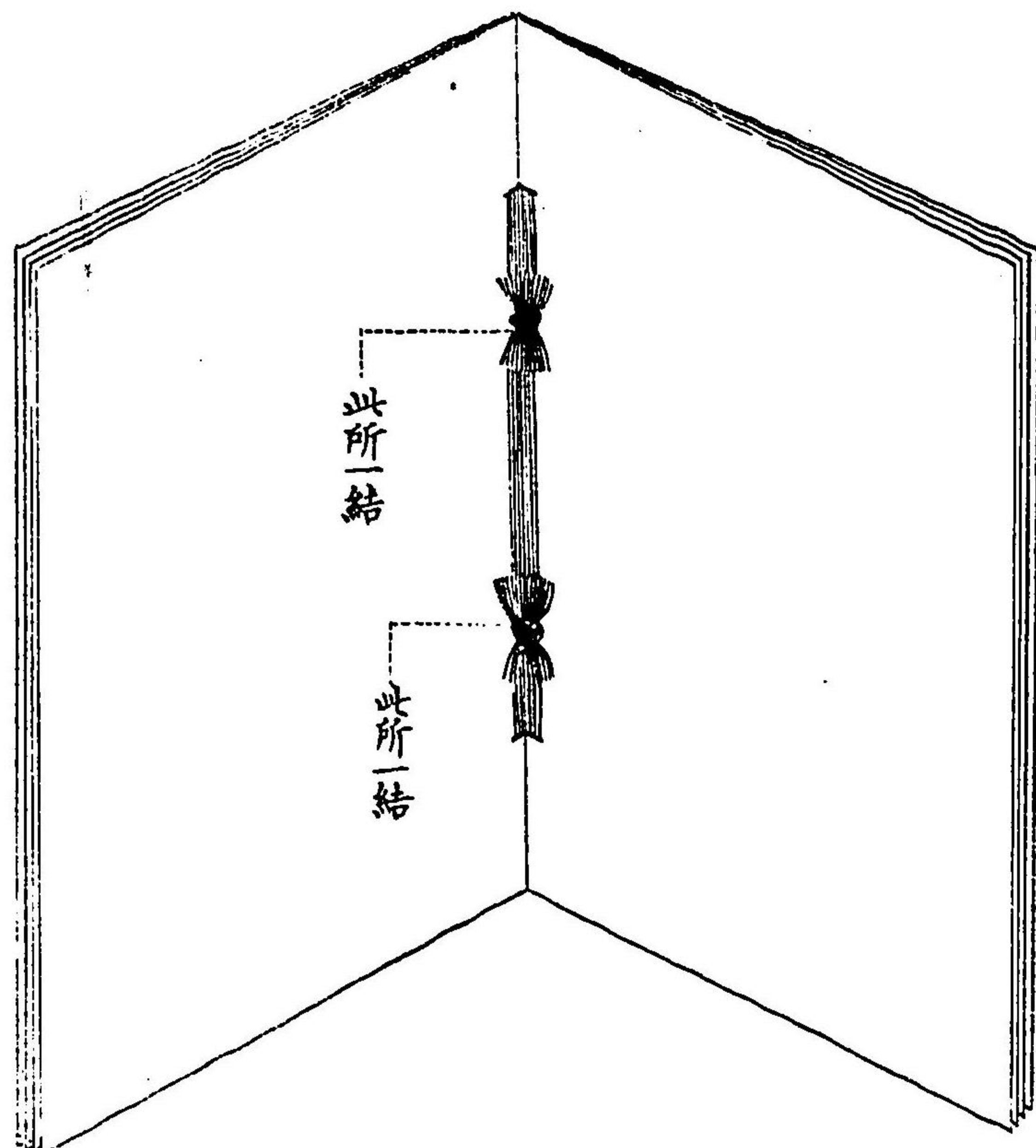
二圖



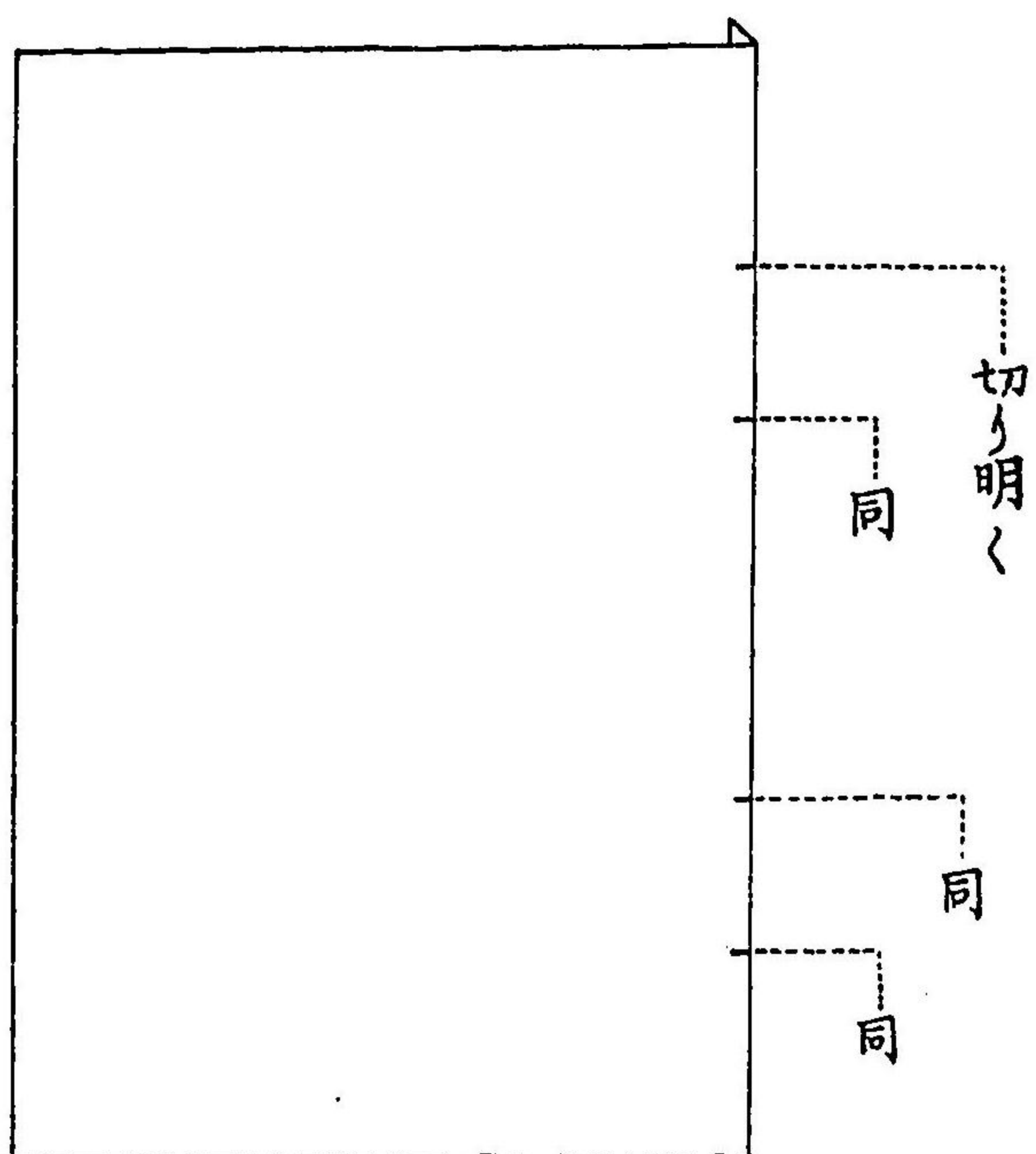
三帖四帖
も并々此
の如く
て未帖
て結ふ
と次の
の如く

二十九

末帖内面



四條の線と
 二三の孔の
 口よて結ひ
 堅む



標紙の錦綾
 を用ゐて初
 帖末帖の縫
 線間よ挿し
 入れて糊貼
 き

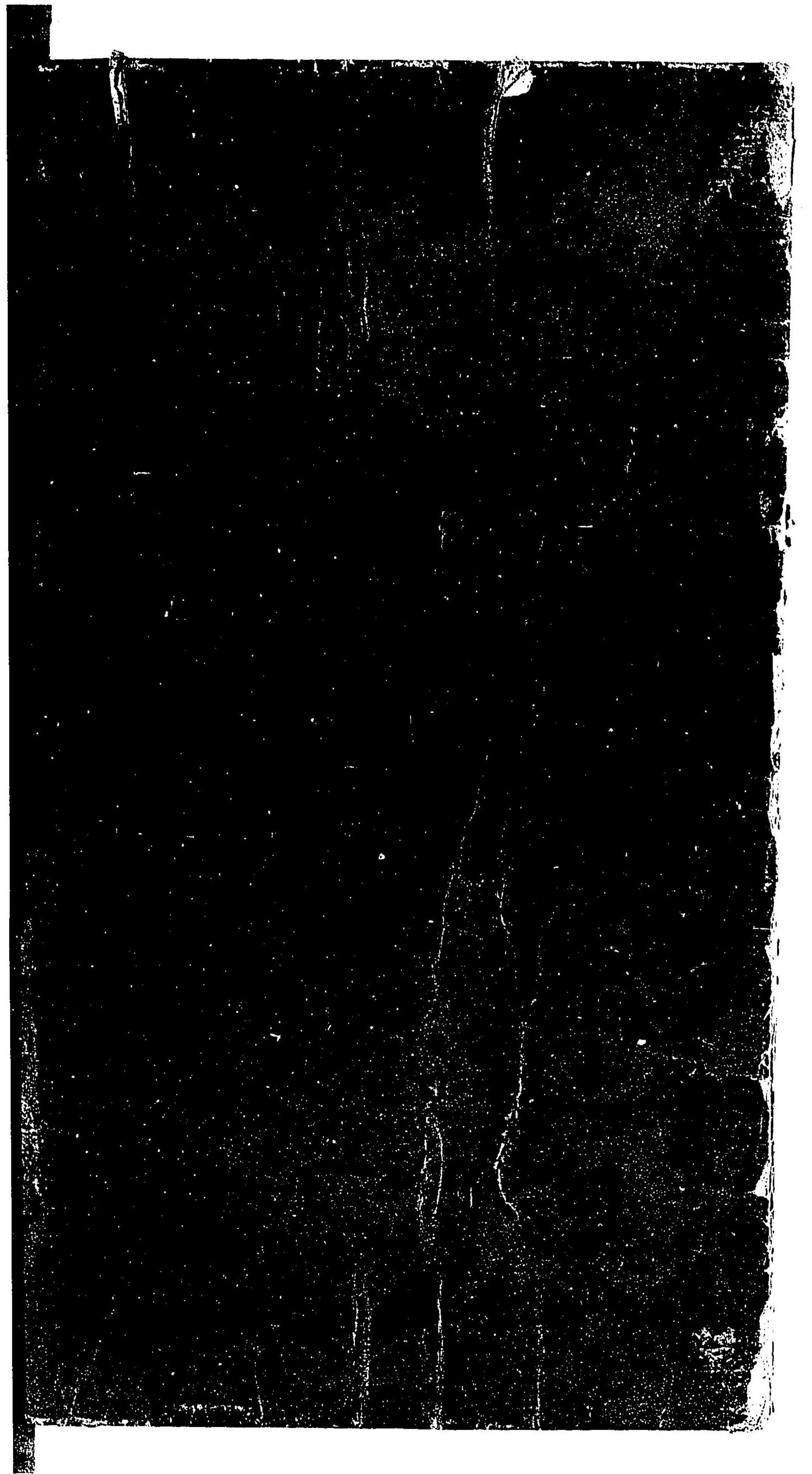
方今の書籍綴法も船載は倣ひとるう正平本論語以下皆
今の如く但し縫際差廣きのこあり

文藝類纂卷八大尾

138
8
44

文藝類纂

136
11
44



138
合4
44

文藝類纂

七八
止